大支那の理解

0000715000

0000715-000

302.22-G65d

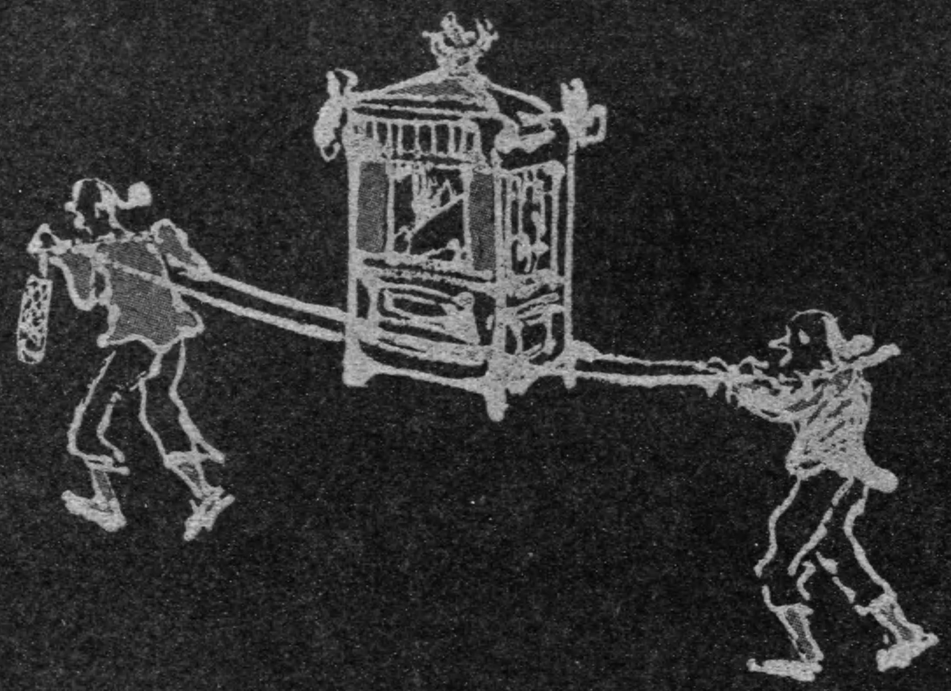
大支那の理解

後藤朝太郎・著

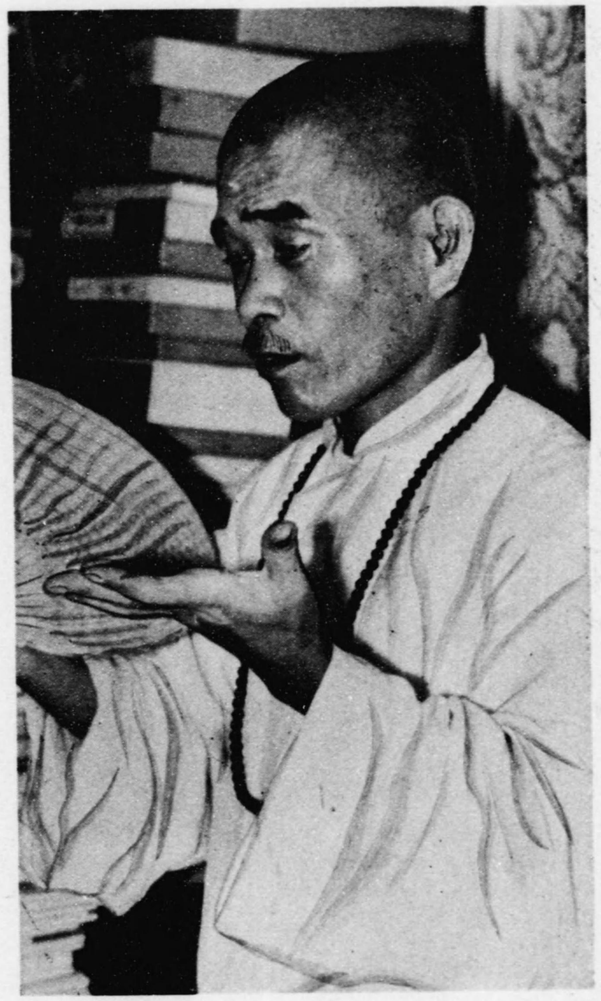
高陽書院

1938　5版

AAB



大文郎の理解



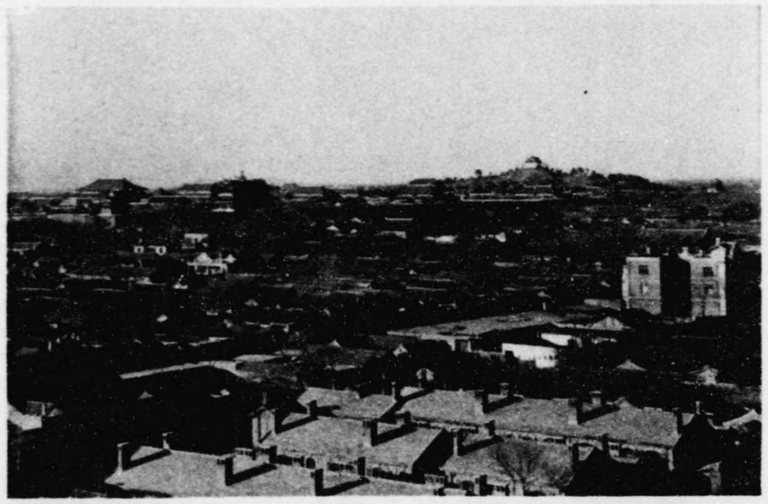
廣東の水團扇を手に
大支那を語る

石農・後藤朝太郎先生

302.22
G65d

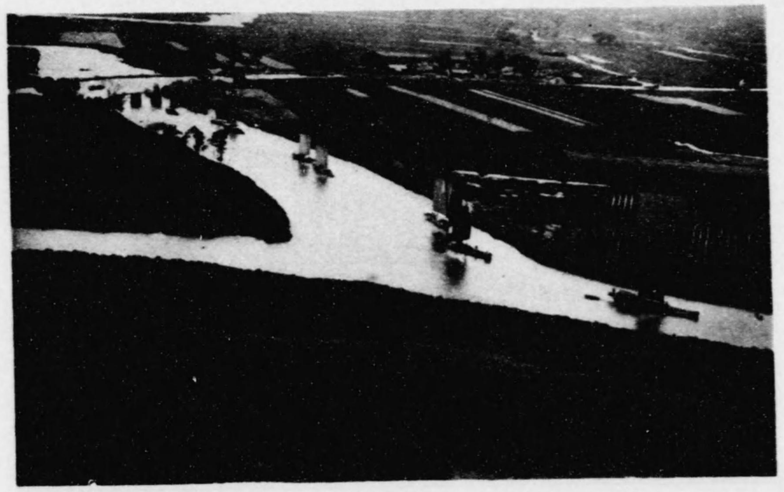
31277

名門舊家に寶藏さるる祖先の畫像

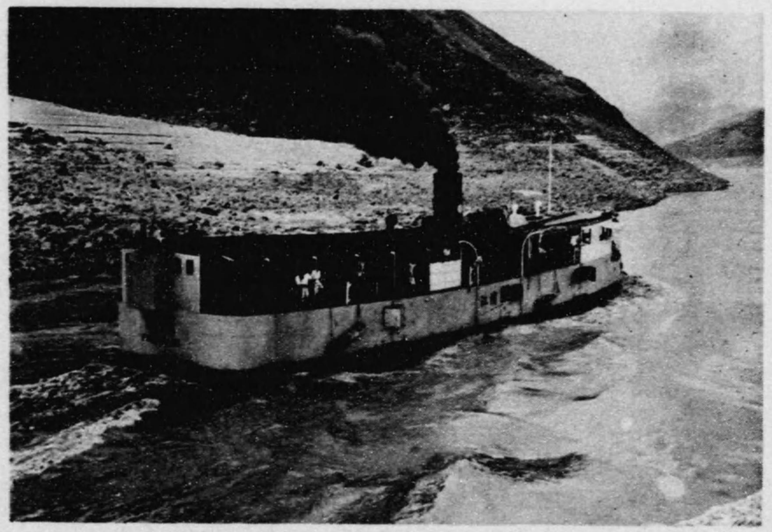


大都城北京〔遠かに景山を望む〕

名門舊家に寶藏さるる祖先の畫像



運河クリークに見る江南の農村風景



四川重慶從上巫山峽を通江する輸船

浙江杭州城内の土豪胡氏邸の中庭

大支那の理解に序して

大支那の舞臺は、日本に比べると、桁ちがひに大きい。その大きい事は此度のいくさで黄河や長江の堤防決潰から被害を蒙つた農民が、幾百萬といはれる數に達した恐ろしい事實からでも判る。長江の中流、湖北方面の洪水は幾度か自分も現地で親しく見てゐるのであるが、とても大規模なもので地平線の向ふまですつかり泥海と化してしまふ。村落や樹林がところどころに浮島のやうに指さされるのみだと云つた風なのである。大陸支那の事は、この大洪水一つをとつて見ても判るやうに容易に日本の物差では測り知ることの出來ないものがある。日本にゐて地圖の上で之を眺めたり、机上の理窟をこねたりなどしてゐる程度では、到底本當の大支那の姿を納得することは出來るものでない。よしんば想像をたくましうして廣大なことだけは判つたとしても、大陸の自然そのものの持つおほ味のところから出る流芳と云

ふものに至つては感受することはむづかしいであらう。

又大支那の自然を背景として發達した過去幾千年の社會、文化、經濟生活、自治の力、風俗民情の機微と云つた方面のことになると、恐らくは實地に現地で當つて見ること以外にはガッチリ掴めるものでない。學校の歴史や地理の時間に聞かされた話などとは大分調子が違ふ。今からでも皆本腰を入れ、具體的に一々見直さなくてはいけないことばかりである。國土の狹い日本では統制もつき易く、萬事が小固くミッチリと行ける。從つてとかくからだに注射して、直ぐ效力の見らるゝのと同じやうに物を考へたり自分ぎめに物をきめてしまつたりする傾きがあるのだ。そこへ持つて行つてすべて科學のシステムで片付け得らるゝものだと思ひ込み、桁の違ひといふことを考へようとせぬ。アルミの小鍋をかけて湯を沸かしてゐるものに、七尺も八尺もある大きな平釜の加減は判らぬ。その大分勝手の違ふ違ひ振りに就いて、日本とは段違ひのことを先づ理解する必要があるのである。

支那は見る人によりどうにでも色々に見られるのである。が之を手取り速く注射ですぐにといふ譯の物ではない。アルミ鍋式にオイソレと沸かせる譯のものではないのである。無暗にあせればあせるほど却つて深みに引ずり込まれてしまふ。大支那には、あせり氣味の考へ方や扱ひ方は全く禁物である。要は悠々迫らず而かも無駄のない巨歩を印して行かねばならぬのである。笑つて答へず心おのづから閑なり、といつた風懐裏に百年の大計を立つると云つた要領で行くことにしたら如何であらう。然しとどの詰りは人である。腹藝の出來る人なのである。人にあるのだが、その人が眞に大支那を理解して、本當に大陸支那の奥底に流れてゐる幽玄味の掴める人であり、そこのコッの判つた人でなくてはならぬのである。自分はこゝに江湖の士と互に對話し、敲いつて音のする識者の心絃に聊か觸るゝ所あるべきを思ひ、本冊子を公にしたわけである。極東未曾有のこの重大時期に際し、その人が社會人たると家庭の人たるとを問はず、又出征中の士たると銃後衣を擣つの婦たるとを問

はず、一人でも多く大支那に眞の理解を持つてゐてもらひたいとの念願抑へがたきものがあり、友邦支那の理解への大使命を果たす資料にもと考へ、こゝに本書を提供した次第である。もしこの點に本書が多少なりと參考になるところがあるならば望外の幸とするところである。

昭和戊寅十三年八月　漢口バンドの大水を前にして

東京小日向臺僑居
後藤朝太郎

しるす

凡例

一　大支那の事象として考へられてゐる事柄も、別段に近代科學の範圍の外に出てゐるわけでない。けれども、そのいくら支那料理を滿腹するほど喫しても一向に障る試しのないのと同じやうに、理外の理が全支の雰圍氣に充ちみちてゐることに、先づ着眼してゐてもらひたいのである。常に理論を超越した、澁い深みのある天地を以つて支那人の世界觀と見ることが肝腎なのである。一言で云ふと、空院落花深しと云つた境涯に身をおき、支那の事柄は靜かに味つて頂きたいものであると思ふ。

二　大支那の理解は、細菌學や衞生學の專門家から見ると、とても堪へられぬくらゐ非衞生的であり、又非文明的な心的作用であると考へられることもあるであらう。長江の濁流を汲んで煮炊きしてゐる水上生活者は幾十萬ゐるか判らぬ。ボーフラのわいてゐる大甕の側を叩きボーフラを沈下させ、水を汲んでゐる住民がどの位大支那にゐることか。それを飲んで死ぬるやうな貧弱なものは少孩のとき既に死んでしまつてゐるのだが、ともかくも黴菌のゐる不潔な環境に取り卷かれ、それといつも鬪ひ、しかもそれをよく突破して來てゐるのがこの大支那の住民な

のである。蠅だのボーフラだの不潔なものに對していつも長期抗戰の心構へでゐる人々が現に四億八千萬からゐるのである。

三　大支那の理解はこれらの事實をよくよくこなし、之を達觀するだけの襟度の持合せがないならば、大支那に漲るあの清濁併せ呑む底のグロ氣分は腑に落ちないであらう。淡白とか、瀟洒とか、率直とか、輕快とかいふ事のみを人間本來の美質なる如く見てゐるものにとつては、遂に大支那の理解は出來ないまゝで了るであらう。それでは大支那そのものゝ理解どころか、本書收むるところの內容が本當に判つてもらへぬであらう。

四　本書は小冊子であるが、二度三度と讀み返すことによつて本當の味らしい味が出て來ると思ふ。著者自身が云つてはをかしいが何遍も、之を讀みこなすならばその活字をとほして理外の理の而かも割り切れぬ高遠なるものが見出されることと信ずる。年わかき人士にはその匂ひと深みに充ちた支那世相の內容が嗜好に合はぬかも知れぬ。むしろ老莊氣分とか、文人肌とか云ふものゝ持主の方に向くであらう。年少の人には多少讀み返さるゝ間に大支那本來の持ち味がわかつてもらへるだらうと思ふ。

五　日本人の支那に對する氣持ち又その見方は日支事變前も、後も變るところはあるまいが一概

に支那の見方といふと唯政府筋の要人ばかりを見てゐた。訪問をしても要人、論じても要人と云ふ風で要路の人ばかりをいつも對象としてゐた。本當にその肉となり、血となつてゐる實質的の人間を考へたことがないと云ふのがこれまでの實際であつた。これで果してよいのでらうか。折角その大支那を理解しようといふのに、要路の官邊ばかりに目をつけて土臺になる民間の各層を見ず之を等閑視してゐたと云ふ從來の態度は朝野共によろしくなかつた。齊しく大支那凡百の事を云々せんとするものは、先づその態度を改め民衆の中、實社會の中味に聯絡をつけて行くべきでないかと思ふ。

六　大支那を理解せんとする人は先づその人の胸中に暖き同情の心を持つことゝ、優越觀を以つて高く臨む態度を棄てゝかゝること、この二つの用意が出來ないことには何にもならぬ。一面には支那の事は氣兼ねなどしてゐたら何も出來ぬ。專制獨裁主義で行かなくては何一つ統制することも出來ないと云ふ事實は認める、しかし戰後の人心を收攬し導くに王道主義の指導精神で行かうとするには、誰れが何と云つてもその同情、思ひやり、忠恕を本とする東洋的倫理觀が深くその人に閃いて來ないことには普遍的にひろく理解することはむづかしいことだと思ふ。

七　本書はつとめて大支那に行く智識の豫備的部門について叙べたものである。あの大きくて古

い、又複雜性に富んだ大支那の民族性を理解しようとするにはよほど全般的にこなれた心を持つてそれ〴〵の視野を察するのが本當である。古書に見えた事例、古傳說に歌はれた文學、畫卷に窺はるゝ風俗、西人の紀行文に見えた奇習、之等はすべて皆採つて以つて理解の材料となすに足りる。唯支那には風土、風物悉く支那流のにほひがあり支那流の氣分聯想がある。又そこには支那式の第六感がある。時には言外の第六感で直感せらるゝ事例も少なくないのである。

八　自分の體驗では少しく燒きの廻つてゐる方かも知れぬが、洋服でカラー、カフスに制せられた氣分の下で支那の話をするは、聽き手にピッタリ來ないだらうと云ふ物足りなさがある。大支那の理解は先づその匂ひ、雰圍氣の傳達から始まる。それには自分自らが大陸氣分に浸つてゐることが肝腎だと思ふ。大支那を理解しようとする者は、不取敢その智的の理解ばかりでなくふうわりした情趣の理解の出來ることが先づ必要なことである。理智的のことに這入る前に先づ情操方面の判ることが大事である。日本ではいつも理屈理性に重きがおかれ、情趣の方面は輕んぜらるゝ傾きがある。こゝではこの點を序でながら强調しておきたいのである。これは支那を理解する上に一番土臺となるべきものであると信ずるのである。

大支那の理解

目次

前篇　大支那に住む人々……〔一——一六四〕

大陸氣分と島國根性……一

教育日本の一大缺陷……四

國際進出の疑はるゝ學校出身者……七

自給自足の教養……一〇

支那の青年と日本の青年……一三

支那人にピンと來ぬ帝國主義……一六

日支人性格の相違點……一九

支那民族のあきらめ方……二四
支那に安定を望み得べきや……二七
絶對的安全地帶——租界……三〇
支那にとつて迷惑な文明……三四
絶對的の自治建設……三九
關稅自主と地方徵稅……四三
大陸人の衣・食・住……四六
生活程度の問題……五一
宣傳技術に缺くる日本人……五六
鄉に入らば鄉に從へ……六〇
濁々併せ呑む大陸人……六五
支那社會を動かした共產ロシア……六七

豫斷を許さぬ支那社會の動き……七一
支那人の生活に見る悠久の姿……七六
支那民族の日常生活への理解……七九

大陸人の面貌……八五

大自然の表現……八六
藝術的な相貌……八九
溫雅なる相貌……九五
滑稽なる面相……一〇三
相貌が齎す悠然たる會話……一〇四

支那民衆生活の種々相……一〇九

家庭生活……一一〇
社會生活……一一七
自治生活……一二二
水上生活……一二九
穴居生活……一三五
農村生活……一四〇
馬賊生活……一四五
兵隊生活……一五〇
華僑生活……一五九

後篇 大支那のにほひ……〔一六五——二五六〕

大自然の背景……一六七
濁流禮讃……一六八
長城・運河・クリーク……一七四
宮殿と墓陵の大規模……一七九
編纂の大業……一八四
大陸的火車……一八六
支那人の腹藝——人間動物一體の世界……一九四
支那人の腹藝——列强操縱の祕訣……二〇〇
奥底の知れぬ生活斷面……二〇七
不老長生……二〇八

貴賤貧富……二一三
暗殺陰謀……二一七
社交辭令……二二三
面子と社交藝術……二三八
娯樂風景……二三六
射倖心……二四一
賭博三昧……二四三
麻雀迷……二四七
手話……二五二
迷信……二五八
祕藥……二六二
風土病……二六五

支那旅社……二六七
紅燈街……二七三
貨幣風俗……二七六

料理・阿片・香煙……二八一

社交としての食事……二八一
本場の支那料理……二九二
卓上の社交……二九五
慇懃極まる乾杯……二九九
家庭料理……三〇一
阿片の描く世界……三〇六
阿片窟……三〇七

日常生活の表裏……三二一
車中の香煙……三一六
奥地に見る喫煙風景……三一〇
王侯の香煙・苦力の香煙……三一四
細民御用ゴモク煙草……三一六
嗅ぎ煙草の魅力……三二五
支那の刻み……三二九
永久に摑めぬ大支那の正體……三四一

―目次終―

前篇　大支那に住む人々

大陸氣分と島國根性

教育日本の一大缺陷

支那の青年の行きかたを見て、日本に歸り日本青年の行きかたを見ると著るしくその間に相違がある。教育の罪にすべてのものを歸することは考へものであらう。がしかし、又或る程度まで日本の教育方法なるものがあまりに溫室的、微溫的であり、また餘りにうはすべりのした文化的であるが爲めに、著るしく青年の對社會的教養、並に對國際的教養の上に一大缺陷のある結果を生じたものだと思はしめらるゝのである。

抑も日本の學校教育は、餘りに社會の事情と沒交渉の事を注入することにのみ汲汲としてゐて、學生生徒を一種の機械化してしまつた結果、全く潑溂たる生氣を失はしめた事實がある。又その教へてゐる教授そのものの方も單なるタイピスト的となり唯教師の一言一句を筆記直寫させることのみを以て能事となし、頭腦の鍛練とか、その實際的教養とか云ふものは、殆んど眼中に置いてゐない。又その邊に殆んど自覺のなくして唯型の通りに繰返してゐると云ふこと以外に、たいして意義のある教授振りを見せてゐないのである。殊に浸浸乎として日進月歩の社會事相を目前

に控へて居りながら、時代相に沒交渉な教へかたをして、それが最も適切なる善處の方法であるかどうかの批判力さへもなく、唯古い學問の切り賣りをやつて、それを繰返してゐるのである。而もこの傾向は上級の學校に到るほど甚しいものがある。これが最も恐ろしい弊害を今日に殘してゐる。又教へられてゐる學生の方でも無我夢中であり、何等その學科目から生き生きした彈力性のあるものを學び得てゐない。唯その先生の講義に見る聲のみを鵜呑みに聞いてよい加減の當て字を書いたノートを作ることだけしかしない。これが專門學校乃至は大學の學生の得物と云ふことになつてゐる。お安くない月謝に對する直接の收穫と云ふものは、情ないことだが唯この程度にあるのである。

そして、その教ゆる教授の方に一見識があつてやつてくれてゐるものやら、ないものやら殆んど端倪すべからざる先生がある、と云ふと偉い先生のやうにも聞こえるが、精神的に學生の胸中に食ひ入つてゐる手ごたへのある先生と云ふのは少ない。全く叩いて見ても音も何もしない先生である。それだから學生の方でも唯單に先生とは機械見たやうなもので、唯喋べつておいて試驗問題を出しそして點數を付けて行くものに過ぎぬ。それ以上にたいした意味の持ち合せもないの

だくらゐにしか考へてゐない。之も當然のわけである。ピンと來る先生でなくては一體先生と仰ぐ氣持ちになれるものでない。丸で寄せを打つて廻つてゐる落語、講釋師、浪花節かたりにしてもものつと有意義のものがあるのだぐらゐに見てゐる。最早や今日では今までの「先生」と云ふ名前に對してとか、背廣着けて教壇に立つてゐるとか云ふことで尊敬を拂ふやうな學生は殆んどゐなくなつた。又ゐないのが本當である。教へる教科の學問も學問には相違ないが腹のある先生でない限り又時勢を超越してピンと來る先生でない限り、先生としての本當の意義は考へられないのである。その學校の校舍が鐵筋だとか、先生が自動車で見へられたとか、金緣がよく光つてゐるからとかそのやうな事は問題でない。今日の日本の教育缺陷の第一はこの本當の先生の拂底にある。

それから又學科が時代の進むに比して餘りにおくれてゐることだ。これは學生の爲めに不幸此の上もないことで、そのため學生が世間に對する常識のとり入れ方を知らず又、それを學術的に批判する訓練が少しも出來てゐない。しかし如何にその學科が新しいにしても、それを機械的に御經の如く繰返した丈で何等ピンと來るだけの閃きを與へることが出來なければ、これ又本當の智識とはなり得ないのである。自分は今日學生が無暗矢鱈に、譯もわからずペンで筆記のみしてゐるものを憐むべきものだと見てゐる。かくしてゐるとノートブックの數は殖えはしても何等批判力が養はれない。一度取つたノートは試驗までは仲々讀むものでない。讀んでもお經のやうに暗記する丈で身にも皮にもなつてゐない。丸で何の事やら判らぬ。今日は徒らに學校數や學生の頭數のみ激增して來てゐるが、かう云ふ點に根本的に目覺めなくてはならぬ問題が色々あるのである。しかしそのうちでも一番大事な事はこの教師のピンと來るものを得るか否かの問題、これである。教育の不振は一つにこの教師の有無の點にあるのである。

國際進出の疑はるゝ學校出身者

學科の事に少しぐらゐ好成績を擧げてゐる學生でも、さて目前に之を呼び出しメンタル・テストをやつて見ると薩張りなつてゐないのが多い。教師の改造も大切であるが、それよりも今一層重大なのは今後この學生の態度氣力、腹の教養と云つた生きた方面の問題に目をつけることだ。あまり不成績の持てあましものでも困るが、相當な處にゐるならその人物の點をよく導かなければならぬ。人間の屑であるとないとは學科成績の如何にはよらぬ。優等生であつても事實ひどい

のがあつたり、又本當に屑と云つてよいのもゐる。終りから二三番にゐるやうなものにも人物がある。判らぬのはこの學校成績である。成績は然らばどうでもよいかと云ふことになるが、しかし決してこれを輕ろんじてはならぬ。又之を輕んずるやうなものには碌なものはゐない。

問題はその人の性質にもよることであるし、家庭の事情にもよることであつて色々であるが、これからの日本はどうしても國際進出に向かふやうな人物を必要とするのである。必ずしも海外とは云はぬが、海外にいつでも押し出せるやうな用意のある青年を必要としてゐる。ところがやもすると今の學生は世間なれぬオボコであつて、メンタル・テストでも受くると、キムスメ見たやうに恥かしがつてしまふ。たまに圖々しい前科ものそつち退けのあばづれものもゐることがあるが、多くは內氣で碌に物も云へぬものがある。世間へ出しても本當に値打ちだけのものが云へぬ。言葉の方は英語や支那語ばかりでない。何だつてよろしい。よろしく自分の思つてゐることと信じてゐることだけは、さつさと云ひ得る丈の教養が必要である。殊にさあ意見でも立てゝ見ろ、考へを吐いて見ろと云ひかけられて、默つてしまふものが多く、色々すかしたりなだめたりしても、一向に笑つてゐるだけで何とも云はぬ。上品でよいやうでもあるが、かゝる人間は世間へ

出してあまり出し榮えがせぬものである。ところが支那の青年はこの邊が丸きりちがふ。どしどし差し出でがましいと思はれる位述べ立てるのである。

人間に一番よろしくない事は、何でもその機會に立ちおくれのすることとこれである。國際進出の如きは殊にさうである。全體から云ふと日本人は世界で最も立ちおくれをする名人である。歐米人や支那の人々からグングン出し拔かれてゐる。これは植民地進展の場合に殊によく判る。よく云へば圖々しくないとか、正直だからであるとか色々辯護もしてゐるが、しかし國際的に立ちおくれのしてゐる者は生涯取り返しのつかぬ損をするのである。世間から認められもせず、自分の仕事を取つて來る事も出來ず、結局無爲無策で悲觀することゝなる。國際場裡はいよいよむつかしくなり今後は一層容易でない。日本の教育はこの方面の實際的指導のことを注意することもしてゐない。又お定まりの地理は教へてゐるが、しかし曰く政治の、曰く物產の、曰く交通のと云つた形ばかりの事を教へてゐるだけで、少しも風俗とか民情とか云ふ直接役に立つ事は教へてゐない。又よく知らせようともせぬ。これは今後青年自身が何よりも興味と勇氣とを以て調査し自らその局に當たり世界の第一線に立つやうにしなければならぬと考へる次第である。

自給自足の教養

從來はとかく學校教育そのものを買ひかぶり學校に無暗に重要性をつけて見てゐた爲め、學校さへ出てしまへばと云ふ變な依賴心が出來てゐた。ところが昨今のやうな時勢になつて見ると學校そのものに對する考へが一變して來た。これは大變よろしい事である。

先頃東京高師卒業の青年が宅へ來て曰く「我が母校では義務を果たさないでもよい事にするから、君たちは卒業したら自由に職をさがし給へ」と突きはなされ「どうか何とかなりませんか」と云ふのである。師範學校は一々仕事の世話まで赤坊式に面倒を見てくれてゐたのである。ところが近來はこの就職地獄と來たので卒業生どももよい試練を受くることになつたのである。

學校で口先ばかりの自給自足と云ふ言葉を學び又試驗の答案にもよく書いてゐた。ところが近來は卒業生たち自分自身でいよいよそれを體驗し、苦いくるしみを嘗めなくてはならぬことになつたかうなつてこそ本當の自給自足の第一歩に入りかゝつたのだと云へる。教科書で讀んでゐるときの自給自足は何でもないのであるが、いざ自分でこれから之を案出しなくつてはならぬとな

るとさあ大變だ。

大きく云ふと日本と云ふ國全體が、これまであまりに惠まれ過ぎてゐる。殆んど物に不自由と云ふことをしなかつた。又實によい國だとかやうに教へられてもゐた。ところがこの頃の日本はどうであるか、少しもよい事はない。大變な行き詰まり方だ。自給自足なんかどの方面にも考へられてゐなかつたことである爲め、どちら向いて見ても國内の人は皆、頭痛鉢卷きの體だ。そこへ持つて來て日本と云ふ國は昔しから一度も外國から本當にいぢめつけられた經驗がなかつた。そして戰爭すればいつも勝つと云ふ方の經驗のみしか持たなかつた。トントン拍子でこれまでは來てゐた。その間はよろしかつた。ところが今後はどうなるものか本當のことを云へば臺灣だつて朝鮮だつて心からと云ふわけのものではない事實が色々ある。あの生蕃自身だつて先年あの通りの事をやつた。物も見やうであるが大和民族の植民政策は英佛などに比べるとまだまだ生ま若いところがある。今後何が勃發するか判らぬ。滿洲だつて今後どうなるか判らぬ。本當にペチヤンコにされた苦しみの判つてゐない日本國は、あらかじめ、高師卒業生の泣き言を云つて來るのと先づ同じ道を辿るやうなことになるのを避けねばならぬ。支那滿洲の問題は之によつて日本人

が本當に自給自足の行ける民族であるか、それともそれに落第をしてしまふ民族であるかのメンタルテストをされる俎見たやうなものだ。さう云つた方面の覺悟は、實を云ふと日本の根本問題となるものだから、學校あたりでも一應は學生に知らしめその考へに入れさせておかなくてはならぬ問題であるが、どういふものか何ともしてゐない。又事實日本の教育界にその重要性なるものがそれほど自覺されてゐないらしい。滿鐵の人々そのものでさへも、大きな殿堂の見せかけ見たやうなことのみやつてゐて、本當の心配すべき處を國民に示してゐないのである。

自給自足の教養ぐらゐ今日の教育で大切なものはないのである。これは職業を銘々で得る上からも大事な事であるが、國家存立の上からも亦大事なことである。從つて青年は列國なんか當てになるものでないと云ふ事が腹の底に判つてゐなくては駄目だ。アメリカなんかでも、いつまでも日本の生絲を買取つてゐてくれるものと思つたら間違ひの本である。そこへ行くと偉いのは隣人である。中華民國にならない前から否昔からして支那はいつも自給自足の國でやつて來てゐる。又四川省あたりの奥地に這入つて見ると、富豪は自分自ら自給自足の生活を山の頂の上でやつてゐる。實に偉い生活法をとつてゐる。國が古いだけに色々練れたところのある國である。日

本はまだ生ま若い青年見たやうな國であるから、とにかくその點で國際的に押し出しのきかぬところが多い。今日まだ國際慣れのすることを必要と考へるものすら甚だ少ない。それは日本の教育界が未だ、之に力を入れてゐないのを見ても判るのである。

支那の青年と日本の青年

日本の青年は學校出であると、無暗に學科を詰め込まれたものであるから、空な學問ではあるが色々の事を知つてゐる。又參考書なども一通りよく知つてゐる。又先生がたの受け賣りの話もよく出來る。出來ることは出來るがたゞそれだけである。適材適所であるものは追ひ追ひのうちに特徴を發揮もするであらう。しかしながら學校でやつたと云ふだけで一向それが物にならぬ。世間を渡つて行くと云ふ上に何の役にも立つて居らぬ。何の爲めの學科だか何の爲めの月謝であつたか全くわからぬ。

日本の學校とは丸で誰れもかれも學者殊にあまり融通のきかぬ學者を作る準備見たやうな教育を、五年も十年もかけてやらされるのであつて、少しも卒業後物の役に立たぬ。それと知つてゐ

ても世間では何とも云はぬ。そんなものだと締めてゐる父兄も何とも云はぬ。文部省にもそれがそれと判るだけの人はゐさうでゐない。唯事なかれ主義でやつてゆくだけである。學生青年こそよい迷惑である。學生仲間からでも、その事に氣のついたものはその運動ぐらゐ起こして、今一層適切なものたらしむることが有意義なことではないか。今日の處は全く無用に近い事を詰め込まれ極めて少數の學者以外には殆んどたいして用のない事を教師の方でも骨を折り、學生の方でも苦しんで、教へたり、教はつたりして居ると云つたわけになつてゐる。而も實際に役に立つことは一向學科のうちに入れず、入れても應用のきくやうには教へられてゐない。むづかしい化學方程式は教へられても抽象的であつて、ペンキのついた時の取りかた一つ判つてはゐない。誠に間の抜けた事にのみ力瘤を入れられたものである。

學校がこれであるから、どうしても自分で別にやらなくてはならず、のみならず年數が大變長くかゝつてゐてそのわりに實用になつてゐないと云ふわけである。文章にしたつて文字のことにしたつて亦同樣のわけである。實に日本の青年は大層不經濟な學校生活を自覺なしにやらされてゐるわけである。支那の青年はかやうなときには自分でさつさと轉學をするなり退學をするな

り、自分に要領のよいやう自分で舵をとつと行くのみならず、學資金などの作りかたにしても中々うまい事をして自活をしつゝやつてゐる。

親の金を當てにしてやつてゐる者もあるがさうでない者も隨分ある。それらの者のやりかたは、半分は商賣みたやうな事であるがそれによつて實生活の味を味ひつゝやつてゐる。それだからなかなか用心深くもあり人間が練れてゐる。且つ又自己の宣傳を相當にやつて、ちやんと自分を人から認めさせるやうにして仕事をしてゐる。日本人はどちらかと云ふと自分のする事は自信があるのだから自然に判つて來るだらう、天に愧ぢない事をやつてゐるのだから宣傳など、どうだつてよいなどゝ高くとまつてゐるものが多い。どこまでも島國的で退嬰主義のやり方のやうに見える。支那の人は言葉の方も英語でも何でもペラペラやる。そして西洋人でも誰でも煙にまいてしまふ。ブロークンでも何でもかまはずやる。そこに向ふ氣の強い處がある。その邊を見てよく支那の青年に叶はぬと諦めるものがあるが遠慮してゐる必要はないどしどしやるべきである。

これからの時勢に處して行く青年たちは別段に支那青年に眞似ろと云ふのではないが、或る點では中國青年の方が一歩も二歩も進んでゐると云へる。國際舞臺へ押し出せる資格のあるものが

多い。素寒貧でも何でもともかく善處して行くだけのはたらきを持つてゐる。その癖たいした學問もなく、又大した學校も出てゐない。それでも英語も日本語もやる。かやうな場面へ日本の大學卒業だの高專卒業だの云ふのを立ち打ちさせて見ると丸きり景氣負けがする。柔道や擊劍は强くとも、それで以ていきなり腕を見せるわけには行かぬ。どうしてもはたらきである。日本の學校教育なる者は、無暗矢鱈に學資のみ高くかゝり又年數のみかゝり、そして徒らに學科のみ多くして、そして形式を一々小面倒に踏ませられる。そればかりであつて實社會に出てから、どうも一向に支那の青年と太刀打ちが出來ぬ。これは一體どこに缺陷が存してゐるのであるか、新支那建設を目前にしての大問題であつて、卒業生も學生も又教師も文部省のものもすべてが更に研究しなくてはならぬ刻下の問題であると思ふのである。

支那人にピンと來ぬ帝國主義

私は幼少の時分から支那の事が好きであつたので、今でも支那の事を研究するのは、日本の事を研究するやうな氣持がして居る。從つて私がこれから讀者に知つていただかうとすることは、

何だか支那にゐて支那の事をお話してゐるやうな氣分がして居るのである。しかし、こゝでは日本人側——殊に資本家として立つてゐる日本人、或は、動もすれば、軍閥を背景にして居る如く誤解されてゐる日本人に對して、支那中華民國の人々がいかなる印象を持つてゐるか、又その日本人に對する氣持はどんな風に變りつつあるかと云ふやうなことについて、忌憚なく述べて見たいと思ふのである。

支那の話の大體論は、今日では大抵判つてゐるのであるから、むしろ成るべく微に入り細に亙つて述べる方がよろしい。殊に今後の日支關係といふことを考へると、どう云ふ風に係りあひがあつても構はない。一層のこと無遠慮に、眞相を傳へることを目的とした方がよからうかと思ふ。尤も果して以下申上げることが各方面の讀者に對して、御滿足を與へ得るかどうかは、覺束ないこととも思ふが、氣兼ねなく遠慮もなく十分に述べて、誤りは正して頂き、旁々お教を賜はりたいと思ふのである。

最初に支那の人々の氣持に付て述べるのであるが、その前に一應は心得て置かなければならぬことがある。若し讀者諸君否日本人の心の中に、どうせ多寡の知れた支那人だものと云ふやうな

見縊つた考があるのであると、それは第一これから述べる話の妨げになる。そんなことでは支那は永久に日本と離れて相變らず歐米人と結ぶことになる。又第二に日本人としての帝國主義——と云ふと聊か語弊が伴つてゐるが、兎に角日本と云ふ帝國を背景として、我れは支那に臨んで居る、支那に資本を下ろして居る、支那を研究して居るのである、と云ふやうな考が濃厚になつてゐると、これも亦支那の理解について非常な妨げをなすものである。支那人位人文の學問、所謂學なるものを修めずして、而かも實際に於ては之をよく卒業して居る國民といふものは世界廣しといへども他にあるまい。即ち學問としては修めないかも知れぬが、實際に於て人間學を立派に味ひ得て卒業してしまつて居る。從て歐羅巴の文明が榮へて居らうが、日本の文明が進んで居らうが、そんなことに付ては何等恐れを懷かない。何等恥しさを感じない。露骨に云へば、眼中歐羅巴無し、眼中日本無し、と云へる位の所まで進んで來ては居りはせぬかと思ふ。

されば一口に云へば、支那人の頭は十分に悟り切つて居る。人生の問題に付ても、文明の問題に付ても、物質的方面の問題に付ても總て十分悟りの道に入つて居るやうに私には見える。同時に支那人から見ると、日本人位悟りの悪い、又日本人位資本に執着し、日本人位國家をバックに

してその權力にたよらうとする國民は少いだらうと云ふ風に見えぬであらうか。從て日本人としては無意識に語つてゐることであつても支那の人からは、それが如何にも一種帝國主義的色彩のあるやうに見られ、又資本主義的色彩のあるやうにも見られるのである。殊に戰捷民族と云ひ得られるかも知れぬが日本がその昔日清戰爭に勝つた民族であると云ふ觀念が、日本の子供に至るまで深く頭にコビリ付て居ると云ふことが、どれ位支那人の氣持の上に影響してゐるか、どれ程日支人の融和を阻害して、測ることの出來ない不利な關係になつて居るかと氣遣はれるのである。

日支人性格の相違點

日支間には、從來も國交上色々問題は澤山溜つてゐるが日支事變を契機として事變と共に凡てを立直す運命に置かれたのである。本當の所を言ふと、日本人は、支那の人の氣持にシックリと合つて居らない所がある。是は淺ましい話をするやうであるが、亞米利加では約八十年の計畫を立て、毎年六千人位からの宣教師を送り、學校であるとか病院であるとか、孤兒院であるとか、種々な慈善的文化事業を始めて來てゐたのである。さうすれば支那人が亞米利加になついて吳れ

るものと思つて居つた。所が最近の様子では少しもさう云ふ形跡の見えないといふことが判つて來た。ましてそれの眞似事をして居るやうにしか支那人に見えて居ない日本の對支文化事業の如きは、有りがたいとも何とも思ふて居ないのである。少くとも支那の青年達はさう考へて居るのである。東京などでも外務省あたりの手を經て、大分學資を得て居る支那の青年はあるが、それ等の人達は、次のやうなことを云つてゐる。我等の父兄が納税した金がグルグル廻つて我々の手に入つただけのことである。我々が當然貰ふべきものを貰つて居る丈のことである。寧ろもう少し餘計寄越しても良ささうなものである云々。斯う云ふ風に考へてゐるものばかりではないが、しかし之によつて見ると、彼等が多少とも精神的に我々に近づいて呉れるだらうと思つて居る對支文化事業なるものは、唯日本人の考へてゐる理窟であつて、殆んど日本人の考へてゐるほどに效き目が現はれて居らぬと云ふのが事實である。

或は又同仁會あたりで、病院を經營し、病人には診察をしてやり、藥を與へてやり、その結果は自然彼等が幾分でも我々に近づいて來て呉れるだらうぐらゐに思ふて居ると、必ずしもさうはまゐらぬ。藥を貰ふ時は藥を貰ふ間だけの話、脈を握つて貰ふ時は脈を握つて貰ふだけの話で

ある。イザ排日、イザ掠奪と云ふ時には、それ等の慈善事業なり、排日、掠奪事件なりが何等關係を有たうとしないのである。それを何等か關係を有つものの如く豫想して居ると云ふことは、本當に、支那人の心が理解されて居らない證據であるのである。そこで多少とも其處に期待すると云ふやうな氣分でもあつたならば、かう云ふ結果になると、氣の短い日本人は非常に落膽をし、愛想をつかすと云ふことになるのである。つまり、これは支那に對して良いことをしておけば必ず支那に於ける日本の事業が良い結果を齎らすかと云ふと、それは甚だ殘念ながらさうはならないと云ふ結論になる。尤も是は獨り支那に於てばかりでなく、日本内地に於てすらもさう云ふ妙な結果を生ずることが屢々あるのである。

そこで前に述べたやうに、日本人は支那に臨む場合に、殆んどその總ての人々が、俺は日本人だぞと云ふ頭が強くはたらき、自分の方が支那の國、支那の人より一段高い所に在るのだぞ、と云ふ氣分が必ずあるやうである。是は日本の資本家には勿論、所謂有識階級の人達の間にもある。或は又宗教家とか種々慈善めいた方面に關係せる人々の間に於てさへもある。

かやうな氣分を擁してゐて、支那に臨むと云ふことは、甚だ支那人を理解しないやり方ではな

いかと思ふ。況やそれ等の人々がややもすれば口に我々は支那の民衆を尊敬するとか、同文同種を重んずるとか、色々體裁の好いことを申してゐるけれども、其の日本人の腹のドン底には、國家中心主義又は政府を非常に偉いものとする心をどこ迄も有してゐる。支那人から云へば、一種の國家主義の偏した氣持が考のうちに一ぱいになつて居ることになる。これは支那人の頭には殆んど理解されにくいことである。支那人は殊更らあの通り政府を賴つて居られない國民である。又國家を重視ししてもゐない。その支那人位世界で獨力獨行、何處までも自分の力で押進んで行かうと努力をし、又そのあたまを無意識の間にはたらかせて居る者は無いのである。之に反して、日本人と來たら極端に國家を賴り、政府を賴み、それも一にも二にも國家の補助金を當てにし、國家でなくては夜も日も明けない。是は固より望ましい考へであることかも知れぬ。けれども支那に對する場合にまで、いつ迄も從來の如くその氣持でゐては、却つて常に禍をなすのである。兎に角この兩國民の間の氣分の相違は、支那の海外發展者と日本人の海外發展者とを比べて見ても能く分るのである。

日本人が海外に發展せんとする時は、先づ移民協會とか、移植民の會社とかが出來る。或は又

其間に色々活躍する人が現はるるのであつて、其背後には必ずチャンと政府が控へて居る。政府の調べによると一昨年は人口が九十萬殖えた。昨年は百萬殖えた。從つて大いに海外に出て行かなければならぬと云つて奬勵してゐる。或は大學の講座に於て、或は一般社會の講演に於て、或は又新聞雜誌等に於ても、頻りに日本人の海外發展を宣傳してゐる。それにも拘らず海外に出かけて行く者はといふと甚だ少い。泰山鳴動して鼠一匹といふよりも、猶ほ僅かである。數家族、數十人、數百人といふものがブラジル邊りへ行くといふが精一ぱいの處である。それも向ふの土になつてしまつても好いと思はせる丈の設備なり、將來の保障なりが出來てゐるわけではない。又その決心をして居る者は極めて少い。

ところで南洋方面を中心に擴つて居る支那人の連中所謂華僑を見るとどうであるか、その決心その成功振りはこゝで事新しく述べるまでも無く立派に根を張り實を結んで居るのが實際である。而かも彼等は一人として領事館に賴ると云ふことはしない。又一人として自分の國の軍隊の力に依り自分等の生命財産を保護して貰ひたいと云ふ氣分も無い。又さういふ處へ出かけて行つてもゐない。假にあつても、支那政府ではさう云ふことは出來ない。日支兩國民の先づ海外に伸

びやうとするもの同志の氣持ちを比べて見ても、日本人と支那人との間にはそれだけの開きがある。況やその國内に於ても日本人は常に國家を頼み、國家を背景とし、國家の力と云ふものが、陰に陽にうしろ楯となつて居る。何事があつても、日本では警視廳に屆け、警察に訴へて出ておぢ巡りさんに來て貰ふ。それに依て何よりも安心を得ると云ふやうに、國家を以て非常に有力なものとして頼りにし、又それだけに強いものと考へて居る。支那ではさう云ふことを願つても駄目なことを承知し、初めから國家を當てにする考などはない。衣食住を始め、自分のことは何處までも自分で處置をするのである。其代り自分の財産が一朝にして全部無くなつてしまつても、極めて諦めが可い。日本人のやうに、急に財産が無くなつたからと云つて愚痴をこぼしたり、又首を縊つたり、水に飛込んだりすることはしない。

支那民族のあきらめ方

支那はかくして日常生活の中にその國家に頼らうとか、政府に頼らうとか云ふ考へが起つて來ない。それが約四億八千萬から居るのである。然るに我々大和民族は、自力といふことを考へず

何時でも政府に頼り、國家の力に依てのみ我々の存在を全うしやうとする。そこに頭がコビリ付いて居る。それ故に紡績業者が幾億の資本を上海方面に投じて居ると云ふと、直に之に向つて政府の然るべき責任ある力——その非常に力のある後援を豫想して來るのである。これは必ずしも紡績業者でなくとも、日本人はいついかなる場合にも、大體に於いてかやうな考であることを認めざるを得ぬのである。今事變に於ても上海青島等に於て、支那軍に破壞された工場主は、それが個人であらうと會社であらうと、復興の力があらうと、なからうと一樣に政府に泣付いて補償を求め、政府も或種の了解を與へたやうだ。而も誰も當然のこととして疑はないのである。けれども支那の人々の考になつて見ると、さうではない。例へば南洋方面に行つて投資をして居る支那の華僑連中は、不幸にして一朝非常な水害にでも遭ひ、其事業が根柢から覆され、不結果に終つたと云ふことになつても大變諦めがよいのである。支那に於てはその財産が掠奪され、機械が破壞され、全く臺なしにされることがあつても、すべて諦めるべき運命にでもあるものの如くに思ふて居るやうに見へる。こゝが日本人と餘程違つて居るところである。

要するに資本家と云ふものは、弱い者で、資本を下ろして居ると寢ても醒めても心配で堪らな

いのである。殊に關西方面にはかういつた人が多いやうに思はれる。所が支那では百萬圓あらうが、千萬圓あらうが、一夜の中に投機でなくしてしまつて、全く一夜乞食になつてしまふものがかなりある。漢口から上流宜昌地方に行く間に在る所の沙市方面の氾濫を見てゐると、一夜の中にどうかすると天地がスッカリ水に浸つてしまつて、數年間もこの大水が退かない。それが爲め大地主が一夜の中に乞食となり、漢口の郊外に來て毎日町の人々に憐みを乞はなければならぬやうに落ちぶれるものも澤山あるのである。

さう云ふ有爲轉變の際に於ける支那人を見て居ると、支那人ほど諦めのよい民族は少いといふことがよくわかる。例へば自分の親が官憲に拉置されて、銃殺をされるとか、或は毎日指一本づつ切られて、板に載せて持つて來るとか、或は之を人質として巨萬の富を强要されたといふ場合であつても、その他如何なることがあつても、すべて全く諦めがよいのである。決してそのとき泣いたり女々しいことを云つたりせぬ。自分の親が何とされても仕方がないと考へてしまふ。すべてこれである。日本人は支那に巨萬の資本を投じて居るところから、それに依り必ず利益を生み出さなければならぬと云ふやうに考へるであらう。支那人も無論その投下資本に對しては出

來るだけその利益を生み出すやうに努力することはする。けれども、急轉直下的にそれが臺なしになることがあつても、その諦めのよい事だけは實に驚くべきものがある。

支那に安定を望み得べきや

支那人の生活は、その政府が今申したやうに、自分どものゐる國内に於てさへも當てにならず、又對外的にも國家の力に頼ること とが出來ないと云ふことは、むしろ最も同情すべきことであつて、最も深刻に支那民衆の性格を支配して居る事柄であるのである。從てその國民として支那人は、國家に對して何等有難味を感じてゐるやうなことはない。その物價が安くて而かも愉快に生活ができ、その歡樂生活にたやすく耽り得る所の支那民衆どもに取つては、政府なんかどうでもよろしいのである。其の生命財産を安固に守つて吳れる力があるならば、政府の値打も認められるのであるが、さう云ふことが無ければ政府は有つてもなくても同じことである。從つてこゝに有力な政府を是非とも造らねばならぬと思ふて居る人は、職業的に活躍する人間は格別、一般民衆の間には考へが薄い。或は青年達の間には、其面子(メンツ)を重んずる爲め又自覺心の起つて來た爲め

にさう云ふことを言ふ人はあるであらう。けれども腹のドン底に於ては、青年達にしても、支那の大官達にしても其處まで考へて居るかどうか、その邊のことになると怪しいものである。況んや君臣の義なんか云ふものは、現在の支那では紙のやうに薄くなつて居る。

支那は王朝が寂れやうが、倒れやうが、一般國民は「我關せず焉」をきめこんで居る。いよ〳〵王朝の終りに際しても、その盤根錯節の中に乘込んで何處までも其の難局を切拔け、そして正成の如き功績を擧げ得るやうな人は一人も出て來ない。支配者が潰れやうが潰れまいが、そんなことは自分には關係がない。王者そのものがどうであらうが、爲政者がどうあらうが、何等自分に關係のあるわけは無い。所謂「帝力我に於て何か有らん哉」と云ふ思想は、古に於てのみならず未來永劫支那に於ては變らないことであらうと思ふ。從つて帝國主義或は政府や國家の力を背景にし或は利用して支那に臨む者とは、餘り相容れないことになる。

又支那は古今を通じて法律が制定せられ、法律が行はれてでもゐるやうに考へられるが、その實際は誠に疑はしい國である。法律の上では如何に定められてあらうとも、直ぐ權力者は人を銃殺してしまふやうなことをする。先に南京の蔣介石派の李濟琛が、廣東で二百數十人の共產黨員

を銃殺して珠江といふ河に之を投じたのであるが、かやうなことは昔し秦の始皇帝が儒者を坑にしたる事實を始めとして、幾らでも支那にはあることで敢て珍らしいことでも何でもない。寧ろ支那としては尋常の事と見らるるのである。

しかし支那人の思想からすると、大體に於て國の政府などは重くは見ない。また國家の形式などがどうなつてもよろしいと云ふのが、支那人の心の立前である。四億萬の民衆の氣持ちは卽ち悉く是だと云つてもよろしいのである。

從て從來列國が支那に對して心配してゐるやうに、蔣介石の國民政府に今少しく權威を持たしめ、もつと有力なものにして蔣政府自らに大支那を統一せしめ、そして國家の安定を得させるやうにするといふこと、これは日本はじめ列國の均しく希望する所であつた、又同時に支那の方でも之を望むわけであつたと考へられる。けれども、支那人自身の腹の底は果して其處まで考へて居るか、どうか分らない。もつと穿つていふならば、南にも相當有力な政府があり、北にもロシアを背景とするソヴイエート區なる名義上の政府があり、中心が二つも三つもあるわけである。日支事變は支那の政治中心を何う變へるか、今のところ判らないが、この方が今日のやうな

支那には可いのかも知れない。と云ふのは南方に出來た事件は北方は知らないと云ひ得るし、北方に出來たことは南方は知らないと云ひ得るからである。列國は南北の双方の間に奔命に疲れるわけで、何時までも解決の出來る時が來ない。この捉へ所のないのも大陸的支那の特性であり、支那としては解決しないで抛つて置く方が利益である。解決をすれば必ず損をするから解決しないと云ふことも大きい所から見ると考へられるのである。支那の安定と云ふことは、唯單に紙の上言葉の上だけなら幾らでも言へることであるけれども、實際に於てさう云ふことに力を入れても中々むつかしい。日本式にかうすればかうと直ぐハツキリさせやうとすることは餘程考へ物であると同時に不可能なことだと思ふのである。

絶對的安全地帶——租界

又租界の問題であるが、青年達は理論の上又は自覺心の上から、時代の空氣に乘じて租界回收を叫び、實行に移し排英運動とまでなつたことがある。固より之に就ては運動費も隨分要るのであるが、それには實業家方面から宣傳費の一部として援助をする者を見出すことも出來るのであ

る。けれども、功成り名遂げて、自分の生命財産の安固を圖りたいといふ程度に達してゐる者は、一朝事がある場合のことを考へて、何處か逃げ場所を考へてゐる。絶對安全地帶ともいふべき場所を考へてゐる。租界が此の場所に當てはまる。そこでかくの如き考のある人は、租界回收の叫を自分には叫んでゐない。一種矛盾した現象ではあるけれども、有産階級の人士は絶對安全なる避難地帶を求めようとしてゐるのである。

かくの如く青年達の立前と、有産階級の人士の立前とは、全然違つてゐる。そこに矛盾のある所があり、支那らしい面白い所があるが、青年達のいふ所もまた尤である。併し支那のやうな國家の秩序の有るが如くしてない所では、租界と云ふ名前が差支へあればやめてもよろしい。又外人がそれを管轄して居ると云ふ事が惡ければ、それを廢めても宜しい。が、兎に角何處にか支那一般良民の爲めに絶對安全地帶と云ふものが必要である。支那が今日のやうな無警察の狀態でゐるのであれば、それは恐らく永久に必要であらうと思ふ。かやうなことを外國人の口からいふときは支那の人々は非常に立腹をするであらう。けれども支那の人から之をいへば、何も腹を立てる理由はない。實際安全なところがなくて困つてゐるのが支那民衆の實狀である。

其證據には例へば四川省の奥地で三峽を越えて、萬縣、忠州の邊り、又重慶方面から合江、納溪、江安、叙州の邊り、上海からいふと揚子江を遡ること約千五六百哩といふやうな上流の地方に行つて見ると、到る處の山嶺には絶對の安全地帶が出來て居る。ここは爆彈投下の行はれない限りそこならば絶對安全である。即ち不思議に高く屹立した山の上などに金殿玉樓式の住ひを造つてゐる。そこへ上つて行くには石段が唯一の路としてある計りであつて、其下には土匪の親方を買收して、それに門番をさせて居る。揚子江の江邊に浮べてゐるハウス・ボートの船頭も矢張り睨みの利く土匪を使つてゐる。其の睨みの利く土匪の權力といふものは、上海でいつて見れば、ミュニシバル・カウンシル（市政府）の印度巡査以上の力を有して居る。四川省の奥地には、その時その時の地方官憲もあるが大體に於て本當の安全地帶がない。その爲め富豪連中は險阻な山の上に自分で絶對の安全地帶を造り、其處に自分の生命と財産を託して居る。

この四川省は支那四百餘州の縮圖のやうな所であるから、四川の一省を研究すれば、支那の事は何も彼も分ると云つてもよい位のところである。が、豪族の家へ參れば、必ず武器や兵隊など備へて、その自衛の途の講ぜられてゐるのを見るのである。

臺北のそばの枋橋（パンキョウ）（今は板橋、いたばし）と云ふところに行つて見ると臺灣の大富豪として知られる林本源の第一房の住居があるが、領臺以前そこには三千人からの兵隊を容れ得る兵營があつた。劉明傳の時代を始め、臺灣もかなり自治的にはよく治まつてゐたのであるが、しかし臺北に於ける土匪とか暴徒、モッブの起つて來た場合になると自衛の爲にぜひともその備へが必要であつたのである。それ丈けの設備をして置かなかつたならば、林本源一族の生命、財産は保障されなかつたのである。又當時臺中の田舍に潭子墘（今のとよはらの在）と云ふ所があつたが、あの邊の故老だちに聽いて見ると日清戰爭以前には夕方子供を戸外に出して遊ばせて置くと攫はれてしまふことが頻々あつた。此頃は有難いことにその心配がなくなり、夕方子供の戸外で遊んで居るものがあつても、子供の攫はれる數がへつたと云ふことを云つてゐる。實に物騒な世の中であつて、恐らくこれが一般の社會狀態であつたらうと思はれるのである。

かやうな社會狀態を見てゐるのであるから、支那の社會では自分で自分が自衛の途を講ずるより外に仕方が無い。若し事のあつた場合には、人間の五十や百人を殺す位のことは問題でない。從つて支那人が山寨の上にゐて、四方から攻擊を受けるやうなことでもあつたとするならば、其

處から當然鐵砲で擊ち壞つてしまふと云ふことは、支那人としては正當且當然に爲さなければならぬことであると云へるのである。それを山寨の上でやらなかつたとするならば、いつも馬鹿にされて其住まひの門は破られ、山寨の屋敷は潰され、家財は壞され掠奪されてしまふ。これも亦支那であつて見れば當然のことであるのである。

この山寨の生活なるものは、支那の豪族が絶對安全の生活方法となして居るわけであるが、それと同じやうに、支那に於ける紡績會社の如きものも矢張りその方法を執つて置かなければならぬ譯であらうと思ふ。その工場が支那人の經營であらうと、英吉利人の經營であらうと、又日本人の經營であるとを論ぜず、各々その國としての力を背景にしないやうにして自分で自衛の方法を講ずるより外によい方法は無いのである。一朝事が起つて困らされてから、支那の政府を相手に掛合つて見たりした所で何の役にも立たなければ、ちつとも香ばしい解決をして呉れるわけがない。先づ支那に於ける權益保全の點はかやうな風に考へらるゝのであり、それで間違はない。

併し何等其の防備がなく、其儘に投げやつておいて殆んど滅茶々々に餘す處無く破壞され、財産も何も殘らずやられてしまつた場合、支那人は立腹して憤慨するかと云ふとそこが支那人である、その一度ぐらいは憤慨もしやうけれども、大抵のものは諦らめがよいのである。別に苦情を申立てゝ行く目當てもないわけであるから泣寢入りと云ふことになるのである。こゝが支那に於ける一般普通の世渡りの秘訣になつて居る。所謂沒法子（メイフワーズ）と云ふ言葉があるが、萬事それで行く。實に薩張りしたもので、何等未練を殘さない。

支那に迷惑な文明

堯舜以來幾千年の歷史を考へて見ても、如何に一事は榮へた王朝でも、所謂槿花一朝の夢であつて、必ずや、間も無く亡び行くものである。其の繁華を誇つてゐた花の都も、やがては見る影もなく荒れ果てゝしまふものである。榮へるのはやがて衰へるの前提であつて、五十年か、百年か、そこに多少の年限の長い短いの違ひはあつても、五千年後の今日から考へて見れば大したものではない。今日までの支那文明の遺跡なるものも實は悉くそれだと云つて可い。南京城内の今日を見ても、かの「南朝四百八十寺、多少の樓臺煙雨の中」と云はれてゐる唐詩選にある詩の句の通りの狀態である。總べてのものが斯う云ふ風であると、其の諦めのよいといふ氣分を有つて

居ると云ふことが、一種の清凉劑ともリフレッシュメントともなるわけである。從つて之が帝國主義或は資本主義の人々の氣持ちに見出さるゝやうな執着の强さは、不思議のやうであるが支那人間には見出されぬ。そこに行くと支那は極めてアッサリしたものである。

法治國の人々はやゝもすると最も完全な警察權の行はれることを支那に向つて希望せんとするやうであるが、それは支那に於ては出來ない相談と思はれる。勞力が安く得られ、物資も安く土地も安いと云ふ所に事業計畫を立てるのであるから、そこには當然相當以上の收益が得られる。而かも其上完全な警察權によつて、安全まで保障せらるゝならば、話がうま過ぎる。日本人はそこに全部臺なしになる場合のあることを考へて居ない。こゝは支那の人とちがふ點である。

支那の人は非常な利益を得ると云ふことを考へる代りに、又全部損をしても仕方がない。諦める外ないと云ふことを半面に必ず考へてゐる。これが考へ方の大きな相違となつて居るやうに私には見える。卽ち利益の一方ばかりを考へて居るのでなく、其半面に全部臺なしにされても少しも恨まない、と云ふ所が支那人には必ずある。そこへ行くと、亞米利加人でも英吉利人でも、列國が支那に貸し付けてある鐵道借款の如き、何處までも元金を支拂はせよう、利子も取らうとす

る。日本でも日本の借款で出來てゐる南滿鐵路の如き、矢張りそれである。所が支那側では政府の財政は固より地方でもその窮乏の結果元金も利子も共に拂へない。始終矢の如き催促をしてゐるけれども、何の效めもない。餘りにやかましくいひ立てると、それぢや鐵道も、枕木も、砂利も、レールも、機關車も、何も彼も皆持つて歸つてくれと來る。元來初めから此方が賴んで架けてくれといつたのではない。あなたの方から勝手に押賣して來たのである ―― と云ふことになる。支那の社會狀態では、まだ〳〵支那人は畔道でも歩いて居れば、それで用は缺かないのである。北京、漢口間を急行で飛廻はらなければならぬと云ふやうな人は、支那には減多に無いと云つてよい。それ等は大抵外人側、或は資本主側か、或は政府の特別な人達ぐらゐのものである。一般の支那人どもは寧ろ鐵道が出來た爲に、戰爭が大仕掛に行はれるやうになつたと、こぼして居るのみならず、支那の地方人民の日常生活に脅威を感ぜしめて居るのは、むしろ文明が入つて來た爲めだと思はしめてる。それは何故かと云ふと、朝鮮人も臺灣人も言つて居ることであるが、往年某內閣の時代に、軍事的の目的のみで道路が造られたが、その爲に物の運搬が容易になり其地方に出來た物產は、どん〳〵他處へ持つて行かれてしまふ。その田舍に殘されるものは

つまらない滓ばかりで、而かも其數は少なくなるから、從來安かつたものが急に高くなつてしまつた。百姓達は、日本文明が、半島の津々浦々に浸入つて來るものだから、物が高くなる一方でちつとも有難いことは無いとこぼしてゐた事實がある。それと同じ事で、支那に於ても地方の田舍の民度の低い連中どもは皆さう云ふ考へを有つて居る、仍ち列國の人はヤレ鐵道を架けてやつた、ヤレ病院を立てゝやつた、學校を立てゝやつた、何だ彼だと云つて、支那側に向かつて恩をかけて居る。けれども、實際地方文化の程度の高くなつたと云ふことに付ては、一部の青年位は歡んで居るかも知れぬが、一般の民衆、殊に一般の田舍の百姓どもは歡ぶ所ではない、內心困つて居ると云ふ狀態である。

その學校を立てゝくれたと云つてゐても、支那側に取つては何も有難いことはない。固よりその生徒を風呂に入れ、新しい着物でも着せてくれると云ふやうなときには喜びもしやう、けれども、それだからと云つて別に感謝して居る譯ではない。同時に又西洋人は文明を進めてやつたなどゝ云つて、恩にきせてゐても支那の人は文明に進むことを必ずしも有難いとは思つて居ない。其處の考へかたは非常に違つてゐる。列國のうちには必ずしも恩に著せてゐるものばかりでもあ

るまい。けれども少くとも支那一般の民衆は、西洋文化にさほど感謝して居ない。或は寧ろ餘計なものを持つて來る、ペストやコレラ菌まで持つて來て之を流行させると迷惑がつた事であらう。そしてヤレ、ヴイタミンAぢやBぢやとやかましいことをのみいふやうになつたが榮養を口にするものは、却つて靑瓢簞のものに多いのである。支那の內地に深く這入り、奧地に行つて見ると悠々と自然の儘の太古の生活をしてゐる。山に入れば所謂山中曆日なしと云つたやうな仙境は今日でも到る處にあるのである。

絕對的の自治建設

戰爭などのある地方は別であるが、廣い支那には奧地に這入つて見ると戰爭の殆んど無い所が澤山ある。支那の內地は實に廣くて、今度の事變は別だが、十中九割以上のところは戰爭の無い地方である。さう云ふ所に行つて、民意の那邊にあるかを探つて見ると、殆んど今日の文明とか時代の潮流とか言ふやうなことは全く超越して居る。そして不文律ではあるが、自分等の社會を出來るだけ完全に發達させ、保存の出來るやうにしやうと云ふことだけに努力をして居る。それ

も國家だの、政府だのと云つて見たところで當てにならぬから、自分の村は自分だけで完全に立ち行くやうにと心がけ、又完全に安心の出來るやうにやつて居る。殆んどお役人の手は其中に入つて來ないやうに出來て居る。

されば大體自治本位であるから國家のすることは殆んど眼中に置かない。軍艦を增し北洋艦隊を充實させて、日本と戰爭をしやうがしまいが、そのやうなことは問題にしない。日本人は日清戰爭で成歡、牙山の役を始め連戰連捷で、非常な勝ちいくさの誇りが子供の心にまで强く印象づけられて居りこれが日支融和の一大障害となつてゐることは前に述べたが、支那人にはさう云ふことは忘れられて居ると云ふよりか、初めからてんで頭に無い。一般人民は日本と支那が戰爭をしたなどいふことは知らない。知れ亙るには、餘りに國土が大きい。能く讀み書きの出來る連中でも當時の北京政府が何處かの國とゴタ〳〵戰爭をやつた位にしか考へて居ない。

私は共產黨の勢力の濃厚に認めらるゝ湖南省の、長沙からかけてあの方面の田舍の學校に行つて教科書を見た。恰度日清戰爭の所が書かれてあつたが、それは支那が連戰連捷の勢で、日本は散々に敗けゐたやうに書かれてあるのを見た。そこで自分は是は間違つて居りはせぬかと聞いて

見ると、さう云ふことはないと云ふ。然らばと段々突き詰めて行つた所が、それはあの時分北京政府が勝手に日本と戰端を開いた迄であつたが、どちらが勝たうが負けようが、そんなことは初めから問題にして居らぬ、と云ふことであつた。かやうな風に其の態度は實に大きい。日本人はそこへ行くと何と云つても國も小さいが心も正直だ。そして僅かなことに氣を掛ける。戰爭に勝つたと云ふことをひどく自慢にもし、之を色々自慢の種にもする。支那人では正直なところそんなことは初めから問題にして居ないのである。そこへ持つて行つて日本人が日清戰爭に勝つた征服者の氣持を事々に出すのだから、日支親善の上の妨となるのも無理からぬことゝせねばならない。歐洲戰爭の如きも、その當時百姓どもは之を全く眼中においてゐなかつた。又その戰爭のあることを知つて居る百姓も殆んど無かつた。又それで支那といふ國はやつて行ける國である。鐵もあの通り澤山出るし、石炭もいくらでも豐富である。山西省の大同方面に入ると殊に良質の石炭が多い。又四川に入れば岩鹽が澤山取れる。これはむかし地質年代カンブリアン時代に、印度洋の海水が四川省の方まで深く入つて居たことのあつた爲めであらう。

かやうな事實から考へて見ても支那の物資の豐富なことは、實に驚くべきものであつて、全然

他の諸國と沒交渉であつても、困る事なくやつて行ける國である。尙追加して云つておくべきことは、日本の大日本製糖や、明治製糖が長江沿岸に毎年供給する所の砂糖の量のこである。これは非常なものでありますが、排日其他の原因で、どうかすると二三年些とも入らない事があつたそれでも何の事はない。支那人はその間は砂糖を舐めて居ないのかと思はれる位であるが、四川省などへ行つて見ると、野生の砂糖黍のうんと出來て居る地方さへあるのである。兎に角さう云ふ大きな天然物資の豐な國であり、鐵道の延長の如きは日本の十數倍の地積に、日本の半分にも及ばぬと云つた狀態である。教育に至つては都會地を除いては殆んど其施設の見るべきものなく、義務教育さへ全く行亙らぬ狀態であるから日本の如き島國と戰爭をして勝つたとか敗けたとか云ふやうなことは、一般民衆には殆んど關係のないことであり、その事實も行き渡らぬのである。市場では物の値段變化が極めて緩漫である。幾らか物價の上るとか下るとか云ふことはあるけれどもそれも田舍に這入つて見ると大したことはない。兎も角にも、支那は悠大な國柄であるから、人間も自然とものに拘泥しないものが多く、ありのまゝの狀態に滿足して生活を立てゝ行くと云ふのが支那の社會の實相なのである。

關稅自主權と地方徵稅

支那の青年はやゝもすると、不平等條約の撤廢とか、租界の回收云々とか云ふやうなことを盛に言ひ立てたものだから、さも支那の民衆全體悉くが國家思想が向上して來て、その事のみに力瘤でも入れて居るが如く見える。それは或る程度まで向上の事實はあることはある。と云ふのは日本の維新當時と同じく一部青年達は社會の先驅者となつて國家を導いて行かうと燃ゆるやうな熱を以つて、聲を大にし一流の宣傳をする。であるから、一部輿論はそれに引きづられて行く。其處に列國がとかく致された傾がある。關稅會議等に付て見ても列國の考へ方が違つて居たと思ふのである。二分五厘乃至五分の稅金を上げてやると云ふやうなことを條件にして、三年間とか五年間とかの中に釐金稅の廢止を認める。其準備行爲として支那の關稅自主を認める。否原則として關稅自主の花をもたせることを列國が認めた。又さう云ふことになるだらうと思ふて、增稅のことに贊成された列國も澤山あつたやうである。

支那の地方、殊に山間僻地、又は田舍の運河の交叉點、其の他大きな河川の船着場などを親し

く歩いて見た所では、釐金税のことなどは當てにならぬことだと思ふ。自分は釐金局に行つて泊つたこともあるが、月の晩、橋の袂に支那の友人などと一緒に、鷺鳥の鳴聲でも聽きながら立つて居ると、其處へ荷物を積んだ船が入つて來る。釐金局の役人は遁がしこなしに早速調査に出かける。或は翌朝の八時頃でなくては檢査をやらないと云つて、待たせるやうなこともあるが、何だ彼だと云つて、つまり隨分苛酷な取立て方をする。それが一個所や二個所ではないのであるから、支那の茶なら茶と云ふ品物は、非常に高いものになるのは當然のことである。

四川方面になると、單に此の釐金局ばかりでは無い。更に軍事費を徵發する船などもあつて、もし之に應じなかつたら、直ぐ岸から鐵砲でも擊たうと云ふやうな勢で構へてゐる。其處を過ぎる所の船は只では通過させることのないやうにして何處までも税を取立てるのである。商人側はとても堪らない。荷主側はいつも泣いて居る譯である。コンプラドル（買辦）等を通じて色々交渉させて居るが、結局駄目である。餘り强硬に反對でもして居ると無警告で銃殺される。無論そればかりでもないが、さう云ふとで地方政治の經濟は成り立つて居るのである。又それがかゝる衙門のものゝ役德として一種の仕事にもなつて居るのである。國民政府の方ではいかにそれを廢

めると云つても、他の方で釐金を取立てゝゐれば何にもならぬ。中央はやめても武漢では廢めないといふやうになる。地方の力が强くなつてくると、中央からそれを罰するとか、兵隊を差向けるとか云ふことは到底出來ない。支那の實狀を御承知の方は、このことは大抵お認めになるだらうと思ふ。

けれども中央政府から命令を出せば津々浦々に至るまで、其命に從ふと云ふことになるには、支那の中央政府次第である。蔣介石政權にしても今一段有力なものになつてゐたならば、そこまで行けたであらう。列國は支那の面子（メンツ）を立ててやるといふことで自主權を認めたのであらう。しかし自主を自分勝手に振り廻して、相手の國に相談もせず勝手にやることを平氣でゐる國である。私は支那の地方の實際の狀態から觀て、支那全體が列國の滿足するやうな税關の制度の下におかれるやうになることは、百年河清を待つと同じことだと思ふ。それ故に關税の方も澤山取つて宜しい。又釐金局の方も其時になつて押へが利かなければ、從來通りに取つても可いと云ふことで大目に見てやる積りなら兎も角、さうでなく、釐金局の方は廢めるだらう、そして税關の方は自主權勝手たるべしと云ふやうなことを豫想して、關税會議の事を運んで行つたとしたならば、

如何にも支那を買ひ被ぶり過ぎたやりかたではなかつたかと思はれる。自分は平素から地方々々の聲金局の實際の模樣を見てゐる丈にその感を一層深くする次第である。

大陸人の衣食住

支那の地方問題で、一番難しいのは地方民の衣食住の問題である。然し此の衣食住の問題はまだ列國には餘りよく知られて居らぬやうに思はれる。支那人の衣食住の問題が、十分理解されないときは、支那の社會の根本が判らない。外國人はとかく支那人を買ひ被り、又支那の國家を買ひ被る。支那人ほど安あがりの生活に慣れて居る者はない。その衣住食は總べて中々に經濟的に、又理窟に合ふやうにこまかくやつて行くことに徹底して居る。いはゆる文明國人、それは實は文明か半文明か判らぬが、本來文明人といふと內心いかに苦しくても何處までも表面體裁本位でやつて行かうとする。日本人の氣持には特にそれがある。支那人にも、中にはどんなに苦しい思ひをしてでも自分の面子(メンツ)を保たうとするときに、體裁本位のことをやることもあるが、押しなべて一般についていふと支那の方が、うは手で組織も進んで居る。日本の方はとかく體裁負けが

して居る。例へば宿屋に泊つても日本人は茶代を置かなければ氣持が惡い。又宿屋の方でも內心その積りでゐて、顏をジロ〳〵見て居る。それがたいして失禮でもなく、當然のことのやうになつて居る。所が支那では、支那宿にお泊りになつた方は御承知でもあらうが、支那宿に止宿するときはその人を先づ一應應接間に當たる共同の部屋に通し、さて曰く自分の宿には部屋がこれ〳〵幾つあつて、一等が幾らで二等が幾ら、現在空いて居るのはこれ〳〵だけであつて、食事は付かない。食事はこれ〳〵であると云ふやうに等級から何から何までスツカリ話して、偖てどの部屋に定めるかどれがお氣に入りますかと云ふ。それぢや之にしやうと決めてしまへば、一週間居て總體幾ら〳〵と云ふことが明白に分るのである。日本の宿屋ではさうは行かぬ。少し良い風でもして居ると、控への間の二つも三つもあるやうな所に通ふされる。チヤホヤされても愉快ではない。少し旅行に慣れて居る者からいふと、うるさいやうな氣分になる。これは一例に過ぎぬが、支那では宿だけについて見ても經濟組織が進んで居る。支那宿に限らず支那の物は比較的チヤンときまりがよい。無駄の無いやうに出來て居る。そして又物を粗末にしない、物を勿體ないとして叮寧に始末するところなどは感心である。私は前後四十餘回に亙つて南北各地の田舍ま

で歩いて居るが、未だ蜜柑の皮の路上に落ちて居たのを見たことがない。こは卽ち陳皮(チンピ)になるので、悉く棄てないで取つておくのである。あちらの家庭では中流以上のうちになると、女は炊事の方に關係せぬから皆男が炊事をする。ところで炊事の方面でも、實に始末が宜しいのには感心する。日本人は汽車の中などで見てゐると、五十錢の折詰を買つても半分位まで食つて、あとはお菜や飯を入れたまゝ折箱ごと棄てゝしまふものが隨分ある。そして平然としてゐる。日本は最近は兎も角五六年前では年々六百萬石からの米が不足してゐたのだ。又木材は非常に安く亞米利加から澤山入つて來たものだから、日本の植林事業は只今のところ引合はぬと云ふ譯であり、然るに一方に於ては、折詰はどん〳〵棄てゝしまひ、それで日本では氣前が好いと云ふことになつて居る。

かゝる無駄の多いやり方を支那人の衣食住に照して考へて見ると、天產に惠まれぬ日本人がこのやうなことをして居てもよいものか何うかと考へさせられる。それで過去の統計から見ると、米は年々多量のラングン米を入れ、おまけに國內では、盛んに酒を造り、菓子を造つてゐる。心ある支那人は、日本は今後二十年も經つたら人口が一億萬を越すだらうが、先きの見えぬことを

してゐる。あんなことをして居つていゝのかと云ふやうな心持ちがしてゐることであらう。ところが日本人は一向さう云ふことは考へず、所謂宵越の金は有たないと云ふやうなその場限りのことを一種の誇りとし、社會も世人をかやうに教育し又學校でもさう云ふ式に人を造りつゝある。

併しこゝには日本人が支那人と競爭すると云ふやうな氣持で申すのではないことは勿論だが、今度の日支事變による物資の統制は、無駄をすることを見榮とする日本人に深い反省を與へてくれたであらうが、まだ〳〵しつくり來てゐない。我々日本人は、もつと〳〵此の生活問題に付ては、周到な注意を拂なければならぬのである。生活問題といへば極めて平凡な問題のやうであるが、其平凡な中に日本人は非常に不用意な手ぬかりのことを澤山やつて居る。所が支那人は特別の問題にはせず、さほど氣にしないでゐて、しかも物に廢りの無い樣にやつて居る。是は支那人の生活をして彌が上にも安定させる一つの基礎になつて居るのである。二十人以上もゐる可なり大勢な家庭に入つて、色々打あけ話をして見る「あなたのうちの世帶で年にどの位經費がかゝりますか」と聞いて見ると「年に大抵二百圓もあれば餘ります」といつて云た。尤も程度次第で下から上まで、その暮らしに色々ある譯であるが極く低い家庭であるなれば、日に十錢か二十錢も

あれば、一家族の食べられる方法もある。それ等は無論家に茶碗も無ければ、箸も無い、鍋も釜も持つてはゐないのである。これは支那の社會が野蠻でまだ開けないから、さう云ふ風にやつて行けるのだらうと考へるかも知れぬが、そうではない。むしろ組織的な進んだやり方なのである。日本でも市内の細長い路地に入つて、長屋住まひをして居る者の様子を聞いて見ると、七八軒もある中に釜がたつた一つ丈あつて、それを早朝から次から次へと廻して行くと云ふ定めになつて居る所もあるそうである。これは東京での話である。一日に一回しか使はないやうな家具であれば、成るべくさう云ふ風にした方が最も經濟的だらうと思ふ。支那でも上海邊りの路地に入つて見ると、鍋釜は勿論、茶碗箸までも持たないでやつてゐる家庭があるが、子供などは朝わずか銅幣の一錢か二錢をお母さんから貰つて、外に食べに行くのである。するとお粥も賣つて居れば、お汁も賣つて居る。それで十分腹一ぱい食つて來られる。籤引の方法になつてゐてもし好い籤でも當れば三杯でも食べられる。かやうにしてでも飯だけは食べて行ける。又それで滿足の出來ると云ふことが、支那民族の最も恐るべき力となつて居る點であると思ふ。

生活程度の問題

支那に於ける日本人の發展に付ては、政府が如何に補助をしやうが、外務省がどんなに便宜を與へてやるやうにして見ようが、日本人の支那に於ける生活が、支那人と同じやうな程度の生活狀態になり得ることがむつかしい以上は、支那人と本當の競爭は出來ない。ところが日本人は到底其の氣持になれない。實にむつかしいといふのは例へば食物にしても、三河の國から味噌が來たから、今日は一つ三州味噌のお汁を拵えやう、今日は長崎から新しい魚が來たからそれで料理をしやうとそれに力を入れる。甚だしいのになると、吉野から櫻が來たから、吉野櫻をお茶にして服まふと言ふやうなお上品な風で、自然生活に餘計な費用と時間とがかゝる。それ故に小店に出かけて同じメリヤスのシヤツを、支那人の店から買へば、二圓五十錢までゞ買へるものが、日本人の店へ行くと三圓も四圓も取られる。下手をすると、五圓位も取られる。それ故日本人も初め一遍位は日本人の店から取る、けれども、後では支那人の方ばかりから取るやうになる。日本の店はそれといふのが親父の生活に金がかゝる許りでなく、細君も細君、娘さんも娘さんでかかる

のであるから、その結果、其の生活費を十分に得る爲に、店の品物に三割も五割も掛けなければやつて行けぬことになる。結局支那商人との經濟競爭に負けてしまふのである。日本人の生活程度の高いと云ふことが、日支小商人同志の競爭の上にどの位不利益になるか分らない。

尙又無駄な費用と云ふ點からみて、數年前天津に於ける日本の銀行會社方面の調べたものを間接に聞たい處に依ると、天津の料理屋その他に持つて行つてそこの帳場に支拂ふ金が景氣の好い時分には年に少なくとも一百萬圓を下らなかつたと云ふことである。それは銀行會社の內部のからくりにある事で、その邊のやりくりをどう云ふ風にされて居るか自分などには能くは分らぬが、其の爲に日本の事業の發展した事もたしかにあると云へやうけれども、一方から云ふと又それだけ無駄な生活費がかゝつた譯である。こゝに之を無駄と申すと、一寸語弊があるが、要するに思ひがけなく仰山な金が消えて行く。支那人間ではその邊の程度がちがつてゐて、そんなことは餘りないやうである。かやうな日常生活の費用の上に非常な差のあるからには、日本人は到底支那人には勝てないのである。丁度日本人は亞米利加へ行つて勞働をやると、日本の勞働者に亞米利加の勞働者が勝てないと云ふのと同じことである。その差がどの位の開きになるか判らぬが要す

るに東洋の舞臺に於ては日常生活の上で日本人は支那人と競爭が出來ぬ。是は極めて平凡な云ひかたであるけれども事實がさうなのである。日本の政府が如何に在支居留民を保護し、どんなに經費の上で補助した所で個人經營の事業ではどうしても負けてしまふ。それは過去四十餘年間に亙る臺灣領有後の日本人の個人商店の成績を見てもよく分る。

臺灣に於ては總督府がよく保護をして呉れるから、製糖會社にしても、他の商事會社にしてもどうにかやつて行ける。總督府のバックして呉れてゐないものは、皆本島人の爲めに完全にやられてゐる。個人的の好い仕事は雜貨商でも醬油商でもすべて本島人に取られてしまつた。この他に色々と原因のあることであらうが、矢張り生活費が日本內地人は高いと云ふことにあると云へる。支那だつてそれである。個人の商賣では支那人にどうしても勝てない。併し最近神戸邊の居留地の話を聞きますと、餘りに日本人のやり方の辛辣である爲め、流石の支那人もやり切れなくなつて、段々廣東へ引揚げて行くと云ふことである。最近神戸の理髮業者の間の話を聽いて見ると、神戸では理髮を開業するものに對しては簡單な試驗をすることにしたさうであるが、國語を初め色々な學科まであつて、日本人には差支ないけれども、支那人には受からぬやうに出來てゐ

るらしい。これはつまり政策上から出てゐることで、支那人の理髪業者が非常な勢で安い散髪店を開く、町の商店の小僧さん達などは、どん〳〵支那店の方へ行くので、二千人から居る日本の理髪業者はバッタリ立行かなくなつたと云ふ處から、其の對抗策として、さう云ふ試驗制度が設けられ、日本の理髪業者を擁護するやうになつたのであると云はれてゐる。これもその大體の傾向が支那人とは競爭が出來ないことを裏書きするものである。さう云ふ事實は大連に於ても、或は天津、漢口に於ても、認められることである。又上海の文路（ブンロ）、乍浦路（チャブロ）、或は吳淞路（ウーソンロ）、と云ふやうな方面には日本人の商店が澤山ある。けれども、支那の事業はむつかしいものと見えて十年經つても二十年經つても、容易に資本の殖えるところには行かない。南京路 —— 大馬路の方に出て見ると大きな店を張つてゐる日比野と云ふ瀨戸物商店があるが、その他上海目拔きの場所に個人として踏み出して居る者は二、三軒しか無い。上海に日本人が二萬數千人から居ると云つてゐても、中々むづかしいものとみえる。尤も一方に大きな紡績業や其の他の賴りになる事業が日本人經營でいくらでもあるから、可いと云へばよいようなものであるけれども、日本人の一般海外發展振りから云ふと、事變前はむしろ情ない有樣であつたと云はねばならぬ。

かやうな現象を捉へ來たつて之を悉く生活問題で解決するのは少々無理かも知れぬけれども、日本人の海外生活に就いての覺悟決心が足らぬと云ふか、其點で支那に向かつて發展して行くと云ふ上に不利なところがある。不利と云ふよりも、適應しないやり方をしてゐるのであるから、どうも支那へ折角出て行つても、出榮へがしない。そこで私は支那に行く日本人は生活振りに於て支那人と同じやうになる丈の覺悟を有てと云ひたいのである。けれども、そこまでは行かないにしても、支那人式になり支那式をよく理解するまでになつて欲しい。さう云ふ人は上海にも今日までも既に多少ありますが、子供に至るまで支那服を着て支那人の食べものを食べ、總べて支那人式にやつて滿足であるといふ處まで行くのは、餘程むつかしいらしい。そこまで行けば、よし事件が起つても恐ろしくない。此の行き方が肝腎であるのである。繰返して云ふが日本人はともかくも先づ第一に日本の日常生活に於て衣食住共に餘り金がかゝりすぎる。この生活費が澤山かゝるといふことが、否かけるやうにしてゐることが支那に於て仕事をする場合に大變な妨げになつてゐるのである。

宣傳技能に缺くる日本人

日本人は、非常に宣傳が下手である。從來のやり口では此の上支那に何億の金をつぎ込んで見ても、殆んど駄目である。宣傳が巧くなければ冴えない。宣傳さへ巧くやれば、さう金を澤山投じなくても、もつとよい成績が擧げられる。其の昔彼の蔣介石の南軍が財政窮乏を告げながら、着々效を收めて行つたのは大部分宣傳の力である。當時上海には殷汝耕が謂はゞ南軍の宣傳情報部部長になつて居たのであるが、南軍側は皆宣傳が巧かつた。北軍の張作霖の方には宣傳の腕ぞろひを捉らへて居らなかつたらしい。その點はたしかに南軍に及ばなかつた。

日本の資本家などは技師さへ備へておけばよいと考へ、高等工業出とか工科大學出とかの良い技術家を寄越して、それで機械さへ完全に廻ればよいものゝやうに思つてゐる。他の一面に何萬と云ふ大勢の職工の精神作用が毎日毎夜如何に廻るかと云ふことは殆んど考へて居なかつた。精神方面の技師の必要と云ふことに付ては一向考へてゐなかつた。唯長い棒で工人のそばに臨んで居ればよいやうに思ふてゐた。精神的方面に技師を入れると云ふことが資本家の眼中になかつた

といふことは、日本の從來の教育の結果でもあらう。といふのは自分は自分の信ずる所の善いことをしてゐる、それだからどこに恥かしいことがあるか ―― こちらは資本家としては正義人道に依つてやつてゐるのだ、何が故に亂暴にも工人どもは家を破壞し、機械を打毀すのであるか、と云ふことを云ふ。斯う云ふ風に自分のみで極めて高くとり濟した風がある。從來の日本人を使つてゐるやうな場合ならそれでもよかろうけれども、現實の問題としてはそれではいけない。支那では必ず宣傳でうまくやられてしまふ。今具體的の問題に付いて申すと、顧正紅と云ふ上海內外綿の職工が工場で殺された事實がある。するとそれに向つて七萬弗の賠償を要求して來た。そして世界中の新聞に皆筆をそろへて「噫顧正紅、顧正紅」と書き立てた。一工人なる顧正紅の名前が名高くなり、世界的に擴つてしまつた。さうなるとその騷ぎ立てた結果、七萬弗に相當する大問題になつてくる。少なくとも一萬弗は貰へることになる事實總領事の手から之を渡すことになり內外綿から之を吐き出した。所が日本の方ではどうであるかといふと豐田紡績の高等工業出の立派な技師で何とか云ふゼントルマンが一人その時横死してゐる。水に落ちてなくなられたのである。向ふは一職工七萬弗といふならば、こちらは之に對して七十萬弗も百萬弗も要求して可

いのである。ところが誰一人さう云ふことを云ひ出す者がない。私も當時口を極めて注意をしてみたのであるけれども、日本人は聞きいれない。曰く「言はなくともこれほどにやらるゝのだから、そんなことを申立てたら大變だ」と云ふ譯で、唯恐れておぢけがさしてしまつてゐた。紡績聯合會なども何時も唯集つて協議はやつてゐたが、所謂對策であつてその心配をして居られた割に、何等先方に向つて正々堂々と積極的に眞向から交渉することをしない。

之に反して支那側では破れかぶれで、賠償金はとれなくとも損はない、幾らでも出來るだけ物にしやうと云ふので強い。それから尙又面白いことには、一顧正紅の死んだに就いて大金が取れるといふので、あの邊の村から正紅は私の息子でござる、といつて出る親父が七人も現はれて來た。死人に口なしでどれが本當の親父か分らないといふ滑稽なことが始まり、結局七人の間に喧嘩が起つて一番宣傳の下手な先生が可愛想にも「お前は貰つて居るぢやないか取つて居つて、何故取つてゐると云ふことを云はないのか」と云つたさわぎになり、袋叩にされた。實際の金は時の總領事矢田君の手許に置いてあつたのだそうである。實に支那に於ては宣傳と云ふことが非常な力になつてゐる。「日軍百萬抗州上陸」などもその手であるが、軍隊などの方でも所謂百萬と

號して敵をおどかせると云ふ譯で、先づ聲で以て相手を風靡してしまふのである。さうすると、こちらでは鐵砲も何も擊たぬうちに、無抵抗主義でどん〳〵引揚げさせ得るのである。北伐當時の戰爭を見てもそれである。一方は殆んど無抵抗のやうな工合でどん〳〵逃げてゐる。北軍とは云へ存外弱い。それは一時の駈引もあらうし、樽俎折衝の結果でもあらうけれども、大體は南軍の宣傳でやられてゐたものと思ふ。支那に於ては昔し春秋戰國の世の蘇秦張儀を始めとして、あの當時からしてよく知られてゐる通り宣傳が事業の半分の力を成して居る。

日本人は右に述べたやうな支那の社會に飛込んで仕事をやつてゐるにも拘らず、而かも何億と云ふ資本をそこへ下ろして仕事をして居りながら、不思議に何の宣傳もやらず、又之に重きを置いてもゐない。又やつてもそれは頗る下手らしい。それであるから日本人は何時も宣傳の點で支那人から致されてゐる。日本人がこの點で支那人の上位に立てないと云ふことは殘念な話であるやうであるが、國民性としての初めつから判つてゐることで既に落第と解決されてゐる。日本人と云ふ民族はチャンとした法治國で、事が起れば結局は裁判官と辯護士で以て話が付くと云ふ所で事業をするならば出來る。宣傳は下手でも仕事だけは出來るのである。しかし支那の國では辯

護士も裁判官もあてにならぬ。國家も政治もたよりにならぬ。何も眼中におけるものはないのであるから、宣傳が下手であれば萬事おしまひである。如何に自分の家の住ひの塀を高くして見た所が、そんなものは何にもならない。一夜にして破壞されてしまふ。日本人は宣傳網の陣營を整へることはどう云ふものか至つて拙い。實を云へば其邊の細かい準備をも十分にやつて掛かるのが本當である。唯今迄の樣に技師が行つて機械を廻し、あとは日本人が監督だけしてゐてそれで利益をあげてゐたと云ふのはうま過ぎたのである。これほど危險なことはない。火山の上で仕事をしてゐたのと、同じわけであつたとも考へられる。

鄉に入らば鄉に從へ

かやうな日本人の弱點を考へてみると、私は支那に對して日本人がその主張を通し、日本人としての體面を維持するやうにするためには、何處までも平和的に奮鬪しなければならぬと云ふやうなことが、いくら決議されても其やうな決議だけでは效果がない。それは所謂日本式の大和魂を土臺とした所の日本人的のさとりや氣休めになると云ふに過ぎない。日本人は何時でも支那に

對しては支那式にやらなくてはならぬ。事が起ると例の强硬な談判をやつて、色々箇條を竝べ立て、謝罪させて見るとか、或は最後に、右の如き不祥事を今後繰り返さないことナンテお定まりのことを誓はしめてゐるけれども、是れ位效めのない空念佛はないのである。斯う云ふことを幾箇條書き加へてみた處で、支那人に對しては何にもならぬ。直ぐ翌日に破棄されてしまふ。それは陳友仁にしても蔣介石にしても誰れにしても口の達者な連中は、そんなことは空念佛として云ふであろう。云ひはしようが、併し少しもあてになるものではない。形式だけのことである。そして曰く「どうも自分の方では當局として充分監視をしてゐたのだけれども、目に一丁字のない連中どものやることで、仕方がありません。云々」と云ふ、それでしまひである。然らば首謀者を罰せよ ―― と云ふと、首謀者を罰して見たところで、こちらの氣休めになり蟲が少しをさまるといふ丈のことである。さうしたからとて賠償金が取れる譯でもない。何にもならぬ。あゝ云つたやうな空念佛を日本人はよくその條件中に加へて悅んで居るやうであるが、支那人の目から見たら笑つてゐるであらう。又大官連中で例へばむかし張作霖などに會つてテーブル、スピーチでも浴せかけられると日本人はひどくよろこばされてる。そして、大に肝膽相照したといふやう

な氣がして、歸朝して來る。日本人として支那に行つて張作霖に會ふのは、旅行中の一大事であつたかも知れぬ。恰度京都に遊んで祇園に行くやうなものである。もつと深い意味もあらう、けれども、大體それ位のものである。張作霖の方でも、日本からの面會人は、次から次へと入り代り立ち代り幾らでも來るのであるから、其位の積りで然るべくあしらつてゐるものと考へられる。支那のことはよほど支那人の心になつて考へ直して見ることが必要である。支那の事は全體が芝居で、餘り力を入れて前後も考へず固くなつて居ると、力抜けがしてしまふ。而かもそれが一箇年か二箇年限りで緣か切れてしまふなら、どうでもよいけれども、日本と大陸とは最早やいかなる事があつても決して離れられない緣になつてゐる。そこに今次の日支事變の據つて來る所があり、今後も永久に日本は支那の面倒を見ねばならぬ原因がある譯である。だから、一寸したことで怒つてみたり、悅んで見たりするやうでは、到底大人としての近所つきあひも出來ぬ。過去に於ける日本の出兵などは恐らく英吉利や、亞米利加の方から利用される材料となつたであらう。支那の青年達にしても出兵から幾らかでも仕事が出來てゐる。從つて又必ずしも、出兵した日本が憎いと云ふ考へでゐる譯でもない。

山東の一部に日本の兵隊が上陸して來た所が長江江岸には實際は何の痛痒も無いのである。しかし何でもないからとて默止してはゐない。そこが色々と排日のたねに利用された。而かも日本として、食糧問題や製鐵の問題や種々のことを考へて見ると、實際餘り大きな聲でここに云へないことが澤山ある。

ところが支那人はそこに行くと徹底して居る。日本人が時々やるやうな氣休め的なことはしない。好い加減の芝居も打つことは打つけれども、そこはズツと段違ひであつて非常に大きく高い所から見てゐる。多くの事はそれでゐて氣がつかなかつたやうな顏をして居る。今支那の大官のタイプを物語つてゐる一挿話を話して見ると、かつて某大官が長江の江岸で、日本の名士と會見してゐた際に飲んでゐたビールのコップの中に蠅が一匹入つて浮いて居た。それに氣つかなかつたのではなかつたが、さも知らない顏をしてビールを飲んで、ポッと蠅だけ吐き出した。そのとき日本人であつたならば、直ぐボーイを呼んで蠅が入つて居た事を示して氣を付けなければ可かぬ、と小言らしく口に出すに違ひない。或はボーイを呼んで其のビールを捨てさせるやうなことをやるであらう。所が支那人の大官はさう云う點に付いては、話の大局に眼を着けて、場面全體

の空氣を反らせないやうにする。蠅などのことは自分だけが我慢をして居れば可いとて知らぬ顔をして居る。日本人はそこを知つて居る通りに云つてしまはなければ、氣が休まらない。日本人はさう云ふたちなのである。是は極めてデリケートな話である。けれども、お互が皆その方である。日本人は清らかなものだけしか飲まぬ。固より汚れたものを呑む事は嫌ひである。清濁併せ呑むことも出來ない。だが、もし知つてゐて知らない振りの出來ないやうな人は支那の事業に關係してもうまくいかない。知つてゐて知らない顔の出來るものにして初めて支那の人々と交渉をすることが出來るのである。そこは支那の人は心得たものである。私の知つてゐる上海にゐた某會社員が段々支那人化して知つて知らない振りをして居つた。その某なる人がいよいよ轉任をすることになつて、支那を出發しなければならぬと云ふので、スッカリ荷造り萬端出來た時分に、細君は其の人に向つて「もう一軒の方はいいのですか」と云つた。主人は吃驚りして「もう一軒とは何か――」「だつてもう一軒あるぢやありませんか」とやつた。主人は腹の底をえぐられたので態度が全く一變した。これは支那の他の地方にチャンと拵えてあつたのを、今まではその細君が知つて知らぬ振りをして居つたのである。けれども、もうここが土俵ぎはで愈々引揚げると

云ふ時になつて到頭言葉に出してしまつだのである。よく支那式に我慢の出來た話である。兎に角知つて知らない振りさへ出來ない人が、支那のことに關係をすれば、その人は必ず失敗する。十年居つても二十年居つても資本も殖えず、成功もせず、うまいことにありつかないのである。是は支那と日本の著しく違ふ所である。

濁濁併せ呑む大陸人

昔後藤新平伯からの話であつたが、臺灣で總督府の方の仕事をやつて居つた辜顯榮と云ふ人の所に、一時日本人なども番頭として這入つて居たことがある。其の時日本人は例の日本式の潔癖性を現はして、誰某は隨分やり手ではあるけれども、しかし、あれは裏面に於てこれこれの香ばしからぬことをやつて居るから、御注意にならぬといけませぬと言上した。所が主人の答が面白い。「ウムさうか、私はさう云ふ者が私の傘下に集つてゐると云ふことは、非常に愉快に思ふ。もう少しあれが大きくなるまで放つてそのままにして置いて呉れ」――これにはその內地人先生大いに赤面をしたといふことである。支那ではどうせ勇將の下には弱卒なしである。支那では

大將も大將だが、部下も又部下である。督軍階級もやつて居れば、師團長もやる。以下ズット下の者まで要領はよろしい。やつてゐる事は同じやうなものである。たゞ程度のちがい丈のことである。支那では濁々併せ呑むと云ふことに依つて、みな仕事が出來て行く、清と濁ではまだまだ物足りないのである。例へば之を貨物で云つて見れば、印度から棉花が貨物船で澤山入つて來る場合に其の幾つかの荷物には全部阿片が詰めてあつて之を受取る。又支那人は極めて秘密なものを送り出すと云ふ樣な時には、棺桶を使ふといふ。棺桶は支那の習慣として絶對に開かれない。而かもそんなことが分つて居ても、そこを知らぬ振りして行く所に趣がある。正義を振りかざしてゐる行爲には、どこまでも正義を求めると云ふことは、日本に居て日本人に對する時ならばよろしい。けれども、支那に於て苟しくも支那人相手に仕事をすると云ふには、さうそう潔癖なことのみ云つてゐたのでは實際仕事が出來ない。知つて知らぬ振りをするだけの決心、並に本當に其處まで行けると云ふ自信の無い人ならば、支那の事業はお止めになつた方が可いのである。お止めになつたら可いと云ふことまで云ふ必要はないかも知れぬが、要するに其處の要領を考へに入れてゐないと失敗の基である。

支那社會を動かした共産ロシア

支那の人々は前にも申上げたやうに、日清戰爭で日本が勝つた積りでゐても、向ふでは負けたとは云はぬ。やはり勝つたやうな積りで居る。少なくとも日本に敬意を表し、日本人を畏れてゐるやうな氣色は固よりない。それは政府筋の當局者ぐらゐの者は、畏れてゐるかも知れぬ。けれども民族全體として、一束にして日本人を眼中に置いてゐるかどうかと云ふと、頗る怪しい。然るに日本人は支那人が吾人を眼中に置いてくれて居ると云ふ風に考へて居る。そこに大いにピントの合つて居らぬ所がある。

日本人が支那で失敗を招くことの原因はたくさんあるが、そこにピントの合せ方を知らぬ點が主因の一つとなつてゐる。具體的の話を申上ざれば、上海に於ける例の五卅事件でも、ストライキから起つて色々の問題を起して居たが、支那人側の立場になつて色々考へて見ると、その眞相に就いては、相當に澤山の原因がある。例へば上海の市政府で道路を造るといふやうなとき、殊に郊外の方面に道路を造ると云ふやうな場合に、多少の金は地主に拂つて居るか知らぬが、大體

默つて道を造つてしまふと云ふことである。成程さうすれば西洋人達にはアスファルト路であるから便利であらう。けれども、支那人自身は畦道を歩くだけで、少しも差支てゐない。況や自分の土地を削られては困る。それを兎や角工部局へ抗議でも云つて行くと、「お前さんは何も愚圖々々言ふ必要もないことだろう地價はこの道路に沿ふて兩側とも何倍、何十倍と上つて來たのだから、却て感謝したら可い位のものだ」と云ふやうなことを云ふのである。

又粤漢鐵道では、武昌のそばでかつて數百名の支那工人が英人から殺されて居る。新聞に出るばかりであつた、けれども、英吉利側の非常な反對があつて遂に出さずに濟んだことがある。これは何百名と云ふ支那勞働者を枕木を枕にさせて轢き殺してしまつたのである。其の他色々なことが支那人側に重なり重なつてゐる。無論一面に於て、英人は永年に亙り種々文化事業もして居るけれども、それも支那人の方で賴んだわけではない。賴んだことは一遍もない、皆押賣り的である。さう云ふ餘計なことをして、散々窘めて窘め拔いて居ると云ふやうなことの爲に、そこから先年の排英、排外の運動も起つたのである。公平な立場から云へば、皆各々自分の求めた結果である。事實斯う云はれても、一言もないやうなことになつて居ると云へる。支那側にピントを

合はせて見るとかやうに見られるのである。

以上の見方は少し支那人の方に偏り過ぎた見方になつてゐると思はれるかも知れぬが、お互にもう少し支那人の考へになり、更に反省をして、日本人の將來の爲にも又支那人の爲にもなるやう其邊を十分に了解して、今度は昭和十四年からになるか、五年からになるか分らぬが、双方打溶けて春風駘蕩の氣分で新規に出直さなければ、本當の意味に於ける日本人の支那に對する發展は出來ない。

今までは何等その邊の自覺なく、又支那人の精神作用、支那人の氣持ちの研究を積むものもなかつた。又うちを顧みるに殆んど支那人に對抗し得るだけの宣傳の方法なんかも有せず、唯投資したといふ丈で、他に全く何等の準備なくして支那に臨んで居つた。私は曾て大阪に於ける或る新聞の社長さんに斯う云ふことを言つたことがある。「日本で英文の新聞が出るのも結構ですが、一つ上海の舞臺に乘り出してやつて見られたら如何でせう。やる御考へはありませぬか」と、所が答へて曰く「五十萬の金をのしを付けて出す人があればやつても見ようが、自分の社としてはやることが出來ない云々」と、大新聞を以て天下に鳴つて居る社でも日支提携の宣傳の爲に、東

洋の舞臺に乘り出す氣分にはまだなつてゐない。五十萬圓の金はとも角として惜しいものであると思つた。日本はまだ朝野ともにこの程度にゐるのであらうと思ふ。しかし日支事變が片付いたら、否もうそろ〳〵日本も支那で新聞の一つや二つ持つことが必要なのではあるまいか。對支文化事業などの金を細かくチビ〳〵使ふより、一つまとめてその方面に金を出してやらせたら何うかと思ふのである。そこに行くと露西亞は腹が太い。先に自分が北京に居つた頃、赤化の目的の下に、日本に九百萬圓、支那に千萬圓の金を出して居ると云ふことが、某方面に傳へられてゐたのを聞いたことがある。廣東方面には當時既に大分の金を出して居つた。豫算外に幾ら出して居るか分らぬが、兎に角支那と露西亞は國情が或程度までは似てゐるので、宣傳で事をやる國柄である。それはあの通り無智の民衆が多いし――又その民衆を動かしてやるなら、その宣傳の方法を巧に利用して行かなければならぬのである。資本主義の頭で支那へ行つても遂に多勢にはかなはぬ負けてしまふ。

日本の擊劍なども強い、柔道も強いには強いが、しかし一人や二人の泥棒の相手なら兎に角、二十人、三十人、五十人、百人といふモッブが一時に押寄せて來たといふのでは、柔道の五段で

あらうが擊劍の名人であらうが、何も役にたたなくなる。大勢に圍まれては敵はないのである。其處になると支那人は擊劍も柔道も知らなくても、唯、彼等には宣傳が巧いと云ふ武器がある。數を以て打ちかかつて來ると成功する。前にも述べた如く南軍の成功は恐らく軍器や精神の方よりも、寧ろ宣傳の力であつた。其宣傳の方法は、勞農政府の巧みなるやり方であり又その方針であるが、農民の間にまでも侵透して來てゐる。農民が鋤鍬を取つて、北伐軍と共に宜昌の城内にも乘込んでゐた。五十年許り前になるが、漢口に居た時、英和號と云ふ、外國爲替の錢莊が例の土豪劣紳條例の槍玉に擧げられ、いきなり百萬弗からの財産が沒收された。矢張り其の頃清朝の學者で、說文の大家であり、戲曲や小說にも秀れてゐた、葉德輝先生が長沙の町で殺されてしまつた。支那の社會は民衆の力を賴んで、勞農思想からプルヂョア階級を根こそぎに殺害し、社會の改造をやつて革命の完成をやらうとしてゐたのである。北伐完成當時の武漢の政治には消長があつても、その社會には盛にレーニン、マルクスに關する書物が出版され、雜誌としては紅燈其の他の共産黨宣傳のものが出てゐた。共産主義ＡＢＣなどと云ふわかり易い種々赤い方面の書物がどつさり流布して、而かも非常に價が安く供給せられてゐた。斯の如くにしてソヴェートに支

配された武漢の天地は當時社會改造期と云ふか、革命期と云ふか、さう云ふ非常な時期に際會してゐたのであつて、當時牧野伸顯子の會長をしてゐられた同文書院までがスッカリやられて居た始末であつた。後蔣介石はロシアに背負投を喰はせたが、今や日支事變に際し再び援ひをロシアに求めて遂に自繩自縛に陷つてゐる。

豫斷を許さぬ支那社會の動き

ボローヂン其他共產ロシアの思想と組織とをその初め取入れた武漢政權下の支那の社會狀態は變りも變り、非常な變りかたである。湖南、湖北、江西あたりでは、地方にゐるもので三千圓以上の財產を有つてゐる金持は、之を密告して來た者には褒美をやることになつてゐた。逆產を有する所謂土豪劣紳であるといふのでその財產の出來た徑路を色々と調べて、それを不法の所得であるとし之に封印し、沒收し、或は主人を拉致して銃殺すると云ふやうな順序になるのであるが、當時は南京政府の方でも、土豪劣紳懲治條例と云ふものを出して居たが、讀んで見ると、蔣介石の政府は表面反共產主義を唱へて居るやうであるが、內面それらの條例は武漢の方と可なり似

たもので、相當以上殘酷に出來てゐるやうであつた。支那民族は一概にはいへぬが、當時の北京政府は軍閥であるが南京の三民主義の政府は穩健だからと云つて、それに好意を寄せて見たり、或は又武漢政府は極端に從來の社會を破壞するものであると云つて、之を甚だしく初めから毛嫌ひをして見たり、色々にやつてそれぞれ列國からの同情を得たり、或は非難攻擊を受けたりしてやつて居たが、之をダーク、サイドから云へば何れも同じ穴のむじなである。つまり同じやうなことをやつて來た經歷を有つて居るものばかりで、いざと云ふ場合には又同じやうな殘忍なことをやらぬと誰が保證し得やう。南京事件に於て嘗めた所謂正規軍のやり方を見ても、その邊の消息は能く證明されて居る。それを一方は聖人君子の如く莫迦に買ひかぶつて見たり、一方はバーバリアンの如くに見さげて見たりするのは、餘りに支那の事情を單純に見過ぎたもので、國民性を無視したものである。

或は又支那に於て、政府から斯う云ふ言質を得て居るからとて、もう大丈夫だ、信用してよろしいと云ふ樣な事を思ふものがあるならば、とんだ間違が起る。それは列國と同じ程度の信を置ける國に於てこそ初めて云へることである。斯樣な事を言ふのは、自分の國情に見る普通の慣例

を基として支那を推測するものであつて、結局莫迦を見る破目に陥ることを承知してゐなくてはならぬ。又支那の方らか云へば、列國に莫迦を見させるのは何でもない。何時でも支那の方から先手を打つ。すると列國は之に對してどうして呉れ斯うして呉れと申立てる。所謂文明國が眼に一丁字も無い支那の民衆、兵隊どもから、先手を打たれて、二進も三進もならぬやうな苦しい目に遭はされることになる。或は英吉利の議會を騒がせたり、日本朝野の有織階級を騒がせたり、又資本家を騒がせたりする。殆んど教育も何も受けて居らないやうな連中でも、一等國を向ふに廻して、自由自在に之を醜弄する、散々亂暴をやつて置いて、後は知らぬ顔をしてゐる。又それを支那政府當局は利用してゐる傾向がある。それで後で色々列國から條約違反だとか何とか云つて、抗議を申し立てて取極めをすることもあるにはあるが、要するにやられた方がいつも負けと云ふことに決つて居る。それと云ふのも初め列國は相手が暴民たちのことであるから、皆眼中に置いて居ない。眼中においてゐないものからやられるのである。それをやられない様にするには、どう云ふ風にしたらよいかと云ふことは支那人自身にしても、官憲にしてもなかなかその方法がつかない。唯しかし支那人はいつもそれを利用して居る。又それだけの覺悟をしてゐると云ふこ

とを申上げる外に何もない。しかし又支那のことは多くの事を豫想して置くと間違ふ。能く支那の軍閥其の他に付いて、豫測などされることがあるけれども、支那の問題の將來は誰にもわからぬ。豫言などしても決してその通りになるものではないことを申上げて置く。

支那の社會は、日本の社會の組織とちがつた組織を持つて居るし、それに、又支那人の常識は日本のそれとは十倍、數十倍、數百倍といつた大きな大陸的の常識を有つてゐる。而かも從來實際は日本を眼中に置いてくれてゐたでもなし、列國も亦眼中に置いて居ないらしい。辭令の上でこそチヤホヤ言ふが、いざとなつては一向眼中に置いてゐない様な仕打ちや行動を執る。又今後新政府は兎も角として他のものは益々その傾があると見ておくの外ないかも知れぬ。從つて今後日本の植民 —— と言へば言葉が悪い、穏かでない、當らないことになるのであるが、支那に行つて事業をやる人々は、衣食住を初めとして、日常生活に對する從來の日本式の考へを、押し通すと云ふことを改め、同時に出來るだけ安全な、自衛の途を取り得るやう様仕組を拵へておかなくては百年の計を立てた仕事は出來ない。

支那人の生活に見る悠久の姿

次に自分自身の經驗から、斯ふ言ふことを述べて置きたい。私は隨分危險な土匪の村や馬賊の出沒する深い山の中などに入つたり、又夜分變な傭兵と一緒に歩いて見たこともあり、或は氣持の悪い駕籠に乘つて夜の山路を行つたこともある。能く人が「君はピストルを有つてゐるか」―「そんなものは持つて居ない」と云ふと「それじや僕のを貸してやるから持つて行け」と云つて呉れるが、しかし自分には何時でもそのやうな兇器の必要はないから「要りませぬ」と斷る。或時などは大谷光瑞師から自分は「奥地を歩きなさるのなら、護衛兵の五六人も連れて行かれたら」と言つて下さつたこともあるが、私は「御親切は有難ふございますが、私のやりかたは」と言つてお斷りをした。多くの人は奥地の支那人と言ふものに對して間違つた考へを有つて居て、初めから良民でも何でも、泥棒であり人を打殺すものだと言ふ風に思つてゐる。それは能く支那語を操り、幾十年も支那の土地に住みなれて居つたと云ふ人でもさう云ふことを考へて居るものがある。さう言ふ人に限つて、平素二言目に支那の悪口を云ふ。必ず支那人は恩を知らないと

か、支那人は獰悪であるとか言つて、支那人のダークサイドの方面ばかりを指摘しようとする。自分はそれを知つてゐる。併し私は支那人はどんなに悪い行ひをしても、人其のものは悪くはない。實にキョロリとしてゐて面白い。淡白であつて、滑稽味があり、飄逸味もあつて、人間としての味がたつぷりある。金儲けに汲々として居るやうであるが、反面には日常生活に美點があり、又一種の人生觀を誰れ人でも持つてゐて、その間に非常に裕りがある。誠に民族としては面白味のある平和な民であると思つてゐるのである。

何時も言ふ通り上海九江路あたりの銀行の澤山あるクオーターに行つて見ると、銀行の窓の所に鳥籠をブラ下げ小鳥を相手にしながら算盤を彈いてゐる先生もある。日本でさう言ふことをしてゐやうものならば忽ちボーナスに影響する。さう言ふ風なところに、非常な裕りを有つて人生を達觀して居るのである。されば自分は、支那人を見るといつでも可愛い氣持がする。それで私は眼に入れても痛くないやうな感じがするので、支那の若い學生などの保證人にもなつて居る。支那青年の爲めに國情を話してゐたら、北京の陸君といふのがボロリと涙を出したこともある。支那には色々な方面の人に知己を有つて居るが、要するに支那の人々は皆夫々に頗る可愛いと

ころがる。私がさう云ふ風に思つて居るからか知らぬが、又向ふの相手方の方でもなかなか好い感じを以て接して呉れる。如何なる危險な場所、いかなる戰爭のときでも危險を感じたことはない。或は明日立つては危いから、もう少しゆつくりして居らつしやい——と云ふ。或は半分は御世辭で言つて居るのかも知らぬけれども、不斷の氣持が能く分つて居るから其點については疑はない。殊に禪宗寺などの客堂にも能く參るが、禪寺の畫僧、詩僧などの連中と話をして居ると、中中詩を作ることの巧みなのや繪の巧い坊さんも居り、又相當學問の秀れたのも居たりして賑かである。又尼さんも出て來て實に愉快に話す。支那の田舍はむしろ私としては天國に遊んで居るやうな氣分になつて居られるのである。

かやうなわけで自分などには支那の何處へ行つても、何等の不安がない。さう云ふ話をすると人はよく「君が若し交渉ごとなり何か掛引の用を有つて歩いて居たとすると、さう云ふ譯に呑氣には行かぬぜ」と言ふものもある。それはさうかも知れぬが、それは思ふにそれぞれ其の人に備つて居る事であつて、支那人の心持は總て、小鳥を弄びながら算盤を彈くといふ氣分である。その心持で以て金儲けのことをも呑氣に考へてゐる。日本人のやうに殊に此の頃の學校出のもの

のやうに齷齪はしない。あの面白味のある風俗、人情、習慣等をよくかみしめつつ自分の仕事をすると言ふことにすれば、仕事其のものも上品に發展するだらうし、又自然と意外の方面に手も擴がつて行くことであらうと思ふ。つまり支那人の生活は極めて單純なうちに風流味があると云へるのである。

支那民族の日常生活への理解

日本人は、とかく大阪に於ても又東京に於てもさうであるが支那に對して何だか歐米の延長たらんことを希望してゐるやうな氣分が見える。といふのは、第一上海などに行つてみても日本人は成るだけ英語を多く使ひ、支那語を話さうとはせず、成るべく西洋人の恰好を眞似て、朝早くからゴルフリンクに出掛け、倶樂部に行けばゴルフの話をする方がよく持てる。單り上海のみならず、天津でも、漢口でも、どうかすると又北京邊りでも、その傾向が多分にある。支那を歐米の延長の如くみてゐて、支那の大陸と云ふことには一向考へを及ぼさないで、支那を見やうとするものが少くない。又丸ノ内あたりの本社の方でも、さう云ふ考へで支店長其の他の社員を見て

ゐる。これは元來を云ふと甚だ間違つたことで、此の頭の立前を變へない限りは、如何に有爲の人材を支那にやり、或はいかに澤山な人が支那が出かけ、又如何に何億の資本を支那に下ろそうとも、ほとんど無意味に終るのではないかと思ふ。これから支那へ行く日本人は何うしても亞米利加か、何處かに行くやうな積りでゐる考へを、一日も早く改めて貰ひ度いものである。そこが改たまらないでは、幾ら商店を殖したつて、いくら計畫が進められてもいざとなつたら臺なしにされてしまふ。平素たゞ、電話を以てイエス、ノーと云ふ樣な程度で支那人との交渉を片づけてゐる。向ふの家庭に遊びに出かけて行くでもなければ、向ふからもやつて來ない。日支聯合の宴會など開いても、飯を食つてしまへば、唯お互に默つて居るばかりで、名刺の交換位はやるにしても、情味ある話は出來はしない。それには言葉の關係などもあらうけれども、食後に玉突をするにしても、支那人は支那人、日本人は日本人同志で突くだけである。支那人は面白くないからサッサとかへつて行つてしまふ。斯んなことで日本は支那經營を今後何十年やつた所が、紡績事業ばかりでなく石炭の事業にしても、何の事業にしても本當の發展をすることは望みが薄いと云はねばならぬ。要は日本人は支那人を低く見ず、之をよろしく對等に見て、家庭的にも交はり親

しみの心を以て凡てを見てやるやうにする。支那人には洵に一種の面白味があり雅致のある民族である。そしてよくその心に裕りのある人間であると云ふことが解つて來ると、つい心易くなり、お互に「明日家に來なさい、お茶でも喫みませう」とか「明日龍華の桃を見に一緒に行つて見やうぢやありませぬか」と云ふ樣な輕い氣分になるのである。今日のところまださう云ふ氣分は全然ないわけでもないが甚だ少ないやうである。中には、支那へ轉勤させられると左遷でもされたと思つたり、或は夫ほどでなくとも仕方なしに支那に行くものが多い。それより倫敦とか、紐育とかに行つた方が望ましい。歸つて來れば本店の重役になれるからだ。支那には幾ら永く勤めて居ても重役には、殆んどして呉れない。香ばしくないからなるべく速く支那を引揚げることにしやうと云ふ氣分になるのも亦當然のことである。しかし今後こんな考へで果して支那の經營に日本が任じ得るであらうか、否日本は東洋の盟主たり得るであらうか。今後の日本は飽迄東洋第一主義で進まねばならぬ。

かやうなことを改めもせず、支那の時局がやかましくなり事件でも起ると我社は支那に莫大な資本を投じて居るが、甚だ不安で叶はぬ、實に當局は怪しからぬ、領事館は怪しからぬと云ふや

うな不滿がすぐ出るのである。當局も當局ではあるが、しかしかやうなことを言ひ出す前に、各自のやり方や不斷の考へに就いて顧みて見るの必要がありはしないか。これは餘り支那の方に捉はれ過ぎた考へと或はいはるゝかも知らぬが、私がこゝに云ふことは自分としては、殆んど地球の中心まで貫いて居る信念と、確信を以て述べるわけである。この點こそ日本朝野の一大猛省を促す所以である。自分は日本は今までのやうなやり方で、支那を見てゐるならば、今少し行詰つて、とことんの處まで行き、愈懲り懲りするところまで行くがよろしいと云ふ位にまで感じて居た。と云ふのは支那人の方の出かた一つで、今後は日本の運命が俎上におかれて居るとも云へるのである。實際從來の日本人の考へ方や態度であつては日本の爲にならぬ。戰爭がなくてもそれでは大冶の鐵鑛でもいつ何時來なくなり、三菱や川崎造船所にハンマーの音が聞こえなくなる時が來るかもわからぬ。或は又九江あたりの麻の輸出がいつ止まる樣な事になるか判らぬ。同時に日本人の支那に於ける地盤と、そこの事業が更にもつとひどく破壞され、根柢から臺なしにされる時が來るかも知れぬ。そこは豫想が出來ないのである。

そこまで思ひつめて考へて見ると、今次の日支事變にも見る如く支那の問題は實に日本の運命

を左右する重大な性質を有つてゐるものであつて、日本の文部省あたりでも教育上、餘程考へてゐて貰はなければならぬ問題である。日本の教育はたゞ日本だけの立場から倫理道德を說き忠孝の道を教へてゐる。それから日本の皇室中心主義の力說、之も勿論結構であり當然である。けれども今後の日本としては少なくとも東洋の盟主として大きな態度の教育を施さなければならぬ。今日はむやみに國際的とか、世界的とか云ひ立てて、歐米の眞似に汲々としてゐて、歐米的の型を本位とし東洋的の處が薄くなり、精神が拔けつゝあるやうに思はれてならぬ。

東洋日本に隣邦大支那の事情を知る方法が立てられてない。漢文にしてもどうも現代に觸れやうとしないやうである。又偶に支那に修學旅行に出かける者があつても、まるで二十日鼠のやうにクルクルと大急ぎで廻つて來るだけで、後には殆んど大事な印象を殘さない。とかく教育方面丈でも最も進んでゐなくてはならぬはずであるに、寒心に堪へない事のみが多い。文部省がそれでをさまつてゐるところへ、一般國民からも又何等要求らしい要求もしない。實業家の方面からも、文部省へ斯うもして貰らひたいと云ふ要求一つ出てゐない。唯當面の幾億の投資に對して利益を生み出さなければならぬと云ふことだけに汲々としてゐるもののやうに見えてゐる。資本家

の擁護も固より必要であらうし、引揚げた居留民の前後策の問題も當面の問題としては重大な性質を持つてゐるが、今後は更に大所高所から達觀して、支那の將來の問題に付いても、朝野を擧げて之を考へると云ふ所まで進まなければならぬ。多大の國幣を費し同胞の多數を殺して新支那を建設しても、又從來と同じ行方をして凡てを臺なしにしてから、始めて眼が醒めるといふのでは困る。いかに島國的とは云へ、日本人は向ふの壁に頭をブチ付けて見なければ、支那が分らないでは困る。日本人は支那が、まだ〳〵遠いと呑氣に考へてゐるうちに、知らぬ間に、種々な脅威が來る。戰後は支那人は日本を畏れて居るやうに思つてゐるかも知れないが、餘り眼中に置いて居ないのである。支那は支那で進路を行くことは今後とても變りはないと云へる。とかく眼中に置かれてるつもりで日本人がゐるから凡ての問題で腹が立つことが多くなる。支那を下に見さげてゐては、幾ら支那と交渉しても圓滿に行くわけがない。國民外交とか大陸進展とか云つても、武力下の國策の線に添うた官營業の事にのみ國民は醉うてゐる。自力で割込める自信はない者が多いのであるから、心持ちに於て既に巧く行かないのも道理であると思ふ。こんなことでは東洋平和のため死んで行く同胞戰士にも濟まぬではないか。

大陸人の面貌

大自然の表現

支那人の大陸氣分は爭へないもので、必ずその面貌に現はれてゐる。北方の人の面貌には北方氣分のボーッとしたところが何處とはなしに現はれて居り、南方の人であれば江南地方の敏捷な小賢しいところが眉間の間に表はれてゐる。それ故支那大陸の氣持は自ら面相の上に現はれてゐると見て差支ない。然るに南北支那を通じて支那民族全體の面相を玆に特に取出し、その全體の上から何か特殊の現はれがその眉目の間に見出されるかと云ふことを考へて見るに、之は一言にして述べ盡すことが出來る。曰く、支那人の面貌には偉大なる大陸氣分が漂つてゐる。その大陸的面貌を生み出すには、必ずやその背景として日本の島國などとは違つて規模の大きい自然の背景が控へて居ることを知るのである。謂はば支那人の面貌は支那大陸の保護色を受けて、其處に何となく大國民的のゆとりのあるところを見せてゐる。北方の平沙萬里、人煙を絶つと云つた茫々たる無限の大平野に生を營む者は、その背景に調和したる雄大味のある面貌を備へてゐる。或は又長江方面の潤ひの多い煙雨の間に生を營む者は其の間又生來雲煙模糊の氣分を漾はせて、溫雅

な顏付が何處となく見出される。何れにしても大陸人の面貌が、南北共に大自然の背景をそのまま物語つてゐることは爭へないのである。それ故支那大陸の氣分を細かく理解せんとするには、南北各地方の支那住民の面貌を一人一人材料に採つて、その顏をそのつもりで眺め研究して來る時は、恰も字引の單語を引出すやうにその大陸氣分を各要素々々が悉く明瞭にしてくれるやうな氣持がするのである。

支那の大陸氣分を觀察するには、先づ所謂都市、城內の生活氣分と更に城外に出でた片田舍の山間僻地に見る生活振り、この兩者を充分に比較し、又兩者の生活狀態を知り拔くことが必要なこととなる。支那の城內生活は大體城壁に依つて取圍まれ、狹くるしく限られた安全地帶の中に我も我もと押掛けて來る結果、支那生活とは云へ、意外に切りつめた生活振りを見せてゐる。從つて市井の巷に踏込んでその朝夕の市場を見るに蛙鳴蟬噪の中に肩摩轂擊、車馬織るが如き賑かな而かも可なり殺氣立つた騷がしさを見せて居る。之に反して田舍の生活振りと來たら、全く城內のそれとは異なつた趣きを呈し、農家の門前に設けられた前庭の廣いこと、或は穀物を日光に乾す爲めの廣場なども、如何にものんびりと十分に取られ、近所界隈の楊柳、小川、橋梁、其の

他前後左右に指顧し得る山水等も悉く採つて以て自然の庭とすることが出來ると云つた調子であるから、勢ひのんびりした氣分が田舍生活には伴ふ。殊に牧童の水牛に跨り菜種の咲いてゐる間をのたり〳〵と歩いてゐる景色など江南の田舍に常に見る場面である。かやうに自然を友として田園自ら相親しむの氣分に浸つて居る者は、その大きな裕りのある氣持が面貌の背景をなしてゐると云へる。都會生活に馴れてゐる人々はその點に於て支那大陸の氣分からは幾分遠ざかることになる。然し又支那の大陸建設的氣分、或は混雜熱鬧の氣持は城內生活でなくては見られぬ。それ故都會生活も田舍生活も共に支那大陸を諒解するには、之を楯の兩面と見て觀察しなければならぬ。文人墨客の洗錬された翰墨氣分は田舍の閑人にも見出されるが、又城內の文學ある人の間にも、之を見出すことが出來るのである。城內生活を營む者も親しくその過去の出身鄕里の事を聞いて見れば、多くは地方の田舍農村から來た者が多い。それ故に、大體支那の都鄙如何に拘らず、支那の人々に接する場合には悠長なる支那の大陸的氣持を夫々に漂はせてゐることを見出すのである。

多くの支那人の大陸的氣分を特に味はふつもりで之に接觸して見ると、普通の日本人に接して

居る時とは違ひ、何となく柔かみがあつて、ふはりとしたところがある。物に對してせき込むといふことがなくて、落付きがあり、觸り工合がよい。そのかはり、こちらで氣の立つてゐる時には對手がおいそれと應じないので、拍子抜けのすることがある。然し又そこに善いところもあつて、こちらが考へさせられることも屢々ある。兎に角日本人は自分の國民性のみを天下一品の如く過信する癖があつて、大陸氣分の隣人をのろまの如く見、貶してかかる傾きがある。之も社會の大勢上止むを得ぬ事情の存するためであらうけれども、日本人としては少しく冷靜に支那中國人の面貌でもゆつくり眺めて大いに悟るところがなくてはなるまい。

藝術的な相貌

今日支那芝居の上では善人を表現せんとするに赤い顏の面相を用ひ、又滑稽な氣分情緒を表示せんとするには白い鼻先の面相を用ひることになつてゐる。その約束の意味も自ら一般に理解せられて來てゐる。されば道化役者の舞臺面に出演せんとするや必ず先づその顏の中心に白粉を塗抹して出場する。これは各地おきまりものとなりむしろ舞臺面の幕の初めにはかう云つたものの

出演を見ることが約束になつてゐると云つてもよい位である。又その役者が白く塗つた鼻をぶらさげて出て來る時は面相の全體に一種の輕快なユーモアが伴ひそれがその役者の滑稽じみた立ち廻りと共に、大向ふの觀覽席にゐる客の心に面白く響かせるだけの力を有してゐる。かう云つた點から考へると支那の俗間一般の間ではその必ずしも芝居に出て來る時の顏のやうに色で塗り立てなくとも、それぞれの顏立ち面相の上には明るくて柔かい一種の意味が結付き、從つて支那の人の面相と云へばすぐ判るやうな相應の約束理解が出來てゐるやうな氣がする。固より一般の支那住民は皆が皆別段芝居じみたことを考へて居るわけでもあるまいが、しかし何となくそこに自分の顏、人の顏の別なくそれぞれ內心藝術的氣分を以て着色してゐる傾があるかのやうに思はれてならぬ。此の點を日本人の場合に就いて考へて見ると、日本人は封建の遺風によるのか、武士道の氣分によるのか、唯々常に威嚴を保つと云ふ考から固く構へんとする心持ちが眼目となつてゐる。所謂男子は凛々しく威のあるのを好み、また女にしても昔しからの古來の美人型と云ふものは愛嬌とか艶つぽい處とかはなくて、どちらかと云ふと物凄く、近づきにくい顏立ちが標準となり、凄味のあつて冷めたいやうな面相を眞の絕世の美人と考へたやうな傾があつたのである。

何れにしてもその威あつて容易に侵されないと云つた感じを起させるのがよいものだとされてゐる。

此の點から見て支那人の面相の標準を考へて見るとその基準が藝術本位に置かれてあるのであるから、丸でその見方考へかたが日本とは違つて來る。日本人の場合はどうでもかうでも自分でその面相を持すると云ふときどうするかと云ふと、成るたけ澄まして估券を落とさないやうにと努める。その苟しくもしないと云つた構へかたをする處に、日本人のよい處がある。又日本人にさうすることが必要な工合にもなつてゐる。事實日本人の十中八九までと云ふものはその氣分でゐる。特殊の人々でない限り御互の間の面相を藝術的に考へると云ふ見方をする者などはゐないのである。從つて日本での面相と云へば常識の上から云つても判る通り、

一、よく締まつてゐて、擊劍使ひの面相のやうな鋭さを帶びてゐるのを喜ぶ。少なくとも、こつちりとよく纏まつてスマートな敏捷な顏立ちになつてゐるのが好まれるやうである。

二、具體的に云へば目と目との距離に就いてもどちらかと云ふと近く相迫つてゐる方がよい顏立ちに感ずるらしく、從つて目尻のさがれるなどは敏く見えず甚だ受けのよくないやうに感ぜら

れる傾向がある。

ところが支那では丸で反對で前にも云ふ通り鋭敏とかスマートなのは喜ばぬ。氣の利き過ぎたやうなものとか、或は威嚴本位の面相に出來てゐる顏立とかは、土匪か猛者かのやうに思はれてゐる。そして成るべくは延びやかな藝術的なのを喜ぶのである。日本人自身の武者顏を喜ぶのは世智辛い社會の出來事と、萬般の事にただ卒直に又眞劍に驀進し、その間ゆとりのある氣持ちなどなしにぶち當たらうとする永年の間の習慣と意氣込みが表現せられて居るからであると思ふ。それ故目玉の坐り工合を見ても、日本人の眼光は鋭い。何れも皆擊劍使ひででもあるかのやうに目付きがギョロギョロしてゐて物凄く坐つてゐる。この點から見ると支那人の顏はちがふ。目玉でも藝術的と云はんか、いかにも穩かである。決してさうその鋭く空き巢狙ひのやうな工合に使つてはゐない。目に現はれた支那の人々の氣持ちは物に動かされない。從つてそれほど眞劍でもなく驀地的でもない。事實又その生活もそんなに眞劍でのみゐようとはしない。いつでも心の用意があり多大のゆとりを以つて臨んでゐると云つた態度を見せてゐる。ここに日本人の大いに學ぶべき處があり支那の人々に比べて雲泥の差を見出すわけである。

獨り顏付き面相の上から態度や構へを判定するのみでなく、更に根本に遡り日本人の性質を考へ、又その生れ落ちてからの尙武の氣象の養成されてゐる樣子を見て來るときは果してどうであるか。總體おしなべて日本人の面相は顴骨が高くて喧嘩腰のやうな顏立ちをしてゐる。尙武の氣象は日支兩國中どちらに多いかと云ふことは問はずして知る日本人側に勿論多いと云へる。露骨に云つてその面相の上にも見えてゐる通り、先づ日本人は生れながらにしてゆとりのある藝術顏をしてゐるものは甚だ少ない。ところがその尙武の氣分と反對な融和性に富み平和を愛好すると云ふ文雅の氣分と云ふ點になると支那の人にそれが多い。爭へないもので支那の人々はその都にゐると、田舍にゐるとを問はず、總べてが如何にも悠揚迫らない伸んびりした面相をしてゐる。之に反し日本人は不用意な言葉を使つてまま「間抜け顏」などと評してゐるがそれは失敬極まる評語である。賣り言葉と買ひ言葉で行くならば日本人の面相はむしろ「喧嘩づら」とでも評せらるるかも知れぬ。これは國情と周圍の環境のいらいらしてゐる處にゐる日本人としては止むを得ない事情に支配されてゐるので寧ろ同情に値するのであるが、それが世襲的に重なり重なつて來たものと見える。今日一代や二代の影響から來た面相と云ふわけにもゆかないと思ふが、

今後は益々之が甚だしくなるであらうと思ふ。そこになると支那の人々はその伸んびりした大國的な態度性質を世襲的にもこれまで幾代となく重ねて來た。そしてそれが自然と相貌の上にも表現せらるるに至つたものだと察せらるる。かう云つた事はどこの國でも幼少な兒童の頃からして何となく違つてゐるわけであるが、それが大人となるに從ひ益々その間の開きが甚だしくなるわけである。又これが啻に面相計りでなくその體格、姿勢に影響し全體の歩きつき、足の運びかた衣裳の着かたと云つた事にまでも現はれて來るのである。そこで愈々爭はれない開きを見るに至るのである。

固より支那人の面相と云つても南方には南方の面相があり北方には北方の面相があり、自然その間多少異つた特色があり何となくそこに區別がある。又同じ南方と云ふうちでも廣東人の面相と浙江人の面相と云ふのがあるやうに思はれる。これは安南人の面相が民國人のそれと區別されてゐると云ふほどに明白に判ると云ふのでもないが、浙江人と云ふと何となく日本式とでも云ふべきスマートなとにろ氣のきいた鋭い處がいくらか現はれてゐる感じがする。之に反して山東から河北山西と云つた方面の北方系になるといかにもその體格からして著しく違つてゐる所があり

又その面相の上にも本當に延び延びした處があり大まかな處が看取せらるるのである。これは南方北方それぞれその風土、地理、社會態樣等色々の原因が主となつて永年の間にかやうな特色を作りあげたものだと考へられる。今彼地の政府要路の人々のうちでも、浙江派の人々の面相を見ると思ひ半に過ぎるものがあるであらう。顏の話は褒めた話の時は差支もないが、あまり褒めた話にならない時は之を引合ひに出すことは禮を失する虞れがある。故にむしろここには遠慮して言及しないことにする。しかし讀者はそれぞれ隨意に意中の人物の面相に就き考へらるるなら大抵想像はつくことと思ふのである。

溫雅なる相貌

溫容人に迫る如き快感を與ふる者の面相と云ふうちには實は色々のタイプのものがある。そのうちの主なるものを列擧して見ればその面相の、

一　童顏なるものがあり、

二　聖人君子然たるものがあり、

三　大和尙然たるものがあり、

四　長壽の理想顏なる壽星然たるものがある。

何れもその相に違ひこそあれ、溫容玉の如き氣分をその風貌の間に漾はせてゐるものである。ここになるとその風貌は人格そのものの發露であつて單なる相貌だけの問題ではなくなるわけであるが、自分は支那游歷中幾度か南支の禪寺で禪僧、大和尙あたりに溫雅そのものと云つた相貌を備へてゐる人格者に會ひその風懷に接してその面貌のうちにさながら魅せらるるの思ひのしたものである。それは六朝佛とか鍍金佛とか云つたやうな八釜しい理想的な相貌の持主と云ふのでもないがその面相にふつくりとした處があり、而かも溫容、人をして溶ろけさせてしまふやうな美質を浮べてゐるものがあるのである。その全體としての感じは固より、その部分々々の點も豐頰、眉目、鼻口、耳朶からのどのあたりまでの樣子、すべてが何とも云へぬ藝術的に出來てゐるのがある。自分はかつて、南支は浙江省ユウヤウ（餘姚）と寧波の間の慈谿と云ふ田舍町に游び、普濟禪寺で定法大和尙と云ふに會つた。その禪師の相貌によつて始めてその代表的タイプなるものを見出し得たのであつた。そこでその地方に行く度に自分は大和尙を訪ね之が相貌に接す

るのを一つの樂しみとなしてゐる次第である。それも實はその面相の問題よりも禪師の人格と心のひらめきに接して居たいと云ふ心持ちに支配されてゐる爲めである。しかし、ここには一般的の話をするのが主眼で、特定のかうした禪僧を引合ひに出したり又特殊の階級のものを取出して云々せんとする考ではないのである。

さて支那の人々を全般の上から見るに公平に云つて溫雅なる面相の持主と云ふものが實に多いのである。これは必ずしも豐頰なる面相に特に限定するわけでもない。時には瘦せ形のものにしても、又中肉のものにしても、その面相の概して藝術的に出來て溫和な潤ひのあるものの多いのが特に目立つのである。と云ふのは面相を更に部分的に眉目、鼻口と順々に見て來てもその條件に叶つたのが多いのである。わけてもそのうち目が一番大切である。目は顏立ちの中でもその溫和な潤ひのある趣を表現するに重要な要素となつてゐる。日本人の顏が支那人の面相との間に最も大きな開きを生じてゐるのも實は此の目の樣子の丸きり違つてゐるところに原因してゐると斷ぜらるるのである。目と云ふ中でも殊に眼球であるが、日本人の目玉は大抵よく坐つてゐて人を凝視したり、意味あり氣に人をにらみ殺したりと云つた氣分を見せてゐる。威猛けだかに人の前

で力んでゐる恰好なども常に見受けられるのである。それ故に、如何に目尻のさがつた鼻の下の長い人であつても、その目付きをさへ見ればその日本人たることが判定せらるるのである。爭へないのはこの目付きである。日本人の目付き許りは致し方がない。臺灣の生蕃卽ち高砂族にしろ、南洋の馬來人にしろ、日本人にしろ、皆もとは同じ流れを汲んでゐた兄弟見たやうなものであるからいくらどう變裝して見たとて生蕃系の目付きを亡くすることは出來ない。その目玉のよく坐つてゐるのも偶然ではない。その目玉の入れ替へが出來ない限り日本人の目が優にやさしくなるなど云ふことは不可能の事かも知れぬ。これは日本人の天性である。別段眼光人を射るとか睨み殺すとか云ふことの練習をした譯でもないが、有史以前からの永年の世襲的傾向は、最早や今日如何とも出來ないくらゐきつい目付きを生み出すに至つたのである。

支那で見る溫容そのものを象徵した目と云ふものは、日本人から之を評せしむれば目玉の坐わり工合がよくないと云ふ。うすぼんやりしてゐるとか、だらつとしてゐるとか、延んびりし過ぎてゐるとか色々形容の言葉はあるが要するに褒めた言葉ではない。締まりのない目付きだと云ふ事になるのである。それはその筈で日本人の目から見ればさうでもあらう。日本人の如く眼光鋭

く人を射ると云ふ態度は之を好まず、殊更ら避けたがるやうな傾向を有する支那人の間では視線と視線の互に相交はることさへも好まないのである。かやうになつてゐる支那人士の間では自然その目玉の坐わりのギロッとしたのを好まないのは當然のわけであると云へる。きつい目玉をして相手に御目玉を頂戴させるなどと云ふ事は、日本の習慣ではよくあることであるが支那では殆んど見ない事である。つまりあらはに人をにらみ付けたり人をにらみ殺したりするのは支那人の普通避けたがる處である。これは溫潤玉の如きを好み又それを理想として考へてゐる習慣から見るも當然考へられることである。

されば支那で家庭を訪問し、客廳卽ち應接間に通されると云つた場合の樣子などを見ても支那は日本や西洋とは頗る勝手が變つてゐる。

第一應接室の椅子の並べかたを見ても一目してその支那式たることが首肯せられる。椅子はすべて周圍の壁に沿うて壁を背中に坐するやう並べられてゐるのである。新式の洋風に設備せられたうちは別であるが、舊來の支那式のうちであるならばすべて相對坐しないやうにおかれてあるのである。これはその椅子が紫檀とか紅木とか、梓とか云ふ沈重の趣のある材料で莊重に出來て

ゐる爲め、輕快に手でどこへでも思ふ處へ持つて行きにくいやうに出來てゐることが一つの原因ともなつてゐるのであるが、眞正面に視線と視線が衝突するのを避ける意味もある。

次に支那は應接間がさう出來て居る居ないに拘らず支那の人々の對話振り、應接振りと云ふものは一般に直接面と向かつて話合ふことは失禮な野人の法であると考へられてゐる。なるたけ顏は相手と見合せずに話合ふのが行儀正しい禮法だとされてゐる。殊に長上の人、貴人に對してはさうすべきものと敎へられてゐるのである。

昔から親や先生などに對して話しかける場合の如きも、その面相を見ずして相手の胸の處、目八分の處に視線を注いで物を云ふやうに敎へられてゐたことを記憶する。かう云つた方面の敎はつまり面と向かつてきつく視るの態度を戒しめたものと解せられる。その他その禮法として發達してゐるものは色々あり、デリケートな點に亙るものもかなりあるが、要するにその應接所作進退のことにかけては出來るだけ溫柔味を見せ、優しく文雅な氣分を漾はしむるを以つて目的としてゐたことと思はれるのである。

支那人との對話、談笑、折衝ごとの要領はすべて皆かう云つた溫柔、溫潤の一事で盡くると云

ひ得る。更にそれから根本的のことを云へば、支那社會の全體に亙りその底を流るる空氣に一種さはりのよい延んびりした處があり、それが各個人々々の氣分にも影響してゐることと思はれる。それがおのづから氣分にも現はれ面相そのものにも表現せらるる順序となつたわけだと解せられる。何と云つても國があれほどの大國であると云ふことと大陸であると云ふ事實とが、この爭はれぬ偉大な結果をば生み出したのである。之を汲々乎として毎日を窮窟に渡つてゐるゆとりない日本國民たちの面相と對比する時に、著しい懸隔の見えるのは無理のない事である。自然の生んだ大國の產物は天の成せる美質であるとも云へる。日本の人がよく知つてゐる人士を以つて之を例證して見ればかの梅蘭芳君の面相の如き、又かの法學博士趙欣伯君のそれの如きは何れもその最も溫雅の氣分を濃かに現はしてゐる面相と云へるのである。その外一般の多くの青年、壯年、高年だちを見ても、その他社會各階級の人々のそれを見渡して見ても、その年齡相應に又寄る年波の皺は爭はれぬとしてもどことなくその面相には一種溫雅掬すべき何物かが物語られてゐるのである。民國青年たちの間にも江南楊柳の池畔にたたずむ瀟洒たる美男子の雅趣に中々よい面相を見出すことが屢々ある。支那は南北各地にその窈窕たる美人の姿を見出すことは云

ふまでもない事だか、然かし又男子の側に美男子を見出すことの多いのは實は意外とする所である。而かもその殆んど全部と云つてもよい位、大抵のものが溫容にして潤ひのある面相を表現してゐることは特に注意しておきたい點であると思ふ。

滑稽なる面相

支那の人々は世の中全體を一つの大きな芝居と見て居る氣分がある。藝術家とか詩人とかの目には特にその考が强く働いてゐるやうに見える。支那の山寺や牌樓、邸宅の門前にある獅子の石雕などに就いて見るに、その面相が如何に威猛々しく作られてあるにしても、よく見る時は半面に又どことなくやさしい滑稽味を見せてゐる處が見出さるるのである。これは彫刻家自身の製作氣分の上に、さうした別のゆとりのあるひらめきが潜在してゐたのに因ることと思はれる。これは一本調子に唯物凄く表現すると云ふ計りでなく、別に慈愛の心持ちなり親しみの心持ちなり必ずそこに潤ひを附くる必要を認めてゐたことを發見するのである。その單なる藝術的な溫柔味と云ふことの外にユーモアに富んだ滑稽味を加味した相貌と云ふものは、よほど親しみの情の唆ら

るるものである。ところで日本人と違つてかなり日常生活の上に滑稽味をどつさり採入れてゐる支那人の間では、おのづから各人の面相の上にも亦滑稽氣分から出た趣が漂うて居る。これは各人の氣分にゆとりのあることを裏書してゐるものである。日本人式に唯眞面目一點張りの顏をしてゐるものには一寸求められぬ處のものである。滑稽は氣分を柔らめ潤ひを生ぜしめ又親しみの情を增さしむるに與つて力あるものである。一つの社會や家庭にとつて時に之が必要であると同じく、一つの面相の上にも亦之を必要としてゐることは言ふを俟たぬ。支那の人々の相貌はかくして各種のゆとりのある要素が兼ね備はり、而もそれが全體として藝術的によく纏められ洗練せられて來たと云へる。船中などでもよく歐米人や日支、馬來などと各國人の偶然相集つて居るところを見ることがあり、又上海市中などでも常に之を見るのであるが、その中で一等藝術顏をしてゐるものと云へば支那人の面相であるとのことをいつも深く印象づけらるる次第である。

相貌が齎す悠然たる會話

相貌の上にユーモアを漂せてゐるといふことは、人間社會の交際交渉事、其他日常生活の上に

頗る潤ひを添へることになる。事柄を滑かにすることになる。若しユーモアなくして互に相侵されまいとする油斷のない態度を相待してゐるといふことであつては、凡て滑かに行き難い。滑稽が日常生活の凡てに織込まれてゐるといふのも極端であるが、然し支那の社會を見、家庭を見、又友人仲間などの相接觸する場面を注意して見てゐると、そこにはその裏面に何とも云へぬやさしみのある滑稽味が閃いてゐる。尠くとも物を客觀的に見て愉快な氣分で、之に談笑を交へつつ物事を進めて行かう、而して自分は固より相手方の凡ての人々に快感を與へ、圓滑味のある氣分を持つて全局面を圓く穩かに進めて行かう、又さういつた方針で我自らが之を指導して行かうと云つたやうな氣持が看取せられるのである。

支那人の日常生活にはそれ故に滑稽味そのものを衣食住の價値と同樣に重く見て、之を取入れてゐる。從つて動もすればその雰圍氣の中に釣込まれて話の初めから終りまで笑の上に笑を重ね、珍談百出隨分きはどいところまで鉾先を進める事もある。然しどちらへもさしさはりがなくて、實に春風駘蕩而も大局の上から見てその氣分を大團圓に纒め、萬堂春色を生ぜしめて、解散に至るといふやうなことが多いのである。それ故その雰圍氣の中に投じてゐる場合には、全く滑

稽談の中に包まれてゐて、會合した意味が、何處にあつたのか、捕促するところがなく、さながら全く意味をなさなかつたやうな感じで歸つて來ることがある。然し一一眞面目に意味をくつつけて集まつたり、會談したりする習慣のついてゐる日本人から見れば支那の日常生活の實際は大いに趣きを異にしてゐるのである。初めもなく終りもなく、ユーモアに富んだ話題で終始一貫することと、それがどれ位又支那社會の銘々に非常な榮養價値を供給してゐるものであるか判らぬ。一言にして云へば捕へどころがなく、瓢簞鯰のやうな集まりであつても、その間に大いに笑ひ、且つ談ずるといふことが支那人の趣味であり、又特性ともなつてゐるのである。

されば支那人同士の間ではその氣分、その趣味、又それに調和して行くだけの自分の心持と云ふものがなくては、支那の社會に愉快な氣持で相伍して行くことが出來ないのである。冗談の一つもすぐ持出して破顏一番大向うの上手（うはて）を行つてユーモアで度膽を抜くといふ位の腹がなくてはならぬ。そして大向うを抱腹絶倒せしめれば相手の心理は既にこちらのものである。その實容易に麾いては居ないのであるが、然し少くとも双方の氣持がその滑稽味によつて相融和し、相理解し、そして互に遠慮の氣持がなくなる。之が支那人相互間のうるほひのあつて、思ふ存分氣持の

のびのびした社交を一段と深く又高くのばして行く方法なのである。從つてかう云つた目的に協ふ小冊子、赤本、黄表紙の類が、俗間の路傍に可なり流布してゐる次第である。一見哈哈笑を初めとして抱腹絶倒せしめる卑近な讀物は何時の時代にも各家庭で、又會館で讀まれてゐるし、忙しい店の小僧達にしても、暇を盗んでかう云つた肩の凝らない冊子を繙いてゐるのを見る。

日本では爲めになるとか、知識を進める上に直ぐ助けとなるものとか云つて、唯眞面目一方の子供の讀物が厭になる程澤山發刊されてゐるが、支那のやうなゆとりのある氣分を養成させるやうな滑稽本と云ふものは、繪本にも讀物にも殆ど出ない。從つて日本の家庭、日本の社會は眞面目そのものを標準となし、又知識慾本位を唯一の道と心得てゐる。爭はれないもので、その氣持が凡ての日本人の顔付の上にまでも現はれてゐる。相手方を大きなユーモア氣分で併呑するといふやうな意表に出たゆとりは、日本人の顔付には見出し得ないのである。ただ小じんまりして、眉をつり上げ、もの凄い目玉を見せて、相手を睨みころすといふやうな顔付が、日本人の理想の顔ではないかも知れぬが、標準的のものであると云へる。寫眞屋に行つてカメラの前に立つ時でも、十人が十人、殆どそのきつい顔をして氣取つた姿をする。之によつても略々この間の消息を

正直に物語つてゐる。

支那人の面貌は、之に反して人をにらみ殺すといふやうなことはなく、人をチヤームし、人を併呑し、或は大きく、ふはりと觸つて、而も何處となく面白い話題でも出して笑はせようといふやうなのが多い。よく支那人の手品師などに見るやうなユーモア氣分たつぷりのものが多いのである。或は之を露骨にいふと多くの大陸味を漂はせてゐる面貌は何處となく女に甘いやうな顔付にも見えるし、人生を何となく樂んでゐるやうな樂觀顔にも見える。或は運命と共に我は行くのであるといつた頗る悟つた顔にも見える。その點になると日本人の面相は如何にも女嫌ひである。又人生を試練としてゐるやうな緊張味はあるけれども、そこに多少人生を悲觀したやうな、疲れたやうな顔付に見える。

ある支那の人が、神戸に上陸し又横濱に上陸して電車か汽車に乘つて見ると、日本人の顔は如何にも掬摸然として見えると云つたものがあるが、大陸人の目には如何にもさうであらう。といふのは、顔にゆとりのある者は殆ど少く、又悟つた氣持の表はれてゐる顔付が少く、始終緊張味のみで張りつめてゐる。況してここに滑稽味などいふゆとりのある顔の現はれる道理がないのであ

る。廣く人生を達觀すれば、眉は八の字、目尻は下がり、泰然自若として浮世を超脱し、滑稽味をたつぷり浮べて春風駘蕩の處が望ましい。之は支那人の面貌(めんぼう)の上に多く見出すことが出來る。之は又支那の山水の美、風物全體が生み出したものであつて、日本の箱庭式の山水風物からは何としても生み出し得ない點である。

支那民衆生活の種々相

家庭生活

支那の家庭生活は大家族主義に出來てゐるが爲め二三十人から百數十人の家族を有してゐるものがあり、地方の土豪には二百人以上を算する者も少なくない。これは一つには家屋住宅の構造にも支配せられて居るが、一つには又社會的の理由にも本づいてゐる。下層階級の小家庭は別として中流以上の土豪にあつては重門高壁のうちに幾棟となく母屋側室廻廊を有し、中庭の奥に更に幾つかの住宅居室を抱有してゐる。一見門高く壁厚く住宅內部は各室の隔てられてゐる爲め家族の人數は知りにくく出來てゐるが意外に澤山群居してゐるのが多い。

門內各棟は中庭を眞ん中に方形に作り、それが幾度か奥へ繰返されてゐる。そして相當多數の抱容力を必要とするのである。古來支那は習慣として息子に嫁を娶つてやつても之を別に門戸を構へさせる事は極めて少なく、大抵は同一門內に一二室を充てがつて住まはせる。息五人あればそれぞれそれに室を與へてゐる。嫁來たり、子孫殖え幾年ならずして五福臨門の祥事を見ると云ふのが一般である。その多少なり家產を持てる家庭であれば何れもかうした方法によつて同一門

內に群居し集團生活を營むを以つて原則としてゐる。若し然らずして他所に一軒別に門戸を構へしむるとすれば不安を伴ひ危險を感じ又不經濟なわけでもあると見てゐる。本格的の家庭生活の根幹は家に恒產あり、祖先の祠堂あり、禮堂あり、居室、客廳（應接室）、書齋、客房、車庫、庖廚、茅厠等の備はれる外にまたユワンヅ（院子、中庭のこと）後園などのあるを常則となす。けれども一般中流以下にはかゝる構造設備は望まるべくもない。

支那の一般家庭わけても都城生活を營む者にありては、庭はあつても園のあるうちが少ない。林泉は後園に多く見出される。前庭は大抵瓦磚など敷き詰められ植樹されたるものは少なく、先づ蘭の鉢植や金魚睡蓮などの水甕のおかれてあるのが精々である。城外生活か又は田園生活でもしなければさうした餘裕を得ることはむづかしい。家庭臺所は竈、鍋、塼板（俎）、水甕、庖丁など簡素を極めその炊事道具として數へられるのは至つて少ない。賄料理方は女子の之に當たるものは細民階級のうちには見ることもあるが、普通は男子の仕事になつてゐる。庖丁には尺餘の重々しきものもあり女のかよわき手にはおへぬ實情もある。食料の買ひ出しも多くは男衆の仕事となりその間にうはまいを撥ぬる習慣がある。この邊が家庭生活を滑かならしむる機微を物語つ

てゐることは一奇である。又家族打混じて麻雀などするにも必ず金錢をはらなくては懸命にならぬ處なども亦一奇である。

大家族の組織に成る支那家庭では第一夫人が宰配を振り幾多の側室を統制し恩威並行はるゝ方法によつて家政を掌つてゐる。支那の慣習として亭主はいかなる事情あるとも夫人に口ごたへをしたり腕力に訴へたりなど絶對に出來ぬものときめられてゐる。かくして家庭の圓滿主義が重視せられ女尊男卑の內狀が物語られてゐる。しかし祠堂に於ける祖先の祭とか地下室穴倉に祕藏せられる財寶等の事は亭主自らその事に當たり、何よりも大事な事と見られてゐる。世相が世相だけに財產の秘藏については家庭內部に於いてさへも祕密主義がとられてゐる。河南や四川方面の奧地にあつては豪家には特殊の望樓の設けがあり烽火臺の如き構造を有し村から村へ山から山へと危險傳達の報知機として役立ててゐる。同時に又邸內にいく多の手兵を傭ひ養つてゐるものが少なくない。

田舍の小農小作の家庭にあつては、出でては親子總出で以つて田園の事に打掛かり入つては團欒の樂に終日の勞苦を忘れてゐる處が見られる。又亭主の都に稼ぎに出かけてゐるうちでは年一

回の良人歸鄕の期至るを待ち受けてゐる。支那の田舍からは上海天津又は滿洲國へと存外他地方に出稼ぎに出かくる者の多いのには驚くに足りるものがある。家の遺產は家庭に三人の息子ありとすれば、それが三人等分せられ長男に特に重くするやうな事は行はれぬ。而かも同一門戶內に住んでゐて何れも八仙卓を圍み食事でも何でも共にするのである。日本では親子兄弟姉妹いくら骨肉といへども銘々その用ひる箸が區別せられなければ氣持を惡くするのであるが、支那家庭にあつてはかゝる潔癖性を云ふものはないのである。

人數多き大家族にあつては絶えず冠婚喪祭やら疾病、學校の入學、卒業、動亂の影響、水害義金等次から次へと多事多端に惱まされ、それが爲め少なからぬ物入りである。加ふるに近來小作農が擡頭して地主は七分三分の三分しか手取りがないと云つた風で、頗る恐慌を來たしてゐる處がある。しかし家庭經濟は巧妙を極め自給自足主義で緊縮を事とし無駄を省き萬事をつましく考へてゐる。蜜柑の皮の如きも之を棄てる事なく一々取つておき、之を陳皮に刻み胃腸の藥用に備へてゐると云つた風である。或は弁髮の切つたものや、母親の遺骸から剃り落としたる毛髮などは之を繫ぎためて、ヘヤネットの輸出業者の手に賣り渡す。かう云つた零細の金錢にどこまでも

注意してることは日本人の考へ及ばぬ處である。こげめしの料理、漬物、野菜の油揚げ、豚の骨のスウプなど食事方面の廢物利用は殊によく進んでゐる。又片田舍の家庭の夜は日本の江戸時代と同じやうにカンテラ一つ點ずるのも勿體ないと見て、月夜は月光に語りスタングート美孚の石油もなるべく節約すると云つたつましさである。星を戴いて出で星を戴いて歸ると云つた農夫が多い。家には殆んど家財らしきものもなく、いざと云ふ時は一臺の一輪車に全財産を載せ、自分で推して行つて上海の租界内のどこかへ避難すると云つた手輕い手合が多いのである。

支那の家庭くらゐ簡易生活を營むものはない。朝起きて顏を洗ふにもそとへ出て茶館で洗ひ、朝めしも戸外路次の奥にいくらでも安くて暖かいのを食べさせる設備が出來てゐる。家は膝を入るるに足り、やつと寢る屋根の下さへあればよいと見てゐるのが多い。又それで何等不足がない。それにしても尙且つ支那人らしく胡弓の一竿も持ち月に花に一曲の民謠を奏づると云つた心のゆとりを持ち合せてゐるものがある。苦力は手にとまり木を持ち小鳥をとまらせ打樂しみつゝ柳堤のかなたをあるいてゐる。その下層細民が毎日を送る生活振りを見てゐるといくらでも安價にくらせるもので、一家庭のものがやり樣次第では優に二十錢で以つてあげられる方法がある。而か

も月に吟じ鳥に合はせて歌つてもゐられるのである。しかもその體格のよいものの揃つてゐるのは云ふまでもない。氣分の呑ん氣なのと蒜料理とが之を惠んで來たものだと云はれてゐる。

上流家庭の豪奢振りと來たら又言語に絶する者がある。その邸宅、林泉池亭の美は因より、劇場あり、祠堂あり、大學あり、尼寺あり、苦兒院あり、藥園あり、溫室あり、テニスコートあり、その外壁は周圍數哩に達し外郭には又幾多の借家軒を列ね、門衞の幄舍又いかめしいと云つた風である。上海愛文義路愛儷園、哈同の邸宅の如き、それである。又南洋彼南ナーサムロードあたりを見てもかうした上流生活の豪家を求むるならいくらでもある。家庭の夫人は寶石に身を飾つてゐる。その鏡の部屋、古玩の部屋、圖書室等には踏み入るだに宮中王室の觀あらしむと云つたものがある。しかしその夫人が毎日午睡をとる假寢の部屋は必ず一定させる事を許さず、常にその處を變へてゐなくては誰れ人にねらはれてゐるか判らぬとの不安を感じてゐるのである。物質に惠まれた上流夫人もこれでは心にゆとりある細民長屋のかみさんにも劣れること數等。支那富豪家庭の裏面をかうして見て來るときは之によつて世相の裏の實際がわかると云へる。

民國最近の家庭生活はひとり上海天津廣東と云はず新らしいモダン氣分の侵入でかなり路上の

去來行人の姿にもハイカラな份子を見るに至つた。斷髪姿に西洋貴婦人氣取りの當世女士も殖えた。中には似たもの夫婦で喋喋喃喃互にキッスもしかねまじき琴瑟振りを見せつけてゐるところもある。しかし家庭内の生活となると存外舊式の兩親が頑ん張つてゐて家風を破壞せしむるまでには至つてゐない。たまにハイカラ夫婦の家庭生活がその家風に容れられず別に門戸を備へさせらるるに至つたものなどもあるが矢張り近處界隈から後ろ指をされてゐる。

支那の家庭生活には部屋や寢處にゆとりのあるせゐか外客の滯在に都合よく出來てゐるところが多い。比較的多くの食客をおき又多くの側室をおくにも不都合のない構造を有してゐる。而かも客室がそれぞれ祕密の保てる構造になつてゐる。そして普通の民家や商鋪は別であるが一般には門戸を固く鎖ざし鑰をかけ容易に開かれないことになつてゐる。いくら懇意の間柄であつても一應門を叩きその顏をたしかめた上でなくては通うさうとしない。警官が戸口調査に臨み來ようとその人數や人名を答へる如き事は望まれない。家庭生活は存外、外部に祕められてゐる場合が多い。中以下では無財産であるせゐか、食事のとき食卓さへ路に近く持ち出し、行人知人を呼び止め酒食を共にせん事を勸むるくらゐであるのに、いざ中以上の場合となると劃然區別が立てら

れてゐる。雲深くしてその處を知らずと云つた風に絶對に嚴祕を守つてゐる處が多い。かう云つた點に二樣の觀察が下される。が之によつていかに世相が家庭生活なるものに反映してゐるかがわかるのである。

社會生活

支那人の社會生活は常に、國家を超越し、國家の盛衰興亡の如何に關心を持つことなくたゞ住民相互間の幸福增進をのみ基調として手堅く進んでゐる。國家の一員としての國民生活と云ふことにはあまりに冷淡であり又興味を持つてゐない。謂はゞその民族社會の方面に力を入れ民族的に固き脈絡ある集團生活を營んでゐるものと云へる。

社會生活の本義はその人の同業者同志の結束であるとか、同鄕出身者の會合であるとか云ふ、つまり、横關係の方で固くかたまらんとする生活振りである。在米、在南洋、在支各方面の華商が互に聯絡をとつて或る目的の爲めに一致の行動をなすが如きその一例である。國民生活に見る上下關係のあたまで以つて結束せんとする意味とは著しくちがつてゐる。從つて社會が商人同志

の社會であればその商業道德を重んじ互に面目をつぶさないやうに最後まで努力をする。商賣上相手にインチキをはたらきかけ問題を起こしておきながらあと片付けは領事館をして尻を拭はせると云つたぶちこはしはやらぬ。社會生活は人の事でなく自分自身の身から出たさびも、身から出た光りも總べて自分の事であるとの出發點から始めてゐる。かりに町内に火災があつて隣家左に五軒、右に三軒類燒したとする。それでも辯護士を呼んで來て火元爭をしたり、裁判所へ持出し判決を仰いだりする不名譽の事はせず、人の認めた火元がどこまでも責任を負ふことゝなつてゐる。近處の燒けた家の煉瓦屑や燒け殘つた材などはすべて我が家の燒跡に引とつて積上げ、そして近處の燒跡に家の立ち、商ひが始めらるゝを見た上でなくては火元は再建に取りかゝらぬ。若し金力にまかせ早く木組みをしたり棟上げをしたりしようものなら町内から脅迫し袋叩きにあはせ謝罪させなければ濟まさないのである。つまり社會制裁で行き判決は一切を自分どもの間で下さうとする。恐ろしいものは國家の力ではなく社會の力であると見てゐるのである。この思想が支那民族の社會生活を一層鞏固ならしめることになつてゐる。

或は又支那は各地に茶館と云つて朝から晩まで界隈の人たちに開かれた茶館營業がある。茶館

は人の多く集まりお茶をのむ所。又商談をしたり、面會をしたり將棋をさしたりする所。之を時折り利用して喧嘩物爭ひの公開場とされる事がある。喧嘩の當事者兩名、日を期してどこそこの茶館でと云ふ事になる。偶然來合はせてゐた閑人茶のみ友だちなどを前に爭を始める。大衆の中に甲は自說を辯じ立てる。乙も亦大衆に向かつて負けて居らず一席辯じ立てる。それを又甲が駁す。乙がやり返す。遂には甲乙兩方で口角泡を飛ばし別々に大衆に向かつて盛にやり出す。公平冷靜に聞いてゐるものは甲の方に首を垂れうなづいてゐる者もあれば乙に同情するもある。中には談笑し、首をまるく振つて感心してゐるものもある。結局最後に決をとることになる。甲に同情するものは甲が尤も至極だと云ふ、乙の方に同情者はあつても數が比較にならぬくらゐ少數である。そのときには茶館に來てゐた全部の客の茶代をば乙の方が負けたのだから之を仕拂はなくてはならぬ事になるのである。これ亦社會大衆をして決定させる面白い風習である。

社會生活はこの一二の例からでも察せられるが國家の法律だとか警察だとか云ふものによるのではない。又山西太原の田舍をあるいて見ると街道に幾里となく棗の並木が生ひ續いてゐる處がある。而かも何れも涎の出るやうな大きな實がなつてゐて、路上の行人に自由にとらせてゐるの

だから旅人などにはどんなに慰みになることかわからぬ。尙又田舍の路行くものにとつて有りがたいことは毎日早朝から口のやけるやうな熱茶が、誰れ人の手によつてか、大甕になみなみと入れられ茶碗ひしやくまで附けてあることである。片廂の小屋掛けの下にその用意のされてゐるのは殊に南支に多い。或は義渡と云つてかねをとらぬ渡し場が南支水鄕のあちこちにかなりある。あの勘定高い支那の土民たちがかうした社會奉仕を人の見てゐるゐないに拘らずやつてくれてゐるとは特筆するに足りる事である。

日本の大正十二年大震火災のあつた際に多額の救恤金品を寄せて來てくれた。その他かうした水火の罹災に對する思ひやり救恤の事に熱する心情といふものはかなり強いものがある。苦兒院、慈善事業等の各地にわりに多く發達してゐる事や又各省大都城に同鄕出身者の會館の建立せられてゐることなんかも、その社會生活の美しい現れとして列擧することが出來るであらう。これを支那式の語で云つて見るとパン（帮）（組合又は講の如きもの）の生活である。どこまでも相互扶助によつて仲間同志の結束をかため幸福を進めようと云ふ方法なのである。船着きには碼頭の苦力の間にパンがあり、之にチンパン（青帮）と云ふがある。元締の親方である。青帮、紅

帮の勢力といふと、拔くべからざるものがある。稀には自己の命とか利益とかに拘はるとき俄に之から脫却するの徒を見ないでもないが大抵はこの組合の力で外部に當たる。それは齒の立たぬ固さを持つてゐる。大刀會、紅槍會あたりの結束力もこのパンの一種と見てよろしい。このパンが抗日、排日、排貨の方に向けられるとかなり手ひどく日本は痛手を受けるのである。

支那社會の安寧秩序とか云ふ方面のことは國家の微弱な力でやるよりもこの社會生活の方で引受けてやる方がたしかであり、又實効もあり、インチキが行はれない。恐らく支那四億萬の民にして國家の力を有力なものとして考へてゐるものはあるまいが內心すべてパンの力、社會生活の力なら何でも出來ると云ふ風に考へてゐる。そこの處の精神的、自覺心の强みが遂に國家の方を信賴させる心持ちをよほど挫いてしまつたとも云へる。列國間には既に支那の國力の微弱なることは認識されて來たがまだその社會生活の鞏固なところは認められるに至つてゐない。日本人の支那に對する認識も亦然りである。

支那の歷史はこの社會生活の力の沿革史であり、又その民族性の特色はこの力の表現であるといへる。支那には本當の憲法がなく國の大本が立たぬ。立てられても次に來る豪傑の士がいつも

すぐ自分で打こはしてしまふ。實際に力のある千古不磨の國法と云ふものは支那には樹立されてゐないと云つてもよい。國家に考を向けるにはあまりに社會生活本位である。周圍の仲間の方が大切であり、幸福安寧はいつも自分の周圍から考へられてゐる。たとひ馬賊海賊の徒でもよい、自分等の水村山郭を守つてゐてくれることが確實であるならそれに稅を拂ふ。謝禮も出すと云つた心組みである。それに對していくら官軍が攻めて來ようと總司令が乘り出して來ようと齒が立たぬと云ふ實例を目のあたり見てゐる。周圍の社會に民の心が向いて國家の力の方に向いて行かないのはこの一事で見てもわかる。それ故支那はたとひ國家としては第二流に又第三流に落ちる事があらうともそれは支那人の與り知らぬところ、否民心の關知せぬところ、支那は全土を擧げて社會生活中心主義、社會本位の集團民族であるに過ぎぬと云ひ得るのである。

自治生活

小國に生ひ長じてゐる國民のあたまに理解されぬあの果てしなき國土に幾代となく生活してゐると、身にしみじみと自治の尊さが判つて來る。中央の國力は尾大振はず、長鞭馬腹に及ばず、

結局理窟は拔きにして自分で自分を守り自分を治める外ないことになる。支那國民のあたまは正にこゝに置かれてゐる。

自治生活の要は自ら耕して食ふにある、又自ら釀して飲むにある。古來英主は土木を起こし大運河を開鑿したことはしたが樓船に宮女を侍らせ身の贅を盡すの外に意味を持たなかつた。水村山廓に生を營む田夫漁翁は自治によつてのみ生を樂しむことが出來る。貪官汚吏の多く良民から爪彈きせられてゐることは今も古も變るところはない。官吏は名を善政にかり、苛斂誅求をこれ事とし、自己の懷を肥やす事のみを考へる。支那の民心は傳統的に既に政府なるものの政治振りに飽いて來てゐる。

支那各省各地の生活統制と云ふものはその地方民が自分たちの生產に基づいてそれぞれ健在なる基礎を作つてゐる。町村には保甲保正制度の存するあり互選で以つてその名譽職を定め、同業者仲間には茶業は茶業組合を、織物には織物組合を、燒物には燒物組合をと云つた風に拵らへて自らその生產取引、外部との聯絡交涉の事までやつてゐる。交通には道路運河を、そして隨處に涼亭と稱する無料休憩所まで設けて行人の勞をいたはつてくれてゐる。その上牛馬には水を、人

間には熱茶をとそれぞれの接待が路上に出來てゐる。

更に個人々々の住宅を見てもその正式のものには門を入れは必ず衝立樣のインビ（影壁）と稱する厚壁が獨立して設けられてゐる。これは奥なる中庭ユワンヅ（院子）を透して客間や主人の內房あたりの見とほされるのをきらひ之を蔽ひかくさんが爲めの設備である。行きなり外來者に詰め寄られるのを防ぐと云ふ用意からである。丁度各地城門のそばに多く便門と稱する袖の小門を作りいきなり城門破りの出來ないやうな設備の出來てゐるのと同じわけである。何れもその防衛上自治の考から出てゐることなのである。四川巴蜀の天地に行つて見るとその土豪が山塞生活を營み自給自足の田園、給水、防備、門衛などを完備して高く山巔林中の幽境を我が天地となして居住してゐる實況を仰ぎ見る。文字通りの雲上にこの自治生活の完全を期してゐるものがあるとは天下の奇觀であると云へるであらう。

又家庭內部に見る兒女の生ひ立振りを親しく看てゐても、これは實際に幾多の異母兄弟のゐるところであるから、點心を一つもらふにしても、心は常に自己の損得の點に集中されてゐる。或は貧兒の路上で食物を求むるにしても、針廻しの富籤の設けられてゐるところに到つて之を求め

んとし厘毛の利得をさへ考へに入れてゐる。東都留學の支那學生は月々の仕送りを銀行に預金し月謝怠納の掲示を見ても尙銀行より引出して來て納めようとはしない。いよいよその退學の文句で脅かさるるの時初めて之を引出しに行くと云つた風でそれほどまでこまかい處に氣を配る。その間の利息にあたまを使つてゐる青年の心や必ずこれ亦自治の精神から來た極端な發露であると云ひ得るであらう。又全然學資金に困りはてた青年がホテルの側に立ちん坊をきめ込み、夏の炎天、門から出て行く客をうしろから團扇もてあふぎつけて行く。向ふの辻を廻れば又ついて廻る。そしてその行く先どこへまでもつけて行き、店にでも入つてしまほうと云ふとき、手を出してその煽ぎ賃をねだるのである。かくして一回十錢なり二十錢なりを得る。歸途又かくの如くして資を得る。もとでは唯團扇の一本。その自治獨立獨行の心から出た粘り强さには殆んど感心させらるゝのである。學生時代既にこれであるから卒業後の自治など問題にしてゐないのである。

支那人一般にその貯蓄心の旺盛であると云ふことや、愛嬌よく人をそらせず、話が上手であると云ふこと、又答へをするとき笑つてばかりゐて判つきりした事を云はぬこと。これなどは何れもあとで自分に有利に轉回されることを考へてゐるやり方である。すべてこれは自治生活に長じ

たものの行きかたであると見られる。南洋に出かけた苦力勞働者又一般露店商人などがその零細な金をためて、それを資本に漸次のして行くと云ふあの行き方は、支那內地の如き動亂脅迫の妨げのあるところとちがひ、南國別天地の事とてめきめき自力更生の花がさき實が結んで行く。それだけに無駄な事に深入りせず利益の事となつたらあつかましく出て決して引かない。その根氣と圖々しさと熱とでやり拔くのであるが、しかし何れの人を見ても要領よくやつてゐる。一時よくないやうに見えてはゐても結局物にする處まで漕ぎ付ける。日本に來てゐた理髮屋などで七八千圓から一萬圓もため、支那に歸つて一パシ地面を買ひ求め、故鄉で土地成金となつたものなんかもある。アメリカの支那街にチヤプスイ（雜炊）を營み成功をしてゐるものなどもその自治生活の賜物であると見られる。

自治生活に力を注ぐものの强さは、その人の考へてゐる天地が國家萬能主義に考へてゐるものの天地よりもひろいことである。いかなる片田舍にゐて生活してゐても、そこには官憲も何もゐなくとも一向平氣でゐられる。そしてどしどし伸びて行かれる。そは外部に順應して我れを完うせんとするコツが心得られてゐるからである。國家萬能主義でゐるものは天地がせまい。と云ふ

のは、その活動範圍は領事館や警察力又は駐屯軍などのゐる膝もとにのみ限られ、そこから離れられない。離れたら最後生きてゐる氣持ちはしないといふ。自治どころのさわぎではない。とても奥地深くは這入つて行かれない。そこへ行くと自治生活を本位に動いてゐるものの方が遙かに强い。馬賊でも何でも之を柔らめ之と款を通じて仲よくしそして自己の欲するだけのところは物にしてしまふ。そこに支那民族性の同化力の偉大さが見出される。

支那民族が世界の知ると知らざるとに拘らず自ら以つて賴みとするものは自治生活の底力である。支那人の自治生活くらゐ强いものはない。然るに支那民族の最も賴みとならざるものは、國家觀念が乏しく且國民生活の力を持ち合はさないことこれである。支那人には國家觀念とその國家統制のことくらゐ賴み甲斐のないものはない。そこに非常な惱みがあるわけである。國際間に乘り出さうとしても列國の方で之を國家と視るだけのしつかりした認識が起らない。起したくも起せない。これが本當に支那の本質を知るものの認識であるといへる。ところでその最も賴み甲斐のある自治の生活方法の方は得て外國人のあたまには了解されない。國內的には三千年來それで以つてやつて來た。立派な自力更生を繰返し繰返し今日にまで及んで來た。內部の方はそれで

よい。それ以外に尙國民として統制ある國家生活をして見ろなどと勸めて見たつて始まらぬ。又それは無理でもあり無駄でもある。しかし、その局に當たる要路の少數の者は國家として躍進もし、大車輪的活動もつゞけてゐる。けれども全國民そものは折角のその努力を支持せんとする氣持ちがなく唯青年と自覺ある識者がそれに共鳴してゐるくらゐの程度である。中には職業的にその期間だけはしやぐのみであつて、恰も王正廷の如くその位置から離れてしまふと忽ち聞えなくなり馬耳東風と云つた形をとるものもある。國民的訓練の出來てゐない四億萬の民衆に向つて國民生活を求むるのは木によつて魚を求むるの類、その代り自治の方にかけては至れり盡せりである。近來の共匪に對するあの消化接觸振りもやがては何とかまとまりをつけ大成して行くことであらう。蔣介石がいくら討伐をして見ても自治に立つ大衆の方で之を受容れてゐるに於いては齒が立たなかつたのは當然である。

ともあれ支那は自治生活で個人的にも集團的にもその進むべき所に進みつゝある。列國の所謂國家主義で躍進せんとするのは、中央要人の掛け聲に終るのみであつて、畫餅に等しきものと成り了られざば幸である。これは過去の歷史なり民族性なり又現代の經濟生活の機構から考へて見

てこれより外に行かないと云ふ大原則となつてゐるやうな氣持がする。

水上生活

支那民族性の悠久な氣分は水上の生活を營むにも適合し、その漫々たる湖江の上に船であれ筏であれ、あらゆる水上生活に慣らされた型が認められる。こは一望千里の大平野のうちに傳統的に住みならされたのと同じわけである。一體に變化なき單調な生活を十年一日の如く繰り返し繰り返し營々孜々として努めて來た民族である。

大陸人の性質にはこの單調を苦にせず退屈をこぼさず、すべて天なる哉で悟道に入つて生活をしてゐるものもあり、又さうした自覺なしに唯蟲の如く、石の如く、山の如く、永遠から永遠に代を次いで生を繰り返してゐるものもある。それでなくてはあのやうに平沙萬里人煙を絕つと云つたところに、何の慰安も變化もなくて生きて行かれないだらうと見られる。

船上生活に浮き身をやつすもの亦然りであつて大海の如きあの洞庭、又は長江の波上に、或は東海の沖、大洋上に幾百萬と云ふ支那民族が水上を全く我が天地と見てこれに生活を求めてゐ

る。筏上にゐる奥地の手合は多く湖南洞庭のかなたより繰出されて來るものであるが、湖江を下る八百哩之を六ケ月かからうと、八ケ月かからうと果た一ケ年かからうと頓着ない。流す筏は二千坪三千坪と云ふ大規模のもので之に小屋掛をなし食糧をつめ込み、鶏や家鴨まで飼ひ悠々長江を鎭江さして下つて來る。筏上立て膝で腰をおろし兩手で膝を抱へたまま、天の一方をぢつと眺めやり、對岸のかすかなる蘆雁の動きに目もくれず落付いた樣子を見せてゐるなど一幅の南畫であり、又詩であり、禪でもある。かうした筏上の雰圍氣こそは水上生活者の無二の境地と見える。四季折り折りの眺めも何を見さかへに之を感知し得るであらう。筏上曆日なく何とまた呑ん氣な世界であらう。

船上生活を我が事としてゐるものは祖先代々之に從事せるものが多く、その子も亦船を我が家と心得てゐる。幾萬幾十萬と群居せる江上にあつては陸上以上の有力なる集團的意識を養ひ來たり、永年の間に水上社會を形成し水上交通を整備し經濟的に又思想的に水上社會と云つた觀を呈してゐるところもある。廣東、福州の蛋民部落の如き又武漢、漢水にゐる舟人部落の如き全くその代表的なものと云へるであらう。その船上生活者は陸上のそれと婚を通ずるをきらひ、又陸上

よりも何となく之を忌避する習慣があつたり、時には兒童の通學問題についても陸上の學校に行くを好まない處があつたりする。廣東にあつては孫中山(文)之が弊を矯めんとて態々蛋民の爲めに一校を新設するまでの面倒を見たがそれでも尙之に行くことを欲しなかつた。劃然特殊視せられてゐた形が見られる。福州あたりでは舟人の婦人は頭髮に尺餘の銀の笄を二本刺しちがひに差し陸上で見ぬ奇習を見せてゐる。古代戰鬪用武器として之を身に帶びたる習慣に起因すると云はれてゐる。何れも勇ましき氣分の持主である。亭主は漕ぎ手として働くも實は女房に養はれてゐるもの多く、ただ船内の掃除の事に從つてゐる。これらの舟人はこれ亦陸上のものから忌避せられ特殊扱を受けてゐるやうである。その異風奇古なるところは、昔し閩江上流の奥地より流れ流れてこの地方に落付きたるものなりと云はれてゐる。湖北、漢水に見る民船部落に至つてはその數驚くべく四川より、湖南より、湖北奥地より、江西、安徽、江蘇よりと各省水鄕より漕ぎ來たれるもの幾十萬なるを知らず、その船體の樣式又それぞれ異なれる形をそなへ、四川三峽方面からせるものは最も偉大且つ船尾揚がり異彩を放つてゐる。漢口、漢陽の間を流るる漢水は殆んど大小各民船で埋まれる如く輻湊し出船入船、碇泊せる船、半ば沈める船、曳船に曳かるる船、物

賣りの船、遊覽船、巡邏船、海賊船などでその騷ぎと云つたらない。恐らく支那水郷中第一のところとなす事が出來る。

水は廣東の珠江、福州の閩江、武漢の漢水三者共に黄濁、年中清水を見る時は勿論ないのであるが、船では之を釣瓶で汲み上げ飲料水となしてゐる。そばで上衣、ヅボンの洗濯した汚水を流してゐるもあり、兒女に小便させてゐるもあり、茶碗皿を洗つてゐるもある。味噌も糞も一緒なる狀は奇觀であり、飯の味もやや鹽からくはないかなど思はるる。しかし之を氣にする如き船人はあらざるべく又之を氣にしたりなどしてゐては一日も居れたものでない。船中はさすがに船神を船のともの方に祭り之を拜してゐるかみさんの優しい姿など見えることもある。

長江方面の夏の增水期に五十幾呎のウオーター、マーク〔水準標〕を見る時漢口の市中は氾濫さわぎでごつた返しをくり返してゐるが船上生活は有りがたい。たゞその水面と共に浮び上がつてさへゐればよい。かうした體驗が餘計水上にルンペンを驅り出した原因となつてゐるかも知れぬ。海賊は湖江生活に常に脅威を感ずるもの、江蘇太湖には殊にそれが出沒を多く見る。その追擊奪略を受くるものは荷物船である。昨今發動機船で追つかけることがある。一度目をつけられ

たら逃げようがないくらゐでその猖獗にまかせてゐるのみである。しかしもし之が官船巡邏船に拿捕せらるる時は賊は銃殺にあひ、船は眞二つに瓜分せられて楊樹の影に、見せしめの爲めにとて、當分雨ざらしにされる位なのである。

支那の河航又は海上の沿岸線に輪船と稱せらるる小蒸汽船があるが、云ふまでもなく之によつて各港の間を又上海、寧波、溫州、福州、厦門、汕頭、香港、廣東へ、又上海から長江方面、その他運河による水郷各地へと定期航路が開かれてゐる。しかしその多くは老朽船で船名を船側に大書し「新江天」「新北京」「新寧紹」と云つた文字を鮮かに揭げて走つてゐる。定員を超過して乘せて走る爲め、時化のときは危險視されてゐる。船内の客室、官艙、房艙、統艙には客の大荷物が持込まれ狹隘を告ぐる事夥しい。夜半月夜に誰人の吹くか玉笛を聞きつつ阿片の煙臭に接せらるるなどは船上生活中の粹なるものと云へるのである。

支那内地の船上生活は江南の民船に見る曳子の優趣を一方見るが、他方四川三峽に見る急流遡江の船頭の悲壯振りを見落してはならぬ。この兩者を比較してそのいかに同じ船上の生活にしても支那には恐ろしい懸絶味のあるかを知ることが出來る。江南、江蘇、浙江に見るそれは、運河の

水面を帆檣高く結付けられた綱を引張り岸の小徑をのどかに行くのである。石橋多き江南の水鄉に之を見るは南支風物の一大特徴とも云へる。ところが奥地長江の上流三峽（宜昌峽、巫山峽、風箱峽）の方にありては、洩灘、新灘、群猪灘、狐灘と云つた如き坂落しに流るる激湍の中を而かも暗礁の多く又幾百哩と云ふ長距離の難所の中をば一生懸命溯江して行く。その船頭の苦心こそは察するにあまりある事であるるがそれよりもその民船各艫につく八人宛の漕手の努力振り、おも舵と前舵をとる舵取りの苦心、又それよりも幾百尺と云ふ長い竹索を胸におしあて懸崖絶壁の下を岩角にしがみつきつつ音頭取りの聲に勵まされ勵まされて懸命に四ツん匍ひになり曳いてゐるあの曳子たちの死力振りと云ふものは、見る目に涙を催させずにはゐられない。民船の上にゐる漕手は八丁艫なら八八六十四人、十丁艫なら八十人と云ふ恐ろしい人數で、そのふむ足音に拍子をとり漕ぎ上る。曳子の方も亦之に劣らぬ人數で曳張り上げるのである。音頭とりは鞭を手にしてその曳子の様子を見入つてゐる。總體が丸の裸體姿で寒中と云へども衣はまとはぬと云ふ盛なる努力振り、又何と云ふ人間界を超越した船上生活者の現實振りであらう。此の中に稀に故あつて曳子仲間に投ずる運命になつた日本人を見出すことがあるが、その純支那曳子風俗に染まり

切つてゐるが爲め見さかひのつかぬ位である。支那風俗の驚異の一つにこの四川三峽の船頭の苦心が力説せられなくてはならぬと云ふことはいかに涙ぐましい事ではないか。

穴居生活

支那に見る穴居生活は河南、山西、四川、湖北と各省隨處に求めらるゝが必ずしも之を以つて上代の元始生活なるが如く低級視すべきものでない。複雜繁瑣な生活を送ることが必ずしも高度の文化を意味するものでないことを知ると同時に、穴居に見る元始生活が却つて現代人に敎ふる所多大なるものあることを認むる次第である。

穴居は北支那の空氣の乾燥せる地點に最も多くその分布を見る。河南の鄭州附近を中心とする山麓地帶又山西省太原附近を中心とする山の中腹地帶に殊に豐富に之を見る。山西は獲鹿、井陘、娘子關から、楡次、壽陽と西に進むに從ひ山中の光景は潤色を失ひ山に綠樹を見ず、路傍の民家も屋根に瓦一枚用ひて居らず、野の色も山の色も總て一色、黄土の乾燥し切つた眺めが展開さるゝのみである。實に淋しい景觀である。この黄土質の天地の中に高臺のあたり或は山の中腹

から麓にかけていくつかの蜂窩狀をなせる横穴を認める。穴の入口はその前のところまで、よく見れば歩道が通じてゐる。同じ色の土の外目に映ずるものがない爲め、迂つかりしてゐると之に氣がつかぬことがある。穴居の入口には方形なるもあり、上部やゝかどのとれたるもあり、中には廂をつけたるものもあるが、格別ハイカラな作りのものは見出されない。しかしやゝ門らしき飾りの施されたものも見當たる。山麓に見る民家の恰好が既に他の處のそれとちがひ、その門の構造、大いさすべて穴居の門と似たるもの多く一見穴居なると否との區別が立たぬ位に見らるゝ處もある。穴居内部は一室なるあり、數室より成るもあり、天井、壁、寢室、卓子悉くその山の土を掘り殘して作り出されたるもの、その形、雅にして奇古。寢室にはアンペラ、羊毛製の敷物などを布きつめ起臥に便に心持ちよく設備されてゐる。庖厨炊事場は多く入口に近い處に設けられてゐるが、食事どきは別に卓を門外に持ち出し青天井の下に箸をとると云つた處もある。由來降雨のあまりない地方のこととて四壁、天井、寢室等に濕氣を覺ゆることなく、絶對に乾燥し切つてゐる處は穴居の利用を益々發達せしむる所以である。

乾燥地域の地質は之を掘り削りて空洞を作り、穴倉を作り、大室を作るに自由にして天惠を得

てゐる。あたりは山に木なく木材を得ることが至難である爲め、建築は即ち空洞を穿ち穴居の部屋を造營するの外に方法が立たぬ。しかし穴居民の職業には農あり牧あり、工あり、商あり、中にはかなり大規模の宿屋業を營めるものもある。これらは門内空洞の中央に中廊下をとり、左右に庖厨、客室、居室の幾種類の部屋割をした設計で、やゝもするとその中廊下は天井高く幅ひろく優に馬車の十數臺も乘り込み得るだけの堂々たる構へをしてゐるのがある。部厚き羊毛の毛氈の打敷かれたる客室など之に旅の疲れを醫し横たはるには惡くない。幾千年の久しい間恐らく堯舜禹の歴史時代に這入る前から、かうして横穴に住居を求め、之に起臥し之に安泰な生活を味ひ得てゐた傳統的の風俗慣習に思ひを致すときは、これらの穴居の旅館などもその長をとり短を棄て、ここまで發達して來たものだと見られる。その不斷喫む茶にも松の實を浮かせて之を攝るなど自ら不老氣分を思はしむる生活振りである。

山西は更に奥地の石炭層の地域に踏み入つて見るとこれは又よく考へたもので、その無煙炭層の勿體ないやうな光澤ある炭坑をそのまゝ穴居生活に充てゝゐるのがあり、又新たに洞穴を掘り部屋を拵へ、寢臺を削り殘してうまく之に納まつてゐるのもある。様々であるが何れにしても木

材を用ひること少なく僅かに門扉に之を見る位の程度である。しかしそれも多くは明けつぱなしの太古生活で、見るからに呑ん氣なことこの上もない。食事の方は上古史に見る燧人氏が火食を教へたなど云ふ時代はともかくも今はその附近の民家のそれと變りなく、粟のめしや粟の粥、いも野菜、それに雞蛋、猪肉と云つた普通のものが攝られてゐる。照明の方法はかんてらの處もあるが一般にはランプが用ひられてゐる。しかし物資の供給乏しく萬事文化の低いところのことと て薄暮晩餐を了へると、團欒のうちに談笑しばらくにして穴に入り眠りにつくと云ふのがきまりである。この邊は山間僻地の穴居でない住民の風俗と變るところはないのである。

更に湖北宜昌の奥から峻中四川方面へと這入ればこゝにも山中穴居の民を見ることが多い。ピエンナウ偏腦の石工多き山下の穴居部落を始め、峽中天然の洞穴の中には穴居に適當した手頃のものがいくつも見出され斷江の絶景を前にして太古ながらの穴居生活を營めるものを隨處に認める。白羊の二三を伴ひ穴居の入口の前、猫額大の畑地に蠢動してゐるところなど白雲を隔てゝかなたの空に見出さるゝことがあり、或は穴居部落の土豪のうちにてもあるか、堂々たる門扉をかまへ、左右に別宅らしき穴居を控へ門前穴居の民の兒女の戯れ遊べるを見る事もある。その何れ

も水邊近き洞穴は夏の增水期に氾濫の虞れあるにより成るべく高所に居を求めることにしてゐるやうである。湖北の奥地下牢溪に行つて見ると、斷崖千尺の上に三游洞の禪寺がある。穴居の奥深き暗黑裡に設けられた寺廟のこととて、天井低く殿前香壇その處を知らずと云つた風に、洞內薄氣味の惡い位であるが崖壁の山門、棧道には香華をたむくる善男善女の跡絶たず、暗黑裡の神前燈火いくつか拜せられて香煙に息のむせぶくらゐである。むかし白樂天や蘇東坡などの參游せし故事も傳へられ三峽に入る楚客の之に訪ね行くものも少なくない。尙穴居の山寺には三峽宜昌峽のうら山に石門洞、靈泉禪寺の靈場がある。雪樵禪師之に棲み老い、あたりの祕境背景の幽玄味に一段の太古の趣を漂らせてゐる。洞穴の一隅に龍王廟があり、奥の暗黑裡に神龍の潛むと云はるゝ靈泉の池がある。幽客の之を訪ね來るものあらば禪師、自ら洞穴の中を案內し太古の神秘を說明するを例となしてゐる。天下旱魃雨なきの時はこの暗黑裡の靈泉に雨祈をすれば龍王忽ち天空に現はれ雨雲を卷き起し降雨の至ることまちがひがないなどと靈驗あらたかな處を述べ立てるあたり、穴居三昧に耽る大和尙とは思へぬ位要領がよい。

以上の如く支那の穴居生活は奥地の祕境に分け入るに從ひ隨處に見出さるゝも、その純太古式

の穴居情趣は河南山西を中心とする北方乾燥地帶のものに多く殘されてゐる。而かもこれは必ずしも蒙昧未開の生活振りではなく千古を通じて最も簡素な氣樂な生活樣式の一と見ることが出來る。今日の石造化粧煉瓦張りの地下室を見るよりか却つて自然的で經濟であり且つぎこちない氣分のしないだけでも居心地がよろしい。モダン式の都會生活に飽いた高士逸人はむしろかうした現代生活の別天地に憧憬を持つ傾向を生じた。支那民族性はこれらの穴居情緒をも多分に取り入れ之と調和した民情味を潛在せしめてゐることを見なくてはならぬのである。

農村生活

農村自治の精神が支那社會の健實性を作る原動力となつて居ることは云ふまでもないが、近來政治的に農村大地主の力が衰へ、漸くそのお株を工業家の方に奪はるゝに至つた爲めやゝもすると農村の空氣が輕視せらるゝの傾を生じた。これは從來大地主が政客に食はれてゐたため次第に大地主は涸渴して工業資本家の擡頭となり、政客が工業地帶（上海の如き）へと野心を伸ばすに至つた結果である。しかしいかに田園は荒れ大地主は衰へたりといへども農村の自治氣分に變り

はない。農村生活の見るべき所はこゝにある。

農村には從來の碾車は舊式となし新式の粉挽き機械を採入れ又水鄉に去來する民船は舊式となし、輪船發動機船を採入るゝと云つた風にすべて新しきを迎へんとする雰圍氣が見える。いくら新式の物を輸入したとてあの大支那の農村が俄かに見違へるほど近代文化に醉ふことはしない。實際の農家を訪ねて親しくその生活振りを見てみるに依然として古代そのまゝの風箏、唐箕が用ひられ、水牛盤（龍骨車）が用ひられ、手繰り機械が用ひられ、綿打ち機械が用ひられてゐる。而かも家庭の居室にカンテラさへ使ふうちが少なくなく朝は未明に起きその代り晩は成るたけ火を點ぜずして早く床に入るやうにしてゐる、と云つた生活振りを繰返してゐる。牧童は十頭二十頭の水牛を游ばせながら杏村酒家を訪ねる行人と物語つてゐる。田童は五間にあまる四ッ手網の竿を手にして、時折り一疋も這入つてゐない網を揚げたりおろしたりしてゐる。その濁流に鮮魚を得ることを樂しみとしてゐると云ふよりか、ッオン（魯、四ッ手網のこと）を見守つてゐるのを樂しみに終日來てゐるやうなものである。又農夫の田園に出て耕穡してゐる處へ、かみさんの驢馬に跨り、柳の枝を手折り之を丸く曲げて笠代りにかぶつてゐるのが畦畔を辿つて來る。見る

と、手に提籃をさげてゐる。亭主への辨當でもあるか。かういつた景を見たりする。

田園おのづから樂しみあり、魚鳥亦相親しむ。その稅金をとらるゝには餘りに收入のなく、又匪公に目をつけらるゝには餘りに家產のないと云ふ小農田夫漁翁たちの心境こそ正に眞の支那大陸生活の禮讚者なのである。又數の上から云つてもかうした百姓船頭が一等多く各處に住まつてゐる。これまでの支那歷史、支那文學、社會政策論、政治敎育などといふものはいつもこれら大衆が取り殘されてゐた。しかしこゝの處に最も悠久な農民生活の實在があるのである。その江邊に住宅を作つてゐる田家の建築法なるものを見ても幾千年の經驗から覺えたらしい一種獨得の野趣がうかゞはれゐる。櫛の齒がたに蘆の莖を並べ柱と柱の間に之で壁を作る。屋根は又同じ蘆の莖をたゝいて平たくし之で網代にあんだアンペラ蓆を作り之を以つて無雜作に蔽ひかぶせるといつた式に作る。或は茅葺の家もないではないが何れも長江氾濫の被害に對し結構之に堪へ凌げるだけの考が廻らされてゐる。夏の增水期に洪水の之を浸し流さうとすることがあつても水はその櫛形の隙き間を通り拔けて行くだけのことで依然何の事はないと云ふ巧みさを見せてゐる。道理百姓どもが農具、家具は之を屋上に運びあげ、あの濁流滾々の大水中に魚を釣つてゐると云ふ超

越振りを見せてゐる。中には又水中の田家を楊柳の幹にゆつくりと結び付け流失を防がうとしてゐるのもある。

長江の中流、石首、沙市地方の江邊氾濫どきに行つて見ると、既にかみ手の江岸田園は大部分出水で流れ、恐ろしき浸水慘狀を示してゐるに拘らず、下手のあたりに水牛を使ひ田を耕してゐる老農は、足どり一つ取り亂すでもなく、同じ水田の中を鋤に手をかけたまゝ水牛を導き導き、往つたり來たりして耕農そのものをわが事としてその分に安んじ、どこまでも落付いて天職勞役に服してゐるところなど、流石支那老農の眞面目を發揮してゐる處だと特筆せられる。どうせ流失の運命は旦夕に逼り時の問題となつてゐる。それよりか一層家に歸り家財農具の持ち出しとか、家族の救出の方にでもあたまの閃きが向かはないのであらうかとよそながら氣をもませた位のものもゐる。いくらはたで心配してゐても當人自身は落付いたものだ。天地は我が廬だ、流失よりも百姓の仕事が大事だ。之を投げやつておいてどうすると、云つた悠久な風懷が底力を以て閃めいてゐるやうにも取れた。農學校出の若僧などには此の間の消息氣分、腹の出來てゐる處は解せられまい。大自然の大陸田園が生んだこの老農の腹は書物の上や燐酸肥料の化學智識あたりから

は、とても生れ出て來ない。

又江南は農村の小徑をひとりでぶらぶらあるいてゐると空には雲雀、畑には黄色の菜種の花さかりと云ふとき、さゝやかな路傍の片びさしの小屋掛けに、二人三人と並んで腰をかけたまゝ三尺の長ギセルくはへた姿して、何れも春の彌生の佳節など尻あがりの田舍辯で語り合つてゐるのを見る。その腰掛のところを見ると厚板に一定の間隔をおき適當な孔が明いてゐる。中には手にちり紙などちやんと持つてゐるのがゐる。手洗ひ水一つ用意されてあるわけでなしと思はれはするがそれでも揃ひの用足しに酬なるの時であることがすぐさとらるゝのである。路上に面し共同倶樂部式に出來てゐる雪隱で並んで話も出來、又通りがかりの友にも呼びかけ、談笑が出來ると云つた風で、全く和氣靄々の氣分が漲つてゐる。用足しが濟んでヅボンを立ちながら直してゐる先生もゐる。戸隱しや暖簾一つ吊るされてあるわけでなし全く天下太平の腰掛臺である。この百姓にしてこの共同倶樂部があるわけである。大陸農夫の日常生活にかゝる禪味と俳味ゆたかな天地が隨處隨處に見出さるゝとは何と云ふ大きい又悠久な農村であらう。政治家の踏臺としてはお株を工業地帶に奪はれたとは云へ、矢張りそのやうな俗流輩から超越して、支那のこの田舍の農村

生活は依然このまゝで天と共に永久に殘さるものであらう。

馬賊生活

馬賊は支那語にホンホウヅ（紅鬍子）と稱せられ北方外人を指した（アカヒゲ）から出たものである。土匪と云ひ匪賊と云ふも共に似た意味であるが、南支では主にツフエイ（土匪）と唱へてゐる。

土匪馬賊は支那の名物の一つとして見らるゝ位深刻に又ひろく印象づけらるゝに至つた。滿洲國に於いても今尙その跡はいくらかあるといふ。北支山東から河北河南乃至は滿洲國方面にかけて出沒する匪賊は夏の高粱の繁茂期を盛りとして現はるゝを原則としてゐるものであるが、南支殊に長江方面に見るものは四季折り折りの區別などなく隨時出沒するのを常態としてゐる。北方匪賊は馬上に仕事を働く爲めこの名をとつたわけであるが必ずしも騎馬とは限らない。元來この匪賊には二種類がある。一つは舊來からあるもので、これは賊をはたらくとは云へ義俠心あり、義理をわきまへ正々堂々と陣營を整へ襲擊に取かゝる。二は敗殘兵から居直つた匪賊である。

先づ始めのものについて述べる。土匪共がその期節に入るや頭目の傘下に手下を集め部署受持ちを定める。その勢力範圍の地域内にあつて目星を定めた土豪、官憲、豪商、銀行どこへなりと偵察を行ふ。そしてその金品の多寡、牛、鷄、穀類等に至るまで探りを入れる。そして頭目自身の部下に對する懐ろ都合その他の理由でその土豪なら土豪の目星のついてゐる處へ交渉を開始する。或る申出でに應ずればよし、應じなければと腹をきめる。勿論匪賊に對してなす提供はその地方に深い名染みになつてゐる頭目なればその顏を立て、少々なことには應諾を與へておくべきでそれは一種の税とも見られてゐる。傘下に集る手下の多ければ多いほど經費もどつさり要るわけである。要求必ずしも無鐵砲とは云へぬ。要は感情をそこねさせないことに在る。

しかし談判の整はないとあれば襲撃の强硬手段に訴へるの外ない。そのときは日を期して强行するので、普通近處界隈の關係のない家へは豫め避難してゐてくれるやうにとの注意を與へてゐる。その邊はよく判つたやり方である。愈決行をする時には疾風迅來的に作戰計畫通りやる。一度襲撃して又途中引返してやる。秋の末刈つた高粱の立て掛けてある下に隱れ、漸く身を以つて免れたものが身邊近く銃身で叩きまはられた體驗談など身の毛も慄たしめるものがある。二度目

には漸く屋根裏の横木のかげに鼠の如く小さくなり虎口を免るゝを得たと云ふ物凄き實話もある。銀行を襲撃するときなどは、あたり近處から先づ破壞してかゝり側壁を破つて入り來たる。その掠奪後の蹂躙破壞振りのひどい事と云つたらとても踏み込めたものでない。全く死の世界のやうである。破壞力と殘忍性が赤裸々に發揮せられるのであるからその慘狀は察するに餘りがある。かう云つた襲撃振りに對しては官邊側でも手のつけやうがなく拱手傍觀の態度をとるのみである。どうかするとぐるになつてゐるやうな者もある。土匪討伐に出かける官軍討伐隊の正規兵あたりにもその用意された銃器彈藥をば頭目とよろしく妥協し賣買交渉によつて悉く手渡してゐるものさへもある。途上罪なき農夫の首を馘してまことやかな報告を作成し、お茶をにごしてゐる慣例もあるやに傳へられてゐる。匪賊生活の裏面には幾多のグロ的實話が潜み南方四川、貴州方面ではその襲撃に移るや部下は長き嚢狀のたすきを肩に十字に掛けその闖入せし家の米なり粟なりを一人前大抵一二升見當でこの嚢中に失敬して納むるとか、雞などは手あたり次第つかまへ足を絞りまとめて之を提げ持ち歸るとか云はれてゐる。

匪賊の暴狀飽くなきの不安に堪へかね、田舍奥地の豪族は之に備へんがため周壁を高くし防禦

林を厚くし堀を鑿つてその要害を固むるの外、手兵を幾百千とおき、望樓まで設けてその萬一にそなへてゐる。河南大平野の僻地に見る土豪の住まひは殊にその高壁密林の間に天を摩する望樓臺の聳ゆるもの多く、いづれもその自衛的設備としてかうした特色ある建造物を隨處に見出すのである。匪賊の活動は單に金品の奪略のみでなくパンピヤオ（綁票）と稱して人質をとることに腐心する場合がある。轎子に乘つて田舍道を行く富豪の主人をつけねらひお伴のゐるのも頓着なく主人の身柄を奪ひとり、或は豪家の子弟の門前に遊び戯るゝを誘拐し去り、或は外國船の船長、高級乘組員を襲ひ之を人質にとるなど色々の方法により、先方に巨額の金員を身の代金として要求して來る。肯んぜざるに於いては日に指一本づゝ切つて皿に盛つて持つて來たり、甚だしいのになると片腕一本持參することすらある。左右兩腕切りおとされた十二三歳の良家の少年死體が寧波城外甬江の水上に流されてゐるのを見たことすらある。日清汽船の宜陽丸は大正十二年九月、四川萬縣のかみ涪州で匪兵タンツモ（湯子謨）軍に襲擊せられ船長細川氏は長江上流の露と消え高橋、宮崎の兩高級船員は人質にとられ十三ケ月間四川、貴州の山中を引ずり廻はされた。藁の中に寢かされたり虎の肉を與へられたり水深火熱の苦をなめさせられたのであつた。結局身

の代金十萬弗で蟲がつき會社側に身柄は引とられたのであつた。

匪賊が人類の敵であり良民の害蟲であることは天下周知の事である。しかし近來頻發する匪賊の種類は打つゞく動亂秕政の爲めに生じた敗兵の土匪稼ぎに轉業した手合である。その目的は金品人質の爲めにと云ふよりは銃器彈藥欲しさの仕事である。從軍をしてゐた時の味を覺えてゐるだけに一層始末が惡くその兇行は猖獗を極めてゐる。大正十二年五月五日夜津浦線の列車を脱線せしめ、數多の歐米人を人質にとり山寨につれ歸り貴女を蹂躙した孫美瑤頭目にからまる實話はあまりにも有名である。この不祥事から國際鋼鐵列車の急造を見るに至つた程に一大センセーションを起こさせたのであつた。かくして支那內地は奥深く入れば入るほど匪賊多く、之が巢窟としてのみ觀察を下さるゝの止むなきに至つた。加ふるに廣東に福建に、長江江上にと隨處に、海賊のうはささへ頻々と傳へられ、その影響は我か臺灣新竹の海岸にまでも波及してゐた。

中央政府の威力は長鞭馬腹に及ばずで如何とも術の施しやうがなく、いくら銃殺に附してもその甲斐なく、それが討伐を行へばその討伐隊が匪公とぐるになると云ふ狀態である。共產狩りに於いても亦同じ結果を見てゐるので手がつかない始末である。

しかし嘗ての張作霖こそその梟雄の末路を鐵道往生に了らしめたが清朝にしろ漢室にしろ昔から多くその鼻祖として第一世に立つ豪雄の士はかう云つた綠林生活に近い方面から身を起こし馬上で天下を取つてゐる。あまりに廣きに失する國土領域は、國土自體がかう云つた梟雄小雄の蜂起を蔚蒸せしめる條件となつてゐるとも見らるゝ。又中央に之を彈壓勦絕するだけの實力と德望を持つものが現はれない點もその間の主因の一つとなつてゐると斷定せらるゝのである。

兵隊生活

支那の軍隊は云ふまでもなく、雇兵であつて、募集によつて集まる者ばかりである。高級の軍人は日本の士官學校なり其他海外の留學生歸り、又、支那の軍官學校を卒業した者で成立つてゐるが、下級の一兵卒の殆ど全部は皆地方地方の雇兵で、大體十三歳から四十歳までと云つてゐるが、八九歳位から十一二歳位のも居り、稀には五十歳位の老人もゐて種々雜多、千差萬別の狀態である。兵隊といへば兵隊、人夫といへば人夫と云へる連中であつて、苦力に軍服を着せたやうな者もある。支那の汽車の中に車掌の切符を改めに附いて來るやうな立派な兵隊や憲兵といつた

やうな者が一般に居るのではない。何れも皆餘り身體にぴつたりと合つた軍服を着てゐる者はない。初めて軍服といふものを身につけたといふ恰好をしてゐる者が多いのである。

別段支那の兵隊を貶して玆に紹介する譯ではないが、中には雨傘を持つたり、提灯をさげたり、軍人らしくない姿をして滑稽味を帶びた者を見出すのであるが、動もすれば冗談半分に兵隊になつて見たので、月給が渡りさへすればすぐ止めるんだといふやうな腰かけ氣分でゐる者も澤山居るのである。又、敵味方の戰爭が酣になつて、愈々最後の對陣の時などは、一個師團、二個師團の隊長が出て來て、部下は全部一人殘らず分讓してもよろしいといふやうな話も持ちかける事もある。愈々爆彈投下でも初まるのかと恐れてゐると、その日の朝になつて、都合によつて今日の爆彈投下は止めにするといつたやうな佈が出ることがある。恰も田舍の鎭守祭のふれみたいなつもりでゐる。支那の戰爭くらゐ譯のわからぬものはない。どこまでが本氣でどこまでが冗談でやつてゐるのか、奇怪その物であるのは支那の戰爭であるといつてよい。或は延期の前に爆彈は金と交換に敵方に讓渡した事實があるかも知れない。馬賊の討伐隊の眞相などを見ても、折角山と積まれた對戰上の銃器彈藥が馬賊の頭目の所へ、金と相談で讓渡され、立派な上申書は罪な

き百姓の首を携へて來て、如何にも尤もらしく討伐の苦心談を物語るといふことも耳に挾んでゐる。これは事實ありさうなことであつて、馬賊土匪がその官軍正規軍以上の立派な銃器や短銃を持つてゐるのを見てもこの邊の消息が物語られてゐるのである。

かやうにその軍隊の側面觀を縱橫自在に素破拔けば種々の珍談が現はれ、立派な支那軍隊の內面が窺はれるのであるが、自分達の友人にも支那の中將、少將など將軍階級の者も多く、又、日本の士官學校を卒業して歸つていきなり少佐、中佐になつてゐるといふ友人は外にも多くゐる。それ故茲に餘り支那軍隊の內容を暴露することは禮を失する憾みもあるので、遠慮して置かう。然し兎も角支那の兵隊は武人らしき武人にあらずして禪味たつぷりの兵隊であつて、要領のよい融通のきく兵隊としては天下一品であるといふことが出來る。

嘗て四川省の田舍を歩いてゐた時、萬縣、重慶邊りの兵隊が夏の夕暮、揚子江の岸に立ち、綠滴る木蔭で喇叭の稽古をしてゐるのを見たことがあるが、遠くからその音を聞くならば、如何にも足並を揃へて威風堂々喇叭の稽古でもしてゐるやうに想像されたのであるが、事實は焉んぞ知らんその實際を見ると、その中の幾部分は老樹黃葛樹（ホアンコウシ）の根元に仰向になつて橫臥し、唯喇叭の口

を兩脣にあてゝ稽古をしてゐるのであつた。成るほど身體の樂（らく）なやうに大の字に寢そべつても胸は十分に張り、肺量豐かに喉笛を使つて喇叭の練習が正しく出來るといふことであれば一應不都合はない筈である。喇叭の練習はその肝腎の要領はそれだけで十分なのである。何も直立不動の姿勢をとつて練習しなければならぬといふ筈はない。要は喇叭の稽古で、その吹き方さへ上手に吹けるやうになればそれでよいのあるが、支那の兵隊はそんな考さへない。かくの如くして喇叭の音さへさせてゐれば、寢ころがつてゐようと橫臥してゐようと月給は貰へるのである。要は月給さへ貰へばその目的は達するのである。喇叭を兩脣にあてゝさへゐればよいといふやうな禪味たつぷりな考が彼等の頭を支配してゐるのであるが、これは讀者と共にもう少し支那の兵隊の心理狀態を一層深く研究して見たいと思ふ次第である。

要するに支那の兵隊をつかまへ、之をさも日本の軍人精神の下に鍛ひ上げられてゐる軍隊と同じやうな兵隊であるかのやうに考へるものがあると、大變な間違ひである。いくら精銳の何のと云つて見たところで支那の兵隊そのものは見縊つた云ひかたをする譯でもないが、日本兵の前には風に柳の如く、又暖簾に腕押し式のもの位にしか考へられぬ。支那兵の調練のとき、よく練兵

場でその實況を視察してゐると、あの「廻れ右前へ」をするときの足の運びぐあひなんかも、誠に文學的であつてどことなく優しみがあふれてゐる。どことなくそこに又愛嬌がある。そこに全く支那兵の特徴がある。

日本では兵隊ばかりが、軍人精神できたはれてゐると云ふ許りでなく、國民のすべてが擧國一致的に軍人かたぎに出來てゐる。やれ戰爭が始つたと云つたら、都市も農村もその積りになる。號外が出ると何をさて措いても、之に目をさらし懸命になり、その戰報を見たがつて、非常な興味と關心を持つてゐる。ところが支那では元來兵隊自身が軍人らしくない處へ持つて來て、國民の一般も皆一向に兵隊に不向きの氣持ちを有してゐる。道理で支那では昔しから、

ハオティエブターティン〔好鐵不打釘〕

ハオレンブタンピン〔好兵不當兵〕

といはれてゐる位、兵隊になることは喜ばれてゐない。諺に云ふ所はよい鐵であれば釘なんかに打たれることはなく、好い人であつたら兵隊には向かぬ。人間の屑見た樣な者でなくては兵隊にはならないのだとの事が之に諷刺されてゐるのである。日本では之と反對で相當な人物が軍人に

なり又國家も之を色々の方面で優遇し、待遇から昇進から叙勳から授爵から何から何までよくしてある。朝野萬般に於ける取り持ちがよいやうにしてある。因となり、果となり之が爲めに又相當人才が之に集まり、又腹のある人も之に向かふやうに出來てゐる。

ところで支那兵は、愛嬌と云はんか文學と云はんか誠に文雅のところが多分にあつて、銘々相當に要領のよい處を自已で開拓し、よくかせぐ。その邊は然るべくやつてゐる。日本では軍人で文才があり、著述などすると破格の昇進をしたり、又格段の恩典が受けられたりなどすることもあるが、又しかし反對にその爲めに失脚したり、疎んぜられたり、色々損をしてゐる者も少なくない。支那兵は日常生活の上から云つて見ても本來が國民皆兵でなく、自由な傭兵制度によつて集まつて來てゐるものであるから何等そこに軍人精神の根本基礎を持ち合はせてゐない。從つて支那兵には日本人の考へてゐない色々の支那兵かたぎなるものが存してゐる。曰く、

一、支那兵は國の爲めに命を棄てるとか、命を捧ぐるとか、所謂義勇奉公の考が一向にない。しかし近來はさうでない偉いのもあることはある。

二、支那兵は單に自已の食はんが爲めに、又食はせてもらはんが爲めに日給又は月ぎめで雇はれ

て來てゐると云ふ考の外には何の考もない。四川省の奥地の兵隊に就いて實地の質問をして見たことがある。それによると月二元しかもらはぬが、食費に一元、上役に一元はねられる。そこで手取りは何もない。全くゼロで只ばたらきのわけだと云つてゐた。それでは犬や馬同樣食はせでもらふだけだないかと云つたら、その通りだと云つてゐた。支那式に犬馬の勞とはかゝる處から出たことだとも云へる。

三、支那兵は被雇人、人夫見たやうなわけだから自發的に自分で働くなどと云ふ考はない。それに戸籍も何もある譯でないから、いや氣がさすと止めて遁げて歸るものがある。するとそれを防止する爲め、にげて歸る兵隊をうしろから銃殺して行くのである。

四、兵隊に渡る筈の毎月のものが時の都合で二ケ月も半歳も渡らぬことがある。すると鐵砲を敵の方に賣り飛ばして、賣つたかねを懐ろにし、やめて家鄉へ歸つてしまふと云ふ呑氣なものも澤山ある。

五、武裝解除された兵隊や、敗竄兵は、ばらばらになつて田舍へ歸還する。そのとき、やゝもすると途中の村里、田家を荒らして廻る。泥棒强姦勝手次第と云ふやうなことである。當局でも

もとの雇主でも萬々之を承知してゐるのだが、これは習慣上たいして惡い事とも思はず、唯良民をして警戒せしむるに止めてゐるのみである。

かやうな事實を次から次へと列べて來ると、支那兵は惡むべき惡徒ばかりのやうである。がしかし支那兵くらゐ又無邪氣で面白い先生はゐない。あの夜分になれば提灯をつけて歩るいてゐたり、又雨のとき雨傘をさして歩き出したり、夕立に出會はすと、いつまでも雨やどりして油を賣つてゐるところなど、丸で日本の酒屋の御用きゝか小僧邊りのなまけ者などに見るやうな處がある。そして軍隊内部の統制だの、軍人としての體面の事なんかは日本人のやうに神經質に考へない。たゞなるたけ死なないやうに、そして收入のあるやうにうまく渡つて行くことのみを心がけてゐる。之を兵隊としてでなく人間として見て來ると可愛いところがあるのである。

元來支那の兵隊と云へば無邪氣で子供見たやうなものである。欲しければ取り、いたづらがしたければいつ何時でもやる。そこに氣兼ねもなければ自制心もない。月給の渡つてゐないだけの損失額は掠奪の收得で以て埋め合はせをさせるやうに出來てゐるし、司令部の方でも大目にそれは認めてゐるやうなこともあるらしい。ところで人の場合はともかく、自分が先年安徽烏石壠と

云ふ石埭縣下の山村を行くときの事であるが、つれてあるいた兵隊の中には、民家の軒に吊してある小鳥を平氣の平左で鳥籠のまゝ外して失敬して行くのである。道は支那の兵隊の常として固まつて行かず遅れたるもの先きになれるものまち〳〵でだら〳〵である爲めツイその鳥籠のことも自分には最初暫くは氣がつかなかつたが、一行中兵隊でない新規の土民らしいものゝ加はつてゐるのでやつとそれと判つたのである。その土民から色々と聞いて見れば、そは小鳥の持主であつて半日以上も朝からそれ返してもらひたさに扈いて來てゐるとのことである。兵隊はそれとは知らずいたずらに持主の面前で、渡し舟から籠のまゝ水中に入れて小鳥に行水させたり散々に弄んでゐる場面を演じてゐるのである。持主の遠慮顔に話し出す事の次第をよく聞いて見ると兵隊に同情すべき處はないので、早速返さしめたと云ふくだらぬことなどがあつたのである。此の一事に見ても、土民はあとでその小鳥のことから敵きを打たれるのを恐れ云ひ出し得ないところもあつたやうであつたが、自分はつく〳〵之によつて支那の兵隊の人望のないのも尤もなわけであると思つた次第である。民國兵隊の爲めにその將來を思ひこゝに聊かこの苦言を提しておくことにしたのである。

華僑生活

支那民族で海外に生活を營んでゐるものが大約一千萬、そのうち約五百萬は南洋・馬來・暹羅ビルマ・安南方面にひろがつてゐる。かうした海外にあつてそれぞれ自分の天地を開いてゐる支那人を稱して支那ではホワチヤオ（華僑）と云つてゐる。

支那は國内に動亂が絶えまなく、又貪官汚吏が勢力を張り、匪賊が蜂起してその横行に戰慄すると云ふ有樣である。その爲め誰れ人も生れ故郷に生を安んずるの氣持がなくなる。産をなしてゐるものは税金徴發に堪へられなくなる。産なきものは安心して稼げる處があればそこへ出かけようと云ふ考になる。そこで五百年以前から否八百年の古へから南洋の別天地に進展した。そこに我が樂土を築き上げてくれてゐる先輩どもの行つてゐる處があればその跡を追うて渡航せんとする者の續出するのは當然の事である。わけても南洋の馬來半島、ジャヴア（爪哇）、スマトラを中心として其方面へ赤道直下の炎暑もいとひなく磁石に引つけらるる如く出かける。廣東から海南島から汕頭から又厦門福州から浙江方面からとかなり南支沿海地方のひろい部分から渡航者を

出してゐる。香港から毎航新嘉坡に向け出帆する汽船にはデッキパセンジャーとしてすばらしい勞働者の群が乘り込む。毎年々々その樂土を求めて伸び行く細民の數は幾十萬なるを知らない。これは從來山東の青島や天津から、滿洲國、大連營口さして出稼を運んでゐたデッキパセジャーの噸數（噸あたり十幾人）から見てもたいした結果を擧げてゐたとのことである。多い年には八十萬から百萬人の出稼ぎを見た。北支からは滿洲へ、南支からは南洋へと流れ出るこの趨勢は正に對內的にその政治の結果の香ばしからぬ事を物語るわけでもあるが、一つには又海外進出熱の常識化して來た事を物語れるものとも見られる。

その渡航者が山東から積み出さるるときの狀態は全く荷物扱ひで、港內岸壁の一角に船の横着けされた處へ向け綱製の大あみを張り芋か大豆でも積み込むやうな式に片パシから押し移して行く。誤つて海中に落つる者もある譯だが、それらは網に引かかり助かると云つたわけ。積み込まるる手合も恐らく人間らしい氣持は持つてもゐないらしく雨が降らうと火がふらうと平氣である。又あれだけの體力を持合せてゐる手合であるから山東からテクテク陸傳ひに歩いて行つても炎天の下を日射病一つかからず、テクリ了せるのである。そして滿洲に行つたものは從來滿鐵の

貨車や牛馬を載せる函で奥地にと運び込まれたものである。滿洲國奥地の開墾事業や又物貨の運搬、人力車などには之が少なからぬ貢獻をなしたものである。今日滿洲國の樹立せられた以上はかうした渡航者は何程かの制限が加へられる事になつた樣子である。

南洋へ向け香港廣東方面から渡航して出かける手合は山東苦力に比べたら幾らかましの方ではあるが、しかし目に一丁字なく嚢中無一物と云つたのが多く、船からは唯デッキの上の餘地と水の供給を受くるだけである。渡航中の食事はそれらの賄方を引受くる專門屋がゐて只同樣の安價な物を煮たきして出してゐる。たまには相當の人間もゐるが安く渡航せんがために群集の間に交るのである。船員がホースで水洗ひするときなど他の手合とはちがひ平氣を裝うてゐる。と云ふのは自分に組み立べッドを所持してゐるところから、聊かその選を異にしてゐる所を見せてゐるらしい。飯時になるとデッキへ同村出身なり同業者なりのものがグルウプを作り車座をなしてゐる。食卓なしにぢかに茶碗大皿がおかれる。熱いつゆが運ばれる。中には待ち切れず自分で行きなり茶碗をめし笹にぶち込み山盛りにもつて持つて來るといつたものもある。食事どきでなくとも邊りにニンニク臭の高きは、定めしあの安價料理の中にたつぷりと盛られてゐるせゐでもあら

う。赤道ま近かくなるといくら海上でも直射百二三十度と云ふ炎熱に、じりじり焦げる思ひがしさうなものであるに平氣で談笑したり又西瓜の皮を吐き出したりなどしてゐる。新嘉坡からペナンに渡航するときは華僑の外に南洋馬來人だの印度のキリン人種だの隨分漆黒の手合がそこへ割込んで來る。それでも平氣で御互様と、こんどは印度人のライスカレーの舌鼓をよそに不相變華僑はニンニク料理など頬張つてゐる。そばに黒狗の子のやうな黒い印度人の赤坊が罪のない笑顔を見せてゐる。目と二本の齒だけが白いので色彩は極めて鮮明である。船の一等客はヴェランダの上からかうした下界の光景を葉卷くゆらせながら見下してゐる。支那を船出して以來南國に向ふ船客は、あの赤道直下常夏の國でどう云ふ經濟戰鬪をなすのであらうか。

華僑は細民として船から港に上陸するとその日から小路に露店を出し商ひをする。十錢二十錢の零細なかねを溜め相當な額にしては相棒を見付ける。そして互に出し合つた小資本で又共同の露店を張り更にまうけては又一段と共同出資を擴大する。そして今度はそれぞれ手分けして買ひ出し仕入方と戸別訪門の販賣がたを受持つ、と云つた連んだ商賣振りをやりやがては製造元へでかけ直談判で安く買取るやうな方法まで講ずる。三年五年たつうち或る程度の共同資產が出來る

と之を出資の割りに分配し、こんどは人にたよらず、獨力で以て、終に目拔の場所にその道の商會商館の看板を掲ぐる處まで漕付ける。その間倦ます、たゆまず額に汗しても拭ふひまさへないと云つた努力振りである。當人は始めは廣東語だけであつたのがいつの間にか英語の片ことも話せるやうになる。英商と取引も出來るやうになる。かくして護謨山に、錫の山に、煙草に珈琲に、と南洋事業界に名を歌はるる天晴れの華僑となると云つたのが少なくない。新嘉坡四十萬の全人口中で三十七八萬までが華僑である。今では英商に商業資本を融通せる向も少なくなく市政府でも華僑の提案をすげなく否決などしたらあとが恐ろしいと云ふ處まで來てゐる。建源翁の一億萬の財產を作りあげた話は今は古くなつた。一人で同額以上のミリオネーアたる華僑はあちこちにと散見する。爪哇にスマトラに彼南にと豪奢な邸宅王宮を凌ぐ屋敷つづきの街は今は少なくない。而かもその子弟の教養には主人自ら之に當たり、徒らに外國留學かぶれなどせぬ堅實一點張りの律義ものもある。

船中一等客で葉卷くゆらしつつ見くだしてゐた某國の紳士たちは在留十年ならずして華美の生活に慣れたむくひとあつて遂に何一つ成功せず赤字の決算公示で華僑の手前氣恥かしく今は南洋

に居たたまれなくなり影を消すに至つたと云ふ皮肉な實例さへ少なくない。華僑の心の奥底には學問や教養の結果になる已惚れだの云ふものはない。唯無一物より仕上げ隱忍持久自力更生の外に何物もない。かねのかからぬ渡航をして大道商ひから叩きあげ小資本を作り、人にたよらず獨力で產をふやし地を見立てて之を買ひ求め、家を建て、百年の計を立つるといふのである。そこを樂土に更に更に大を期圖し石橋を叩いて渡る式の行き方に終始する。その間投機的の事にも手を出すことは出すが又いつしか盛り返し結局白人よりも印度人よりも、日本人よりも押しも押されもせぬ財閥華僑の實力なるものが確立されてしまつたのである。今や南洋は英の海峽殖民地や蘭領の殖民政廳があつたりするが事實上は支那人の天地となり華僑の樂土となつてゐる。自餘の各國民はその德澤に浴してゐると云つた形に大局の上から見られる。それだけに南洋は支那廣東、福建の風俗習慣が一般に漲り言葉の上に遊戯娯樂の上に料理の上に、街頭風景の上に南方支那の香のしない處はない位になつた。南洋各地のボーイと云ふボーイを支那海南島出身のもので獨占してゐるのも又面白い話題となつてゐる。

後篇　大地支那のにほひ

大自然の背景

濁流禮讃

人間の眼で見た範圍内で、水の清濁何れが快感を呼び起すか。これは大きく考へると頗る決定しかねる問題である。一つは習慣にも依ることであるが、又その人の屬する民族性にもよるのである。全然無頓着の人には何れだつて關係がない。然しそれにしても其の間多少の好き嫌ひがあるであらう。日本の如き山紫水明の地に國をなし、富士の秀嶺、鴨川の清流を理想としてゐる者の眼には隅田川の濁流などは少しも感心されてゐない。その眼で以て長崎を出て上海に向ふと百二十哩近くの太平洋上見渡す限り一面に黄色い濁流を見、更に進んで揚子江の江口に入り、又その支流に入りそしてその見渡す限りの水流といふ水流が、凡て之れ濁流のみである景色を見て長歎息せざる者はない。或は上海から四晝夜の間長江を溯り、漢口に向ひ、或は又漢口から上流に溯江する時、その遊客は必ずその濁流滾々盡きざる光景を眺めて、又長歎息して曰く、兩岸の柳色芦荻は孤帆の遠景と相映じ、えもいはれぬ大陸的光景を見せてゐるが、惜むらくはこの長江の水の濁流であること、この一點である。もしこの濁流と清流とを取換へることが出來たならば、

一段と長江の眺めが結構なものと云へるであらう、と清流好きの批評を下すのである。

長江の濁流を云々することは太陽の東から出るのを善くないとするのと同じく出來ない相談である。かやうな批評をする人は如何なる譯で自分自ら清流を見た時にのみ快感を覺え、濁つた水を見たときに不快の感を起すかを先づ以て反省して見ればよいのである。支那は有史以前幾百萬年の昔から恐らく地質學上アジア大陸の出來た時から長江の水の濁流はその本質的特徴となつてゐたであらう。一度も支那を覗いて見た事のない人は、百年河清と云つた黄河の水はその名の示すが如く濁つてゐたのであらうけれども、長江に來て濁流を見るとは少しも豫期しなかつたなどと云つてゐる。如何にも長江が濁流を漲らしてゐるのを非難せんとする如き氣分でゐる人もあるのである。之は自分ぎめの小さな物差で偉大な支那を測量せんとするのと同じである。何時もよくひく例ではあるが、日本の兒童に五色のクレオンを渡し、山と水を描いて見なさいと云ふ時には、きつと水を青色を以て描くにきまつてゐる。ところが支那の兒童に向つて同じ五色のクレオンを渡し、山水を描いて見なさいと云へば、必ず十人が十人黄色或は茶褐色の色を以てその水流を描くのである。これ程までに習ひ性となつてゐて、目に映ずるところ、頭に印象づけられてゐ

るところに非常なへだたりがある。恐らく今後幾萬年の後も四川省、西藏、青海方面の黄土質の地質の無くなつて了はぬ限り、永遠にその濁流は續いて行くものだと考へられる。

長江の水が濁流であるといふことはこれによつて幾多の支那の國民性が特色づけられてゐる。又ある意味に於ては支那人の大陸氣分はこの濁流によつて遺憾なく靜かに表現し盡されてゐるものと云はれる。昔から河海は細流を擇ばずといふ言葉があるが、恐らく長江の濁流はあらゆる清濁を擇ばず、濁の濁なるものでも優に之を受入れて行くのである。寧ろ清を入れるよりも濁を入れる方面の方が多い位である。固より江西省廬山の下に清水を湛へた鄱陽湖の如き紺碧の色を見せた湖水が長江に注いでゐるといふところもある。けれども、又湖南省の洞庭湖の如き春夏秋冬最も著しい濁流を湛へた一大貯水池が長江の中流に流れ込んでゐるといふやうなのもあつて、長江に注ぎ入るところの湖沼並に支流には清濁交々來り、實に複雜を極めてゐる。恐らく支那大陸の奥地を流れてゐる清流濁流の大半は或は南し或は北に走つて、結局この長江の大濁流に注ぎ込み之と合流して世界有數の大江となつてゐる譯である。宛然長江の流れは支那大陸に於ける、大自然界に於ける大人物の典型とも見られる。清水を湛へた溪流をも受入れ、又濁の濁なる湖沼の

水をも受入れて、結局湖の如くして數十哩に達する大きな江口を有し、南米のアマゾン河と相伯仲して東半球の大河のナンバーワンとなつてゐる次第である。

從つてその濁流の吐出す水の中には多大の黄土色沈澱物を河床に堆積し、その河口方面には崇明、馬鞍などを初めとし、幾多の三角洲を作りあげてゐる。その崇明島の如きは楊柳茂り田畑ひらけて都色を出現してゐる位である。長江の濁流は專門家の調査に據れば、一ケ年一平方哩に對して約八寸の高さに至る泥を吐出してゐるといふことであるから、今後幾千幾萬年の後には日本の肥前五島の方面に向つて幾多の三角洲を形成し得るかも知れない。薩摩の西海岸吹上の濱に見る十四里の間の松原は昔呉の太伯の頃長江の砂が波で打寄せられて出來た濱邊だと云はれてゐるが、自分の見たところではそれは花崗岩系統の土質であつて、長江方面に見る黄土質とは關係がなく、從つてこれが長江とか長江の延長に見るものとは物が違ふやうに思はれる。

何れにしても長江の大濁流は支那の大陸氣分を如何にもよく現はしてゐて、その水流の中には蕪湖附近に鰐魚が泳いでゐたことがあり、又その附近では鰐魚の剝製したのを賣つてゐるところがある。或は漢口の上流、長江の中流地方は江口から約八百哩九百哩の地點であるにも拘らず、

大きな海豚の群が黑い背中を現はして溯江中の楚客の目を驚かしたことが頻りであつた。

先頃四川省で魚類の研究に沒頭せられてゐた岸上博士の一行も之等の巨口細鱗に目を觸れられたことゝ思ふ。其他巨大な鯉魚の淵を遡り激湍と戰ふ傳說は、四川省三峽方面の長江にはいくらでも流布されてゐる。長江の濁流に基くところの珍談逸話は求めるに從つていくらでも得られるほどそれほど偉大なる力を住民に見せてゐるのである。長江は支那大陸住民によりて、測り知る事の出來ぬ偉大なもの、一つの神の如く考へられ、禹王が治水の事に全生涯を沒頭したのもこの長江のためであり、今猶各地方に禹王を祀つた古廟が見出される。

現に長江の本流支流の全體がその流域の住民を養つてゐることは全人口の大半二億萬以上と算せられてゐる。それ故生れながらにして世界的に長江の濁流その物は非常な力を以て江岸の住民から恐れられ、驚かれ、或は慈母の如く懷かしく思はれてゐる。謂はば二億萬の住民はこの長江を以て自分の命とも考へてゐるのである。從つて長江の濁流其物が支那の國民性を作り上げ、同時に大陸氣分の根本を殆ど無意識の間に築き上げてゐるのである。支那人の大陸氣分は濁を濁と自覺せず、當然のことゝわきまへ、賄賂も取ればまた謀反も企てる。破壞もやれば、一瀉千里

に片附けることもやる。百萬の大軍を動かして敵を攻め、一擧にして王者を氣取りもすれば、一夜のうちに大氾濫を被つてその勝ち誇つた氣分が、敢なくも槿花一朝の夢となつて流民の悲哀を感ずるといふやうなことも、殆ど是れ又無意識の間に演ぜられるのである。

水流もその量の少ない時には濁流を濁流として際立つて感ずるのであるが、河上河下見渡す限りその天際の間を流れるといつた長江の如き、大量の濁流となると、最早之を濁つた水として特別に考へなくなる。それが水の普通の狀態であるものとして感じ、濁流の意識が麻痺して了ふ。そこまで來なければ支那人の大陸氣分は徹底しないし了解し得ないのである。自分の周圍の取りまき連中に對していちいちその性癖、性質の濁れる點を氣にやんでゐては大きな仕事は出來ない。凡て之を受入れて而も受入れざるが如く堂々と押して出るといふその大陸的態度といふものは遺憾なくこの長江がその模範を示してゐる。その模範的氣分の中から老子の如き、又莊子の如き南方の思想を代表した一種の大人物が生れ出てゐる。自分は何處までも支那の大陸氣分を味ふには、無限の材料教訓並に貴重なるヒントが、この濁流そのものの中に暗示されてゐるやうな氣がしてならぬのである。玆に於いてか大地支那の香氣第一のものとして、自分は先づ以て長江の